



朝比奈
草摺曳
の
之圖



扇笏に云々
一扇を笏の
やうに持つ
て改まりた
る様

御前—虎御
前

になりてはよも出でじ。我またあらく怒りて出さんも耻辱なり。所詮難なきやうにうち
向ひ、賺さばや、と思ひければ、靜に歩み入りけるが、この殿ばら兄弟は、身こそ貧なり
とも、心は貧にあらばこそ。疎忽に入つて細頸うち落され悪しかりなん、と思ひ、扇笏
に取りなほし、畏つて、「これに曾我十郎殿の御入の由、父にて候ふ者承り、御迎のため
に義秀を參らせられて候ふ。何かは苦しく候ふべき。御出ありて親にて候ふものに、御
對面や候ふべき。それにまた某一期の所望の候ふ。御前の事ゆかしき事に、義盛思はれ候
ふが、御座を存じて義秀申し止めて候ふ。然るべくは諸共に御出ありて、父が所望をもか
なへ、義秀が面目施すやうに御計ひ候へ。一向頼み奉り候ふ。さりながら御心に違ひ候は
ば、罷り歸り候ふべし」と、障子越にいひければ、十郎聞きて、頼むといふに和きて、「左右
にや及ぶ朝比奈殿、いかでか異議に及ぶべき。立ち給へや御前、祐成も出でん」とて、烏
帽子の筒おし立て、直垂の衣紋引き繕ひ、虎を先に立てよ、各三人出でたりけり。さて
こそ竝み居たりける人々も、生きたる心地はしたりけり。誠に義秀の振舞優なるものか
な。座敷に事も起らず、虎も出でて、十郎も心を破らで事過ぎにけり。これやせうろ
んに、國の將にそきする事は奸臣にあり、家の將に盛に貴うする事は忠臣によつてなり、

深淵に臨ん
で云々—戰
々兢兢如レ

如レ臨 深
如レ踏 薄
氷—といふ
詩經の語

といへり。かやうの事をや申すべき。朝比奈なかりせば、よしなき事出で來、十郎も討
たれ、和田も人多く亡びて失せなん。誠に深淵に臨んで、薄氷を履むが如く、危かりし
事どもなり。

六 虎が 盃 十郎にさしぬる事

義盛は虎を見給ひて嬉しげにして宣ひけるは、「さて十郎殿の内にもしくけるや、他
所がましく心を隔て給ふものかな。御入を知り候はど、始より申すべかりつるものを、
これへく」と請ぜらる。十郎笏とりなほし、さん候ふ、御目にかよるべきを、異體の
無骨に候へば、罷り出でざる由色代して、左手の疊になほりけり。虎も座敷に定まれば、
盃前にぞ置きたりける。義盛虎をつくづく見て、「聞きしはものゝ數ならず、かよるも
のもありけるよ。十郎が心かねて出でざるさへ優しく覺ゆるにや。それく」といふ。
何となく盃取り上げ、その盃和田飲みて祐成にさす。その盃義秀飲みて面々に下
し、思さし思どりその後は亂舞になる。こよに復始めたる土器、虎が前にぞ置きたりけ
る。取り上げけるを今一度と強ひられて、受けて持ちけるが、義盛これを見て、「いかに

御前、その盃何方へも思し召さん方へ思さしし給へ。これぞ誠の心ならん」とありければ、七分に受けたる盃に、千々に心を使ひけり。和田にさしたらんは時の賞玩異議なし、されども祐成の心のうち恥し。流を立つる身なればとて、睦びし人を打ち置きながら、座敷に出づるは本意ならず、況してやこの盃義盛にさしなば、さらに愛でたりと思ひ給はんも口惜し、祐成にさすならば、座敷に事起りなん。斯くあるべしと知るならば、初より出でもせで、内にて如何にもなるべきを、再物思ふ悲しさよ。よしよしこれも前世の事。思はざることあらば、和田の前下りにさし給ふ刀こそ、妾がものよ。支ふる體にてもてなし奪ひ取り、一刀刺し、ともかくにもと思ひ定めて、義盛一目、祐成一目、心を使ひ案じけり。和田は我にならでは、と思ふ所に、さはなくて、「許させ給へ。さりとは思の方を」と打ち笑ひ、十郎にこそさよれけれ。一座の人々目を見合せ、これは如何にと見る所に、祐成盃とり上げて、「某賜らん事狼藉に似たり。これをば御前に」といふ。義盛聞いて、「志の横取無骨。如何でかさるべき。はやく」と色代なり、さのみ辭すべきにあらず。十郎盃とりあけ三度ぞ酌む。義盛居丈高になり、「年ほど物憂き事はなし。義盛が齡二十だにも若くば、御前には背かれじ。たとひ一旦嫌

色めきたる體一騒ぎ立つ模様

はるよとも、かやうの思さし、他所へは渡さじ。南無阿彌陀佛」と高聲なりければ、殊の外にがくしくぞ見えにける。九十三騎の人々も、義秀の方を見やりて、事や出で来なんと色めきたる體、さしあらはれたり。十郎もとより騒がぬ男にて、何程の事かあるべき。事出で来なば何十人もあれ、義盛と引つ組んで、勝負をせんするまで、と思ひ切り、嘲笑ひてぞ居たりける。

七 五郎大磯へ行きし事

こよに五郎時致は曾我に居たりけるが、父の爲に法華經誦みて、本尊に向ひ念誦しけるが、頻に胸騒しけり。心得ぬ今の胸騒や。いかさま祐成の大磯へ越し給ひぬるが、東國の武士共、富士野へ打ち出る折節なり。流の遊君ゆる事仕出し給ふにや、と心許なく思ひければ、帳臺に走り入り、緋緘の腹巻取つて引つ懸け、伊東重代の四尺六寸の赤銅作の太刀、十文字に結び下け、鞍置くべき暇なければ、裸馬に打ち乗り、二十餘町のその程を、たゞ一馬場に驅けつけ、見渡せば、長者の門のほとりに、鞍おき馬一二百疋引き立てたり。遠侍には物の具の音頻にして、唯今こと出で来ぬ、とぞ見えける。入る

物の具一甲 冑類の總稱

袴の着際一
袴の上部
上もなく云
々一無上な
る無禮の振
舞ぞと也

べきところなくして、門の外を廻り、日比祐成に行き連れて通りし細道を廻り、虎が居所にこそ着きにけれ。さて「十郎殿は如何に」と問へば、「和田殿の盃を論じて、唯今事出で来ぬ」と申す。さればこそ、と思ひ、透垣を跳ね越え、兄の居たりける後の障子を隔て立ちたりけり。時致是にありと知られん爲に、笄にて障子越に、袴の着際を刺しければ、十郎「誰ぞ」と問ふ。五郎小聲になりて、「時致是にあり」といふ。十郎聞きて、千萬騎の兵を後に持ちたるよりも、頼もしくぞ思ひける。義盛の聲として、「上もなく振舞ふものかな」と聞えける。祐成の御事ぞと心得、何事もあらば、障子一重踏み破り飛び出でて、一の太刀にて義盛、二の太刀にて朝比奈、その外の奴原何十人もあれかし、物の數にてあらばこそ、と思ひ切り、四尺六寸の太刀、杖につきて立つ。忍びかねたる有様は、たう八毘沙門の悪魔を降伏し給ふかとぞ覺えける。夕日脚の事なれば、太刀陰の障子に透きて見えければ、朝比奈是を見て推量し、誠や彼等兄弟は、兄が座敷にある時は、弟が後に立ち添ひ、弟が座敷にある時は、兄が後にあるものを、如何様五郎は後にありと覺えたり。さしたる事もなきに、大事引き出して、何の益かあらん。又さりとては親しき仲ぞかし。何となき體にもてなし、座敷を立たばや、と思ひければ、紅に月出

四天王を云
々一五郎の
荒くれ立ち
たる様の喩
廣目増長持
國毘沙門を
四天王とい
ふ

したる扇を開き、「何とやらん御座敷静りたり。詔へや殿原、はやせや舞はん」とて、既に座敷を立ちければ、面々にこそ囃しけれ。義秀拍子を打ち立てさせ、
君が代は千代に八千代を細石の
と絞り上げて、
巖となりて苔のむすまで
と、短く舞うてをさめけり。

八 朝比奈と五郎力競の事

かくて朝比奈三郎、舞も過ぎぬれば、五郎が立ちたる前の障子を引き開け見れば、案に違はず、時致は四天王を作り損じたる様にて、踏みしかりてぞ立ちたりける。朝比奈過たず、狂言に取りなして、「客人ましますぞや。此方へ入らせ給へ」とて、草摺二三間むすを取りて引きけれども、少しも働かず、磐石なりとも義秀が手をかけなば、動かぬことやあるべき、と思ひ、力に任せ、えいや／＼と引きけれども、五郎は物とも思はねば、引くともなく、引かるよともなく、嘲笑ひてぞ立つたりける。大力に引かれて 横縫草

横縫草摺
鎧の名所

側顔—横顔

摺こらへずして、一度に切れて、朝比奈は後へどうど倒れけり。五郎は少しも働かで、仁王立にぞ立つたりける。扱こそ五郎時致はみぎは優りの大力と、他所の人迄知りけり。實や此者の父河津三郎は、東八箇國に聞ゆる股野五郎に、片手を放ちて角紙を三番勝ちてこそ、大力の覺は取りたりしぞかし。その子なるをや。力競は叶ふまじ、賺さんものをと打笑ひ、「これく」と請すれば、「餘りの辭退は無禮なり。異體は御免候へ」といひく座敷に出でけるが、持ちたる太刀と草摺にて、末座なる人々の頸の廻り側顔を打ち殴り、さし越えく行き過ぎて、朝比奈が下なる疊に直りける。座敷に餘りて見えたりけり。朝比奈急ぎ座敷を立ち、義盛の前にありける盃を五郎が前にぞ置きたりける。時致盃とり上げて、酌に立つたる朝比奈に色代して、「御盃の前後は遅參の無禮御免あれ。御盃は賜り候ふ」とて、三度までこそ乾したりけれ。「その盃思ひ取り申さん」とて、元の座敷になほりけり。五郎も酌に手をかけ、「近くもまるらぬ御酌に、時致立たん」とゆるぎ立つ。四郎左衛門座を立つて、「某是に候ふ」とて、銚子に取りつけば、五郎も暫色代す。義盛これを見て、「客人の御酌然るべからず。それく」とありければ、常氏酌にぞ立たりける。朝比奈盃取り上げ三度乾す。その盃を虎飲みて義盛にさす。そ

の時扇笏に取直し、「今暫くも候ふべけれども、曾我にさしあたる用の事御座候ふ。後日におそれ申さん」とて、兄諸共に立ちければ、虎も同じく立ちにけり。一座も不興至極にして、和田は鎌倉へ通りければ、この人々はうち連れて、曾我へとてこそ歸りけれ。

九 曾我にて虎が名残惜みし事

まことにこの殿原の事は、これや名鳥昊天に翼をならべ遊ぶと雖も、沼澤に下りてきうその憂に遭ひ、大魚深淵の底に尾をふれども、陸に上る思あり、と見えたり。十郎も身に思のある者ぞかし。よしなき女の許にて、思はずの難に遭はんとしけるぞ、危ふかりし次第なり。かくて祐成は虎を具して曾我に歸り、常に住みける所に隠しおき、何時よりも細々とうち語りしは、「この度御狩の御供申し、思はずのおこしの矢にも中り、朽ちはつる埋木ともなるならば、身こそ貧に生れぬ、鬚なるちりの見苦しきよ、と人の言はんも口惜し。髪梳りて給ひ候へ」といひければ、虎は何としも思はで、數の櫛を取り散らし、暫く髪をぞ梳りける。十郎は女の膝に臥しながら、虎が顔をつくくくと見て、祐成を睦じと見んも、これぞ限なるべき、と思へば、流るゝ涙を見て、「例ならぬ御涙

おこしの矢
射おこし
たる矢の意
歟

束の間一暫
時の間

心許なさまよ。何なるらん」と問ひければ、「今に始めぬ事とは言ひながら、憂世の中の定なさよ。この程のよろづあぢきなく、何事も心細く覺ゆれば、徒に契りおきし同じ世の、名の立つ程も如何にやと思へば、心に浮ぶ涙の零るよぞ。實にや頼まぬ身の習、歎つ命も露の間も思しくこそ思はるれ。」「實にもさやうに思ひ給はゞ、この度の御狩思し召し止り給へかし。君に知らるゝ宮仕の暇なき業にも候はず。止り給へ」といひければ、「思ひ立つ御供なり。何事かは」といひながら、斯程深く思ふ中思ひ知らせず出でなば、情の色も絶えぬべし。せめて夢程この事を知らせばや、とは思へども、女は甲斐なきものなれば、飽かぬ別の悲しさに、止めん爲に母にもや語り廣めん。この度は思ひ定めたるもの故、叶はぬ事を母聞きて、思の種ともなりぬべし。または五郎も怨みなん。思ひ切りたる一大事、女にさぞといはんこと悪しかるべし、と思ひ切り、何ともしもなく戯れけり。忍ぶとすれどその色の怪しく思ひ奉り、「覺束なし」と問ひければ、深き思の切なるに、束の間も思ひ合はする事なくて、はてぬるものならば、後の怨も深かるべし。よし思出に一端を、いひてや心を安むる、と身の有様を思ふには、憂きが住の詮なくて、世には住まじのその故を、いかにといひて知らすべき。」「さればにや祖父入道の謀叛によ

つて斬られまらせし孫なれば、君にも召し使はれず御恩蒙ることもなし。況して先祖の本領は、年月餘所に見なすうへ、馬の一定もけなだらかに飼はず、又父のためとて經卷の一部も書かず。あるとしもなき身の仕儀、人に見ゆるも恥しく、面ならぶる便なし。さればこの度御狩より歸りなば、出家を遂げ、墨の衣に染めかへて、頭陀乞食して靈佛靈社に参り、父の後世をも弔ひ、わが身をも助からん、と思ひ候ふなり。世にありとも夢幻の如く、法身を残すべきにあらず。花山の法皇だにも、萬乗の位を去りて、山林に交り給ふぞかし。況してや貧道無縁の祐成が、何に命も惜しかるべし。今度の御供を最期に定め、再歸らじと思へば、飽かぬ別の道すて難くて」と申しければ、虎聞きもあへず十郎が膝にかより、暫は物も言はざりけり。稍ありて、「怨めしや問はずば知らせじと思し召すかや。實妾は大磯の遊君、あさましき者の子なれば、誠の道をも思し召さじなれども、女の身の果敢なき、身に代へてもこそ、と思ひ奉れ。見え初しよりなどやらん、思の色の深草よ、忍の袖の摺衣、忘れ奉る便もなし。御志は知らねども、御豫言の違ふをば、偽に又なるらん、と心を盡し待たれしに、さやうに思ひ立ち給はゞ、妾も同じく髮剃りおろし、墨の衣に身を覆し、一つ庵にあらばこそ、外に庵室引き結び、

闕伽一梵語
水のこと、
闕伽の水は
佛に奉る水

思出—後に
追想して心
慰む程のこ
と

衣を濯ぎて參らせん。香を供へ給はど花を摘み、薪を拾ひ給はど闕伽の水を掬び、一つ蓮の縁をも願はん。その睦をも否と宣はど、山々寺々を修行して、他所ながら見奉らん。それも憚り思し召さば、聞き給へ。身を投げ一日片時もながらへじ」とて涙に咽び申しけり。誠に十郎が膝の上も虎が涙に浮く許、袖も絞りぞかねたりける。十郎はつくづくと案ずるに、これほど思ひ入りたる志つゆ程も知らせずして、心強く隠し遂げぬるものならば、長き怨となりぬべし。若し立ち返らぬ習あらば、思ひ出して念佛をも申すべし。さればとて、人に漏すなといはん事を空にやすべき、その上日數なければ知らせばや、と思ひ、「此事母にだにも知らせ奉らで、過ぎしかども、御身のこころざし切にして、知らせ奉るぞ。洩し給ふべからず。眞の道心にもあらず、出家また遁世にてもなし。年比祐成が身に思ありとは知り給ひぬらん。その本意を遂げんと思へば、この度出でて後、再歸るまじければ、相見んことも今宵ばかりなり。さてしも何となく申し契りて、時の間と思へども、三年になりぬ。いつ思出もなく果てん事こそ無念なれ。御志の程こそ有りがたく思ひ奉れ。面々如きの人は、祐成風情の貧しく頼む所なきに、何によりてか露の情もあるべきに、三年の間の顔の、變らぬ色は常磐山、おのれ鳴きてや

おのれ鳴き
てや—拾遺
集、紅葉せ
ぬ常磐の山
に住む鹿は
おのれ鳴き
てや秋を知
るらむ

人々しき—
人並々の

時鳥、憂世の夢か朝顔の、果敢なくならん身の程を、恥ぢす忘れぬ情の袖、前世の事といひながら、過ぎにし事の恥しさよ。奉公の身ならねば、御恩の時ともいはれず、くわいせん身の身ならねば、理のあらん折ともいはれず、思出のなき事を思ひ出し給はんことよ」とて、さめくくと泣きにけり。虎もこの言葉を聞きて、また打ち伏して泣くより外のことぞなき。稍ありて起きなほり、「そもこれは何となり行く事どもぞや。是程の大事、女の身なりとも、いかでか人に洩すべき。一人まします母にだにも聞かせたてまつらず、振り棄てよ心強く思ひ立ち給はんこと、數ならぬ妾申すとも、止り給ふべきか。何につけても、飽かぬ別の道こそ悲みても餘あり。斯様の大事心おかす知らせ給ふこそ、返す返すも嬉しけれ。さてもこの年月の御馴染、いつの世にかは忘るべき。思ふに叶はぬ事なれども、御物具の見苦しきを見まらする折節は、人々しき身なりせば、などや便にもなり奉らざらん、としづ心を盡し明し暮しつるに、世を捨て何處ともなくならん」と仰せらるよをこそ、身の置處なかりしに、思も寄らぬ永き別路とならん悲しさよ」とて、聲も惜まず泣き居たり。十郎もせん方なくして、「餘な歎き給ひそ、人もこそ聞き候へ、名残は誰も同じ心ぞ」と慰めつと、「これを形見に」とて、「祐成に添ふと思し召せ」と

て、鬢の髪を切りて取らせぬ。虎は涙もろともに受け取り、肌はだの守まもりに深く納なめ、物をもいはず伏ふし沈しづみぬ。同じ枕まくらにうち傾かたむき涙なみだに咽むせぶばかりなり。日も既に暮くれければ、今宵こよひばかりの名残なごりぞ、と思おもひ遣やるこそ悲かなしけれ。千夜ちよを一夜いちよに重かさねても、明けされかと思おもはるよ、比ひさへ五月ごがつの短夜みじかよの、有明ありあけなれば宵よひの間の、待まちたるよ程ほどもなければや、出でづる出づると見れば一月が也

目結しぼり染

貝鞍青貝

夢ゆめ見る程ほどもまどろまで、東ひがしにたなびく横雲よこぐもの、東雲しのとめしらむ憂枕うれまくら、まだ睦言むつごの盡つきなくに、後朝きねけになる曉あかつきの、涙なみだに床とこも浮うきぬべし。互たがひの名残なごり心のうち、さこそと思おもひ知られたり。なほしも虎とらはうち臥ふして、消きえ入いるやうに見みえしかば、十郎じゅうらう彼かれを勇いさめんとて、「暇申いさまして祐成すけなりは、後生ごしやうにて参まゐり逢あはん」と驚おどろかせば、起おきなほりたるばかりにて、物ものいふまではなかりけり。「今いまを限かぎりの別わかれなり。後の世あとのよまでの形見かたみ」とて、十郎じゅうらう著きたりける目結めゆひの小袖こそでに、虎とらが紅梅こうばいの小袖こそでに著き換かへて、「心こゝろのあらば移香うつりがよ、暫しばし残りて憂うれき別わかれ、慰なぐさむ程ほども面影おもかげの、著き換かへし衣きぬに留とまれかし。互たがひの名残なごりつきせず」と、又また諸共もろどもに打うち伏ふしぬ。「幾いく萬世よろづよを重かさねても、名残なごりつくべきにあらず。祐成すけなりも途みちまで送おくり奉たてるべし。日ひこそ傾かたむき候まへ」とて、茸毛あしひなる馬かまに貝鞍かひくら置おかせ、團三郎門だんざうらうもんの邊はらに控ひかへたり。「この馬鞍かま返かへし給たまふべからず。この

に模様をすり出したる鞍

三年さんねん通とおひしに、馬かまは更かれど鞍くら變かはらず。鞍くらかはれとも馬かま更からず。今日けふを最期さいごの別わかれなれば、留とどめおきて永ながき形見かたみとも思おもひ給たまふべし。但ただし馬かまは生しやうあるものにて更かへることもあり、鞍くらをば失うしなはで持もち給たまへ」と、いひく馬かまにぞ乗のせたりける。

十 山彦山にての事

祐成すけなりも送おくるべしとて、馬かまに鞍くら置おかせ打うち乗のりて、「中村通なかつらどほりに行くべし。大道おほみちは馬鞍かまも見み苦し。虎とらを祐成すけなりが思おもふとは皆人みな知しられたり。伴ともの者ものどももかひくしからず」と、打うち連つれてこそ送おくりけれ。曾我そがと中村なかつらの境さかひなる、山彦山やまひこやまの峠たうげまで送おくり來きて、十郎じゅうらうこゝに駒こまを控ひかへ、今少いますこしも送おくりたくは候まへども、必かならずけさより出でんと定さだめしかば、定さだめて五郎ごらうも來きたらん。名残なごりは盡つくべきにあらず。この世よにて相見あひん事ことも今いまばかりぞ、と思おもへば、遣やる方かたなくして涙なみだに咽むせぶ許かりなり。遠近とほぢのたづきも知らぬ山中やまなかに、道みちもさやかに見みえ分わかず、かの松浦まつら佐用さよう姫ひめが領布りやうふ振ふる姿すがたは石いしになり、それは昔むかしの事ことぞかし。今の別わかれの悲かなしさに、駒こま近々ちかぢかとうち寄よせ、手てに手てを取り組くみ、涙なみだに咽むせぶ許かりなり。稍やりて、「祐成すけなりが心こゝろのうち推おし量はかり給たまへ。これにて年としを送おくるべきにあらず。唯一筋ただひとすぢに淨土じやうどの縁えんを結むすばん。來世らいせを深ふかく

たづき手
がかり

頼むぞ」と心強くも思ひ切り、控ふる袖を引き別けて、泣く／＼立別れけり。けにやか
 ん／＼の床の上には、遙に契を千年の鶴に結び、おんじやの筵の上には、遠く齡を萬劫
 の龜に歸して契りしかども、遁れぬ別の途は力及ばす。互に後を返り見、坂中にやすら
 ひて控へたり。幽に見えし姿も見えずなり行けば、そなたの空のみ返り見る。足曳の山
 の彼方の戀しさは、いづれも同じ心にて、現ともなき涙の袖、夢の如くにうち別れにけ
 り。思のあまりに、虎が馬の口控へたる團三郎に泣く／＼いひけるは、「祐成を見奉らん
 も、今ばかりの名残なり。何事も細々と、いひたかりつるを、涙にくれていひも盡さず
 取りわき暇乞ひ給へるに、返事せざりし心許なければ、今一度呼び返し奉りてたび候へ。
 物一言申さん」といひければ、團三郎、「唯世の常の出家遁世にてもなし」とて、さしても
 騒がざりけるが、斜ならざる互の歎を見て哀に思ひ、急ぎ走り歸り、遙に行きたりける
 十郎を呼び返し、もとの峠にうち上り、駒を控へて「何事ぞ」と問ひければ、虎は涙に目
 もくれて、思ひ設けし言の葉も、何時しか今は失せ果て、鞍の前輪にうちかより、消
 え入るやうに見えしかば、十郎わきていふべき言葉もなく、唯泣くばかりにてぞあり
 ける。稍ありて虎は息の下にていひけるは、「何時となくさぞと契らぬ夕暮も、駒の足並

五慾―五塵
 ともいふ色
 聲香味觸の
 五に關する
 慾情

八相成道―

響の音のする時は、若やと思ふ折々の、その人となき過ぎゆけば、その夜は空しく床に
 臥し、鳥もろともに泣き明かす、枕の上の塵の海、思を深く湛へつよ、夕の鐘の響には、
 暮るゝ便を待ちかねて、乾されぬ袖のそのまゝに、はかなかりける契かな。三年の夢は
 程もなく、別るゝ現になりにけり。さて何時の世に廻り逢ひ、斯かる思の又もや」と、
 聲を惜まず泣き居たり。「祐成身の上をつく／＼思ふに、罪の深きぞ知られたり。幼くし
 て父に後れ、本領だに他所に見なし、母一人の養育にて身命を延ぶると雖も、あるかひ
 もなし。この三年御身にだにも相馴れて、飽かぬ別の悲しさは、歎の中の歎なり。五慾の
 無常は春の花、娑婆は假の宿なり。秋の紅葉の風散りて、草葉にすがる露の身、後生弔
 ひてたび給へ」とて、東西へうち別れけり。

十一 比叡山 始の事

さても我が朝比叡山の始を聞くに、天地既に別ち、國未だ定らざる時は、人壽二萬歳
 を保ちける。迦葉尊者は西天に出世し給ふ。大聖釋尊はその教義を受け、都率天に住
 し給ふ。「われ八相成道の後、遺教流布の地何の處にかあるべき」といふに、この南閻浮

佛陀が成道
を中心とし
て始より終
に至るまで
に、一降兜
率、二托胎、
三出生、四
出家、五降
魔、六成道、
七轉法輪、
八入涅槃の
八相を示し
るをいふ

洲を普く飛行して御覽じけるに、ゑんく茫々たる大海の上に、一切衆生、四通佛性如
來、常住無有變異、かくの如く立つ波の聲あり。この波止らん處、一つの國となりて、わ
が佛法を弘め、通達すべき靈地たるべし、とて、彼の十萬里の滄海を凌ぎて行くに、葦
の葉一つ浮びたる所に、この波流れ止りぬ。今の比叡山の麓、大宮權現のおはします波
止土濃これなり。さればにや波止土濃なりと書けり。かく御覽じおきて、釋尊天に上
り給ふ。されば葦原の中つ國と申しならはせるは、この一葉の葦の故とかや。日本わが
朝は、葦の葉を表するとぞ申しならはせるとぞ聞えし。その後人壽百歳の時、悉達太子
と生じて八十年の春の比、頭北面西の時、跋提河の波と消え給ふ。されども佛は常住
にして不滅なりしかば、無緣法界の妙諦をあらはし給ふなれば、葦の葉の島となりし中
つ國を御覽じける時、鷓鴣草葦不合尊の御代なれば、佛法の妙事を人知らず。ことに
漣や滋賀の浦の邊に釣をする老翁あり。釋尊彼に向ひ、「翁もしこの處の主たらば、こ
の地を我に得させよ。佛法結界の地となすべし」と宣へば、翁答へて申さく、吾人壽六
萬歳の始より、この處の主として、この湖の七度まで葦原になりしをも、正に見たり
し翁なり。さればこの地結界となるならば、釣する所なかるべし」と深く惜み申せば

蝸牛の角の
上に云々一
變觸二氏あ
りて相争ふ
といふ事莊
子の寓言人
事の小なる
に喩ふ

釋尊力なくして、今は寂光土に歸らんとし給ふ時に、東方より淨瑠璃世界の藥師如來
忽然と出で給ひて、「善哉や〜はやく〜佛法を弘め給へ。吾人壽八萬歳の始より、この
處の主なれども、老翁未だ我を知らず、何ぞこの山を惜み申すべき。はや佛法を弘め給
へ。吾もこの山の守護として、共に五々百歳まで佛法を弘むべし」とて、二佛東西に去り給
ふ。その時の老翁は今の白鬚の大明神にてましくける。東方よりの如來は中堂の藥師
にてぞましくける。釋迦藥師の東西に歸り給ひき。今の十郎と虎がゆき別るよには違
ひぬる心なるをや。蝸牛の角の上何事をか争ふ、石火の光のうちに、この身を寄せつら
ん。名残の道盡くべからず、後世參り逢はん、といふ中にも、團三郎が心も恥しと
て、思ひ切りてぞ別れける。虎は峠に手綱ひかへ、祐成の後姿の暮るよまで見送りけ
る。さてしもあらねば、泣く〜大磯にぞ歸りける。母の許に入りしかば。友の遊君ど
も廣縁に出でて、「思ひ掛けざる今の御入かな。何時となき山路の寂しさ、推し量りて」
など戯れけれども、虎は馬より下ると同じく、衣ひきかづき打ち臥しぬ。遊君ども集
りて、「何とてこれ程御歎き候ふやらん。十郎殿に捨てられおはしますか」と、様々に慰め
けれども、かくといふべき事ならねば、唯うち臥し泣き居たり。人々討たれての後にこ

二世一現世
と未來

そ、かくとは申し聞かせけれ。團三郎申しけるは、「殿も今朝より御出あるべきにて候ふ。急ぎ御暇を申さん」といふ。虎は彼を近く呼び寄せ、「三年が程馴れにし汝にさへ、別れなん事もやあらん、と思へば」とて、袖を顔におし當て、さめんと泣きければ、團三郎返事にも及ばず涙を流しけり。「昔が今に至るまで、主従の縁浅からぬ事ぞとよ。構へて思ひ忘るな。二世までも朽ちせぬものぞ」といへば、團三郎暇乞ひて出でにけり。志は二世までも盡きせじ、とこそ覺えけれ。

十二 ぶつしやうこくの雨の事

されば縁により佛果を得る事を思へば、昔ぶつしやうこくに血の雨降りて國土紅なり。帝大きに驚かせ給ひて、博士を召して御尋ありければ、占象をひき申しけるは、「今宵不思議の子を生むものあり。尋ね出して遠き島に捨てらるべし」と申しければ、舍衛城のうちに、その夜子生みしもの千人なり。その中より選り出して見るに、口より焰を吹き出す子を生みたる者あり。即ちこれを人まうとぞ名づけよる。これ不思議の者として、官人に仰せ付けて島に捨てけり。然るにこの人まう、やうく成人する程に、猛き鬼の姿

八つの苦一
生苦、老苦、
病苦、死苦、
愛別離苦、
怨憎會苦、
求不得苦、
五陰盛苦、

になりけり。この島に来る者を洩さず取りて喰ふ。また國に罪ある者をこの島に流せば、これをも取りて喰ふ。七萬二千人までぞ喰ひける。その罪盡し難し。佛これを感み給ひて、阿難尊者を使ひ奉りて、善知識たち引導し給ひけるとかや。人まうは阿難を七度見奉りし結縁に、七度天上に生じて佛果を得たりとなり。かやうの縁を思ふには、彼等が後世もなどや一つ蓮に生ぜざらん、頼もしくぞ覺えし。さて十郎が心の猛きこと、四方にも聞えしかども、さしあたる恩愛の道には迷ふ習なり。實に夏の蟲の飛んで火に入り、秋の鹿の笛に心を亂し、身を徒になすこと、高きも卑しきも力及ばぬはこの道なり。八つの苦の中にも、愛別離苦と説かれたり。内典外典にも深く戒め給ふとなり。

十三 嗟峨の釋迦作り奉りし事

さても五郎待遠なる折節來りて、「この者を送りて今まで時を移しぬ。如何に遅しと思議に思ひ給ひけん」とぞ申しける。五郎承り、「昔もさることの候ふ。釋尊母の報恩の爲に忉利天に上り給ふ、帝釋聞き給ひて、毗首羯磨といふ天人を下し給ふ。優填王悦びて旃

檀にて如來を作り奉り、何を寫したる姿とも見えすぞ作りける。優填王悦の餘に、毗首羯磨を止められければ、「吾はこれ善法の胎宮なり。留るべからず」とて、遂に天に上りぬ。その像を立装三藏盗み取りてこの國に渡し、多くの衆生を濟度し給ふ。今の嵯峨の釋迦これなり。ましてや人間として、如何でか恩愛を思はざるべき。十郎聞きて「大きに違ふ心かな。優填王は利益方便の戀なれば、愚癡凡夫輪廻の執着なり。一つにあらじ」と笑ひて、各富士野の出立をぞ急ぎける。

曾我物語 卷第七

一 千草の花見し事

それ迷の前の是非は、是非ともに非なり。夢の中の有無は、有無ともに無なり。されば我等が身の有様、あればあるが間なり。夢の憂世に、何か現と定むべき。されば刹那の榮花にも、心をのぶる理を思へば、無爲の快樂に同じ。いざや最期の眺して、暫し思を慰まんとて、兄弟ともに庭に下りて、植ゑ置きし千草の榮えたるを、見るにも餘波ぞ惜しかりける。心のあらば草も木も、いかでか哀を知らざるべき、と彼方此方に休ひけり。是によそへて古き歌を見るに、

古里の花のものいふ世なりせばいかに昔の事を問はまし

今更思ひ出でられて、情を残し哀をかけずといふ事なし。五郎聞きて、「草木心なしとは申すべからず、釋迦如來涅槃に入らせ給ひし時は、心なき植木の枝葉に至るまでも、歎の色を現しけり。我等が別を惜み候ふやらん。いかでか知り候ふべき」とて草を分けよ

古里の―後
拾遺集の歌
涅槃―梵語
不生不滅の
義釋迦の死
をいふ

深見草一牡丹の和名

花開き落ちて云々一白樂天の牡丹芳の詩中の花開花落二十日、一城之人皆如狂

れば、卯の花の蒼みたるが一房落ちたりけり。十郎これを取り上げて、「いかに見給へ五郎殿、老少不定のならひ、今にはじめぬ事なれども、老いたる母留り、若き我等が先立ち申さん事、是に等しきものを、開きたるは留り、蒼みたるは散りたるや。名にし負ふ忘草ならば、餘波を思ひてや散りつらん。それは昔住吉に、諸神影向なりける事あり、御歸を留め奉らんとて、此の花を植ゑて忘草と名づけ給ひけるなり。歌にも、

もみぢては花咲く色を忘草ひとあきながらふたまちのころ

其の忘草は、紫苑とこそ聞きて候へ」とて、なほ草村に分け入りければ、深見草の盛と咲きたるを見て、「卯の花は蒼みてだにも散るに、此の花の思ふ事なけにさかりなるや。いかに咲くとも二十日草、盛も日數あるなれば、花の命も限あり。あはれ身に知る心かな」と涙ぐみければ、五郎聞きて、「此の草の事は、花開き落ちて、千日同じく、一城の人誑すが如し、と見えたり。これは樂府の詞なり。又歌にも、

名ばかりは咲かでも色の深見草花さくならばいかで見たまし

と口ずさみければ、十郎聞きて、「此の歌は未だ咲かざる時も、色深き草とこそ詠みたれ、盛の花には心や違ふべからん」と戯れけるにも、哀を殘さぬ言の葉はなかりけり。無慙

を誤り引けり

なりし志どもなり。「さて我等が思ひ立つ事、母に露程もしらせ奉るべきか。はからひ候へ」といひければ、時致聞いて、「思ひもよらぬ御事なり。是程思ひ定めざるさきは知らず、今はいかでか事變じ候ふべき。其の上人の子が、謀叛起して出で候はんに、其の親聞きて、急ぎ死にても思はせよとて、悦ぶ母や候ふべき。それがしたど御形見を給はつて、最期まで身に添へ、此方よりもまた參らせて、罷り出でんとこそ存じ候へ」。十郎聞きて、「實に此の儀然るべし。さらば其の序に。御分が勘當をも申し許して見んとて、母の方へぞ出でたりける。

二 小袖乞の事

十郎御前に畏り、扇笏に執り申しけるは、「奉公を致し御恩被るべき身にては候はねども、末代の物語に、富士野の御狩の御供に思ひ立ちて候ふ。恐入りたる申事にて候へども、御小袖一つ貸し給はり候へ」と申しければ、母聞きて、「君臣を使ふに禮を以つてし、臣君に仕ふるに忠を以つてす、と論語の中に候ふぞや。何の忠によつてか御感もあるべき。御恩なくば無益なり。哀此のたびの御供思ひ止り給へかし。それをいかにと

練貫—縦を
生糸横を練
糸にて織り
たる絹

いふに。伊東殿の父、奥野の狩場より病つきて歸り、幾程なくて死に給ひぬ。御分の父
河津殿、狩場にて討れ給ひぬ。かよる事どもを思ひつゞくるに、狩場程憂き所なし。し
かも謀叛の者の末、上にも御許なきぞかし。又馬鞍見苦しくて物を見れば、却つて人に
見らるゝものを、思ひ留りて、親しき人々の方にて慰み給へ。斯様に申せば小袖惜むに
似たり。善くは無けれども、紋柄面白ければ」とて、秋の野に、草盡縫うたる練貫の小袖
一つ、取り出してたびにけり。十郎、畏つて障子の中にて着替へ、我が小袖をば打ち置
きて出でぬ。亡き後の形見にとぞ思ひおきたりける。五郎は不孝の身にて、兄が方に空
しく泣き居たり。よくく物案するに、母の不孝を許されずして、死なん事こそ無念
なれ。推參して見ばや。生きたる程こそ仰せらるゝとも、死して後悔み給はん事疑な
し。思ひきり申して見ん、とて、母の方へは出でたれども、さすがに内へは入り得ず。廣
縁に畏り、障子を隔てよ、「そも誰が御子にて候はん。時致にも召替の御小袖一つ賜り
て、狩場の晴に着候はん」。母聞きて、「誰そや、來りて小袖一つといふべき子こそ持た
ね。十郎は只今取り出でぬ。京の小次郎は奉公の者なり、二宮の女房は、又かやうに
いふべからず。禪師法師とて乳の中より捨てし子は、叔父養育して越後にあり。又箱王

ばうじ—忘
じ歟

とて悪者のありしは、勘當して行方知らず。是はたゞ、武藏相摸の若殿原の貧なる妾を
笑はんとてかく宣ふ、と覺えたり。然も留守居の體見苦し。早門の外へ出で候へ」と、事の
外にぞ宣ひける。時致思ひ切りたる事なれば、「其の箱王が參りて候ふ」。それは誰が許
しおきたるぞ。女親とて卑しみ候ふか。左様には候ふまじ。とても斯様に侮らるゝ身、七
代まで不孝するぞ。對面思ひもよらず」とぞ言はれける。五郎は許さるゝ事は叶はずし
て、結句後の世まで、と深く勘當せられて、前後を失ひ思にばうじ果てよぞ居たりける。
稍ありて小聲になりて申しけるは、「斯様の身に罷り成りて、重ねて申し上げべき事、上
までは恐にて候へば、女房達心ある人あらば聞こし召せ。人の親のならひ、盜する子は憎
からで、繩造る者を恨むるは、常の親のならひにて候ふぞや」。母聞きて、「左様ならん者
を和殿が母にして、妾がやうなる者をば親とな思ひそとよ。人の言葉を重くせず、言葉を
かへすは善き子かとよ」。御言葉を重ねて、御返事を申さじとてこそ、御前の人々に
は申し候へ。左様に申すはかへり事にては無きか。一念の瞋恚には、具抵切の善根を
たき、刹那の怨がいには、無量億劫の苦報を招く。聞けばいよく腹ぞ立つ。其の座敷立
ちて」と宣ふ。「恐れながら普門品をば遊ばし候はずや」。「いかなる觀音の誓にも、掟を

背く者を許し候へとは説き給はぬぞとよ。

三 しゃうめつ婆羅門の事

「恐れながら、事長く候へども聞こし召され候へ。昔天竺に、しゃうめつ婆羅門といふ人あり。物の命を千日に千殺して、悪靈に生れんといふ願を起し、早九百九十九日に、九百九十九人の生物を殺し、今千日に満ずる、日西山に上りて見れどもなし。曲江に下り船に乗り、海中に出でて、比翼の龜を一つ捕りて害せんとす。母是を悲みて渚に出でて見れば、波風高くして、雲雷電夥しき其の中に、婆羅門龜を害せんとす。母是を見て、其の龜放せ。汝が父の命日ぞ。婆羅門聞きて、忌日ならば沙門をこそ供養せめ、といひて、おさへて殺さんとす。龜涙を流して、我八十年の後、かふたちこく大慈大悲こ畢生安樂國、とぞ泣きける。母是を聞き、汝龜の言聞き知れりや。知らずと答ふ。龜は罪深きものにて、萬劫の罪障を経盡し成佛すべきに、今劍に従はざ、又多劫を経かへすべき事の悲しさよと也。願はくは其の龜を放して、自らを殺し候へ、といふ。誠に龜の命に代り給ふべきにや、と言ひも果てず、龜を海上に投げ入れ、即ち劍を抜きて母に向ふ

沙門一僧

奈落一地獄

時、天神地神も是を捨て給へば、大地裂け割れて奈落到し沈む。母を殺さんとする子の命を悲みて、心ならず母走り向ひて婆羅門が鬚をとり給へば、即ち頭髮抜けて母の手にとまり、其の身は無間に沈みけり。されども龜を放せし功力によつて佛果を得、法花經の普門品に、婆羅門神と説かれたり。斯様の子をだにも、親は憐むならひにて候ふものを。母聞きて、「や殿、それも、母がいふ事を聞きて、龜を放ちてこそ成佛はし給へ。汝何とて妾が教を聴かざるぞ。」「悪き子を思ふこそ、實の親の御慈悲にては候へ。又母の憐の深きには、事長く候へども、或國の王、一人の太子の無き事を歎き、天に祈りし感應にや、后懷妊し給ふ。國王の悦斜ならず、されども三年迄生れ給はず。公卿詮議ありて、博士を召して尋ね給ふ。勘文に曰く、御位は轉輪聖王たるべし。但し御産は平なるまじ、と申す。后聞き給ひて、賢王の太子いかでか空しくすべき。自らが腹を裂き破りて王子を恙なく、取り出すべし、と宣ふ。大王大きに御歎あつて許し給はず。后さらば干死にせんとて、食事を留め給ひしかば力なく、大臣に仰せつけて、御腹を裂かれにけり。其のなかばに后仰せられけるは、太子の誕生如何と問はせ給ふ。御恙なしと申せば、悦び給ふ色見えて、打ち笑みたるまゝ、御年十九にてはかなく成り給ひぬ。さ

こんれんだ
いー金蓮
歟
しこんー紫
雲歟

て此の太子、御位に即き給ひしが、母の御志を悲み、御菩提の爲三年胎内にて苦め奉りし日數千日にあてよ、千間に御堂を建て給ひけり。今のしかん寺是なり。日本には西の寺なり。さればにや后即ち成佛し給ふ時に、こんれんだいを傾け來迎し給ふ。其のしこんに準へて、藤を多く植ゑられたり。さてこそ藤の名所には入りたりけれ。母親の慈悲は斯様に候ひしなり。母聞きて、「老いたる自らあはぬ教のむつかしくて、腹をも裂きて死に亡せよとな。汝も母と見ず、妾も子とも思はぬぞ」とて、障子荒らかにたて給ふ。時致は此の度許し給はずしては、永劫を経るとも叶ふまじければ、五郎うち捨てよ。

四 斑足王の事

「仁玉經の文をば御覽じ候はずや。昔天竺に帝一人ましますに、太子おはしき。名をば斑足王と申す。外道等他の教訓につきて、一千人の王の首を取り、塚の神に祭り、其の位を奪ひ大王にならんとて、數萬の力士を集めて、東西南北、遠國近國の王城に、押し寄せくからめ捕り、既に九百九十九人の王をとり、今一人足らでいかどはせん、といふ。或外道教へて曰く、是より北へ一萬里行きて王あり、名をばふみやう王といふ。是

過去七佛の
法一過去の
七佛を請し
祈請する法
四大一地水
火風の四、
人身を作る
十二因縁一
人間の生死
輪廻する様
に十二の階
段を設くる
佛説

をとりて一千人に足すべし、といふ。やがて力士を差し遣し、彼の王をとりぬ。今は千人に満ちぬれば、一度に首を斬らんとす。こよにふみやう王合掌して曰く、願はくは我に一日の暇を得させよ。故郷に歸り、三寶を請じ頂戴し、沙門を供養して、闇路の便にせん、といふ。易き間の事とて、一日の暇をとらず。其の時王宮に歸り、百人の僧を請じて、過去七佛の法より、般若波羅蜜を講讀せしかば、其の第一の僧、ふみやう王の爲に偈を説く。こうせうしうこつ、けんこんとうねん、須彌巨海、といけやう、と述べ給ふ。ふみやう王此の文を聞きて、四大十二因縁を得たり。法華無くうを悟る。さればにや斑足王、諸法空の道理を聽聞して、忽に悪心を翻して、捕籠むる千人の王に曰く、面々の科にあらず。我外道に勧められ、悪心を起す、不思議の至なり。今は助け奉るべし。急ぎ本國に歸り、般若を修行して、佛道をなし給へ。即ち道心起して、無上ほうにんを得たりと見えたり。是もふみやう王を許してこそ、俱に佛果を得給ひしなり。母聞きて、「其の如く佛果を請じて、多くの人を助くべき汝、などや法師になりて妾をば救はぬぞ。實や重きに從つて、道遠ければ、休む事地を選まずして仕へよ、とこそ古き言葉にも見えたれ。何とて妾がいふ事を聞かざるぞ。」五郎も思ひきりたる事なれば、

おそれければ—おそれれば歎無慚—可憐に

吳越も云々—この二國は中のわるときに喩ふ、らんでいはこんでい(昆弟)の誤也敵たう—敵黨なるべし

居直り畏つて、「たゞ御慈悲には御許し候へ」とのみぞ申し居たりける。十郎は我が所にて、五郎を待てども見えざりけり。餘におそれければ、又母の方へ行き見て見たれば、五郎内までは入り得ず、廣縁に泣きしをれて居たり。餘に無慚に覺えて、障子を引き明け畏つて、五郎が理をつくぐと聞き居たり。やゝありて、「某兄弟數多候へども、身の貧なるによつて、處々の住居仕る、たゞあの者一人こそ連れ添ひては候へ。祐成を不便に思し召され候はど、御慈悲を以つて御赦し候へかし。御子とても御身に添ふ者、我等二人ならでは候はぬぞかし」。母聞きて、「心にあふ時は、吳越もらんでいたり、合はざる時は、骨肉も敵たうたり。智者の敵とはなるとも、愚者の伴とはなるべからず。位の高からぬをば歎かされ、智惠の深からぬをば歎くべし」とは、漢書の辭ならずや」。十郎承りて、「それはさる事にては候へども、觀經の文を見るに、諸佛念衆生、衆生念佛、父母常念子、子不念父母」と説かれて候ふ。此の文を釋すれば、佛は衆生を思し召さるれども、衆生佛を思ひ奉らぬところ見えて候へ。親として子を思はぬは無き者をや」。母聞きて、「汝等は親のよきを申し集むるかや。いで又自ら子の孝行なる事をいひて聞かせん。孟宗は雪の中に筍を得、王祥は氷の上に魚を得、くわけんは眼を抜きを

地の重き事は云々—不孝者を載すれば地神重きに苦む也

んしやうは耳を焼き、ちそくは足をきる、せんめん舌を抜き、くわそくははを施し、くわうふめいは身を温め、をしき子を殺す。是れ皆々孝行の爲ならずや。扁鵲もしんやくをしやうぜざる病をば治せず、けんしやう王も善言の聞かざる君をば用ひず、ところ申せ。人の詞を聽かざる者、何の用にかたつべき。其の上不孝の者をば、同じ道をも行くべからず。急ぎ出でよ」とぞいひける。祐成重ねて申しけるは、「一旦の御心を背き法師にならざるは、不孝には似て候へども、父母に志の深き事は法師によるべからず。僧俗の形にもよらず。時致箱根に候ひし時、法華經一部讀み覺え、父の御爲にはや二百六十部讀誦す、毎日六萬遍の念佛怠らずして、父に回向申す、と承り候へば、大地を戴き給ふ堅牢地神も、地の重き事は候ふまじ。不孝の者の踏む跡、骨髓に徹りて悲み給ふなり。一つは彼の御跡をも弔ひ、一つは御慈悲を以つて祐成に御宥し候へかし。父に幼少より後れ、親しき者は身貧に候へば目も懸けず。母ならずして誰か憐み給ふべきに、斯様に御心強くましますれば、立ち寄る蔭もなきまよに、乞食とならむ事不便に覺え候ふぞや」。あはれ實に今を限と申すならば、いかゞ安かるべきに、申すべき事ならねば、忍の涙に目もくれて、しばしは物をも言はざりけり。なほも「宥す」と宣はねば、十郎怒りて

見ばやと思ひて、持ちたる扇さつと開き、大きに目を見出し、「兎ても角ても生甲斐なき冠者、ありても何か益あらん。御前に召し出し、細首打ち落して見参に入れん」と、大聲を出して座敷を立つ。女房達驚き、「いかにや」と取りつく袖にひかれて、板敷荒く踏み鳴し怒りければ、母も驚きすがりつき、「物に狂ふかや殿、身貧にして思ふ事叶はねばとて、現在の弟の首を斬る事やある。それ程迄は思はぬぞ。しばしや殿」と取りつき給ふ。事こそ善けれと思ひければ、「助け候はん。御宥し候へ」といふ。母、「さらば宥す。留り候へ」と宣へば、其の時十郎怒を留めて。聲を柔にし座敷になほり、畏り居たりける。されども忍の涙のすよみければ、とかく物をば言はざりけり。五郎も恨の涙をひきかへて、嬉しさの忍の涙しきりにして、前後を更にわきまへず、たゞ慎んでぞ居たりける。

五 母の勘當宥さるゝ事

やゝありて十郎座敷を立ち、「御宥あるぞ時致、こなたへ参り候へ」。五郎はしをるゝ袖に忍びかね、暫しは出でこそかねたりけれ。暫ありて時致、袖打ち拂ひ顔おしのごひ出でけ

まぼりー見
つめ

昔にー昔の
追慕に
勸學院ー藤
氏の子弟
の學問所、
勸學院の雀
蒙求を囀る
といふ諺あ
り

れば、十郎も嬉しくあはれにて、打ち傾き居たり。兄弟共に物をも言はず、只さめくくと泣き居たり。母此の有様を見て、「實にや親子の中程哀なる事なし。年老い身貧にして、人数ならぬ妾が詞ひとつを重くして、泣きしをるゝ無慚さよ。片端なる子をだにも、親は悲しむならひぞかし。いかでか憎かるべき。たゞ善かれと思ふ故なり」といひもわかで、母も涙を流しけり。其の後兄弟の者ども、畏り居たるを、母つくくくと守り、いつしかの心地して、「汝自らを愚にや思ひけん、十郎がある處を見るに、五郎ありといふ時は心やすし。無しと聞けば心許なくて、妾も立ちて見るぞとよ。此の三年が程うち添はで、怨めしく悔しく思はれて、つくくくと見るに、直垂の衣紋、袴のきぎは、烏帽子のざしきに至るまで、父の思ひ出でられ、昔に袖ぞしをれける。さても五郎は箱根にても聞きつらん、十郎はいかにして經文をば知りけるぞや」。祐成承り、「馬瘠せては毛長く、嘶ふるに力なし。人貧にして智短く、言葉賤し。何によつてか尊くも候ふべき」。女房達聞きて、勸學院の雀とかや申しければ、母打ち笑みて、「それく酒飲ませよ」と有りければ、種々の肴、盃取り添へて、二人の前にぞ置きたりける。母取り寄せ飲みて、其の盃十郎飲む。其の盃五郎三度ほして置きければ、其の盃母取り上げて、「三年不孝

音とり調子を合せ

君が代は云々後拾遺集大江嘉言の歌

の事只今宥したるしに、此の盃思ひどりにせん。但し親と師匠に盃さすは、必ず肴の添ふなるぞ。當時鎌倉にては、秩父の六郎が今様、梶原源太が横笛と聞く。されども他人なれば見もし聞きもせらればこそ。和殿は箱根に在りし時、舞の上手と聞きしなり。忘れずば舞ひ候へかし。十郎腰より横笛取り出し。平調に音とり、「いかに遅し」と責めければ、暫し辭退に及びけるを、十郎はやし立てと待ちければ、五郎扇ひらき、かうこそ諍ひて舞うたりけれ。

君が代は千代にひとたび居る塵の白雲かゝる山となるまでとおしかへしく、三遍踏みてぞ舞うたりける。其の儘調子をふみかへて、

わかれのことさら悲しきは親の別と子の歎
夫婦の思と兄弟といづれをわきて思ふべき
袖に餘れる忍音をかへして留むる關もがな

と二遍せめにぞ踏みたりける。母は昔を思ひ出づれば、彼等はさてもうき命、近きかぎりの涙の露、思はぬよそ目に取りなして、袖のかへしに紛らかし、しばし舞うてぞ入りたりける。かくて酒も過ぎければ、十郎畏つて、「今度御狩に罷り出で、兄弟が中にい

鶴の丸一鶴の羽を廣げ丸くしたる紋様
したるめ一こしらへ

かなる高名をも仕り、思はずの御恩にも預り候はど。卒塔婆の一本をも心易くきざみ、父聖靈に供へ奉らばやと存じ候ふ。母聞きて、「などやらん此の度の御狩の御供、心もとなく覺ゆるぞや。よき程にも候はど。思ひ留り給へかし。さりながら衣裳の望もあれば、小袖惜むに似たり。それく女房達」と宣へば、白き唐綾に、鶴の丸とどこころ縫ひたる、小袖一つ取り出し、「十郎にも取らせぬるぞ。失はずして返し候へ。十郎は常に小袖を借りて返さず。是は曾我殿の見知りたる小袖なり。一度とも見えすは、又例の子供に取らせたり、と思はれんも恥かし。小袖をしたよめて置くべし。構へてく疾く歸り給へ」とありければ、「承り候ふ」とて、練貫の着損じたるに脱ぎ更へ、「見苦しく候へども、人にたび候へ」とてぞ置きにける。小袖のほしきにはあらねども、互の形見のかへ衣、袖なつかしく打ち置きけり。扱も兄弟は座敷を立ちければ、母見送り宣ひけるは、「過ぎにし比十郎小袖を借り二度とも見せず。いかなる遊びものにも取らせぬるよ、と思ひしに、さはなくして、弟の五郎に着せけるぞ。又近き比大口直垂仕立てと取らせしを、是も二度とも見せざりしが、團三郎に着せたりと思へば、是をも弟に着せけるぞや。誠に兄弟をば、野の末山の奥にも持つべかりけるものをや、父には幼くして後

れ、一人ある母には不孝せられ、貧なれば親しきにも疎くなり、あるか無きかの世になし者、誰やの人か憐むべき」とて、涙をはらくと流し給ひければ、真座にありし女房達俱に袖をぞ濡らしける。さて兄弟の人々は、我が方様に歸り、小袖を中におき、「嬉しくも推参しつるものかな。只今宥されずしては、多生劫を経るとも叶ふまじ。生きて二度歸るべきやうに、小袖返せ、と仰せられつるこそ愚なれ。何しに返せとは言ひつらん、神ならぬ身の悲しさよ、と後悔し給はん事今の様に覺えたり」とて、打ち傾きてぞ泣き居たる。「我等世にありて、心のまよに親の孝養をも致さば、是程まで思はぬ事もありぬべし、此の三年こそ不孝の身にては候へ、それさへ戀しく思ひ奉りし折は、或時は物ごしにも見奉りて慰みしに、只今御宥を被り、一日だにもなくして出でん事こそ悲しけれ。死に給へる父を思ひて、孝養せんとすれば、生き給へる母に物を思はせ奉る。されば我等程親に縁なき者はなし。後の世迄盡きせぬものは、たゞ手跡に過ぎたる形見はなし。今や我等一筆つつ忘形見を残さん」とて、墨すり流しかくばかり、

今日出でてめぐり逢はずは小車のこのわのうちに無しと知れ君

祐成生年二十二、後の世の形見

ちよぶ山云々一秩父に父を懸け母にはくそ(杵)を懸く

はやる一はやまる

とぞかきける。

ちよぶ山おろす嵐のはやしきにえだ散り果てよはよいかにせん

五郎時致生年廿歳、親は一世の契とは申せども、必ず浄土にては参り逢ふべしとこそ書きたりけれ。各々箱に入れて、「我等討れぬ、と聞き給はゞ、此所に轉び入りて、伏し沈み給ふべし。いざやこしらへせん」とて、疊敷き直し、めん廓の塵うち拂ひ、先見給ふ様にとて、さしいりの障子の際にぞ置きたりける。「空しき人をば常の所よりは出さず、我等死人に同じ」とて、厩のあれ間より出でたりける。最後の文にこそかやうの事まで書きにけれ。かくて出でけるが、「いざや今一度母を見奉らん」とて、暇乞にぞ出たりける。母宣ひけるは、「構へて人と諍し給ふな。世にある人は貧なる者やば、烏澁がましく思ひ侮るべし。左様なりとも咎むべからず。三浦土肥の人々は、さやうにはあらじ。其の人々に交り睦び給へ。心のはやるまよに、人のあひつけたる鹿を射給ふべからず。公方の御許もなきに、弓矢持たずとも出で給ふべし。謀叛の者の末とて、咎めらるゝ事もやあらん。いかにも事過し給ふな。年比憎まれずして養ぜられたる曾我殿に、大事かけて恨かけ給ふな」と、細々とぞ教へける。五郎は聞きても色に出さ

空にかすみの云々霞

ず、十郎はかやうの教も今を限と思ひ、心の色も現れて涙ぐみければ、急ぎ座敷を立ちにけり。五郎も餘波に涙を押へかね、よそめにもてなし立ちけるが、妻戸の敷居に蹴躓きうつ伏にこそ倒れけれ。されども人目に漏らさじとて、「色ある小鳥の、東より西の梢傳ひしを目につけ、思はずの不覺なり」とて打ち笑ひける。母是を見給ひて、「今日の道思ひ留り候へ。門出悪し」と有りければ、五郎立ち歸り、「馬に乗る者は墜ち、道行く者は倒る、皆人ごとのならひぞかし。さればとて留り候はんには、道行く者も候はじ」と、打ち連れてこそ出でにけれ、五郎はなほ母の名残を慕ひつゝ、今一度とや思ひけん、「扇の見苦しく候ふ」とて歸りにければ、母是をば夢にも知らずして、「折節扇こそなけれども」とてたびにけり。時致これも形見の數と思ひ、母の賜りけるよ、と思へば、扇さへなつかしくて、開きて見れば、霞に雁をぞ書きたりける。折にふれなば夏山の、繁る梢の松の風。五月雨雲の晴間より、遠里小野の里續き、我等が道の行末も、見るべきに、さはあらで、其の色違ふも理なり。憂身の上と案ずれば、古き歌を思ひ出でて、

同じくは空にかすみの關守りて雲路のかりをしはしとぞめん
これは爲世の卿の詠みし歌ぞかし。我等限の道を歎けども、誰ありて留むる者もなきに

が關となり 歸りゆく雁をしばしとぞめよと也 烏帽子のざしきト座敷にて頭につきたる様なるべし

扇心のあるやらん、しばしといふ言の葉の詠まれたるかな。さても十郎が供には團三郎なり。五郎が供には鬼王其の他四五人召し具して、打ち出でける有様、母は女房達ひき連れ、廣縁に立ち出で見送り、さまざまにぞ宣ひける。「直垂の着様、行膝の引合、馬の乗姿、手綱の取様、十郎は父に似たれども、器量は遙の劣なり。五郎は烏帽子のざしき、矢の負様、弓の持様に至るまで、穩なる體父には少し似たれども、是も遙の劣なり。山寺にて育ちたれども、色黒くけすしく見ゆる。十郎は里に住みしかども、色白く尋常なり。我が子と思ふ故にや、いづれも清けなる者共かな。いかなる大將軍といふとも恥しからじ。あはれ世にあらば誰にか劣るべき。同じくは彼等をば、父諸共に見るならば、いかに嬉しくありなん」と、さめんとこそ泣き給ふ。女房達これを見て、「物への御門出に、御涙いまはし」と申しければ、「誠に彼等が貧なる出立、漫なる事ども思ひつらねられて、袖のみ昔にぬれ候ふぞや。けに、千秋萬歳と、榮ゆるべき子ども門出なり。嬉しくも言ひ出し給ふものかな。此の度御狩より歸りなば、上の御感被り、本領悉く安堵して、思のまよなる歸るさを待つべき」とてぞ、急ぎ中にぞ入り給ふ。後に思ひ合すれば、これぞ最後の別なり、と今こそ思ひ知られけれ。哀なりし次第なり。

李將軍一名は廣、漢の將軍として匈奴を伐ちて功あり、此の一段は將軍の虎を見て石に矢を射中てたりこの俗傳に基づきて假作せり

六 李將軍が事

扱も鎌倉殿は、相澤が原に御座の由聞えしかば、此の人々も駒に鞭を添へて急ぎける。道にて十郎いひけるは、「名残惜しかりつる故郷も、一筋に思ひきりぬれば、心のひきかへて先へのみ急がれ候ふぞや」。時致聞きて、「さん候ふ。思ふ程は現、過ぐれば夢にて候ふ。心のまよに本意を遂げ、浮世を夢になし果てよ、早く淨土に生れつよ、戀しき父、名残惜しかりつる母、かく申す我等まで、一つ蓮の縁とならん」とて、ひつかけくうつて行く。稍ありて十郎申しけるは、「我等が有様をものに譬ふれば、命々鳥に似たり。それをいかにといふに、大唐しくう山に雪深うして、春秋をわかざる山あり、其の山に頭は二つ胴一つある鳥あり。彼の山には青き草なければ、食ふべきものなし。されば、其の左の頭、偶餌食を求め服せんとすれば、右の頭中にて、取りて奪うて食ふ、或時、思ひけるは、所詮毒の虫を求め、右の頭を退治せん」と思ひ、毒の虫を求めいつもの如く服せんとす。彼の頭また奪うて食ふ。されば胴一つにてありぬれば、その身もいかでたまるべき、遂に空しくなる。其の鳥も明暮に、右は左をとらん、左は右をとらんとせしぞか

し。我等も敵の手にやかゝらん、敵をや手にかけん、と思ふ憂身のながらへて、いつ迄物を思はまし。此の度はさりとも」と申しければ、五郎聞きて、「弱き御譬を仰せ候ふものかな。何によつてか空しく敵の手にかゝり候ふべき。本意を遂けて後は知り候はず、それは兎も角も候ひなん。事長くは候へ共、昔大國に李將軍とて、猛く勇める武勇の達者あり。一人の子の無き事天に祈る憐みにや、妻女懐妊す。將軍喜ぶ處に、女房言ふ様、生きたる虎の肝をこそ願ひなれ。將軍易き事とて、多くの兵を引き連れ、野邊に出でて虎を狩りけるに、却て將軍虎に喰はれて亡せにき。乗りたりけるうんしやうれうと言ふ馬、鞍の上空しくして歸りぬ。女房怪みて將軍虎に喰はれるや、と問へば、れう涙を流し膝を折り泣けども叶はず。わが胎内の子は、父を害する敵なり、生れ落ちなば、捨てん、と日数を待つ處に、月日に關守無ければ、程無く生れぬ。見れば男子なり。いつしか捨つべき事を忘れ、取り上げ、名をかうりよくと付けてもてなしけり。名將軍の子なれば、胎内より、父虎に喰はれるを安からず思ひ、敵取るべき事をぞ思ひける。光陰矢の如し、かうりよく早七歳にぞなりにける。或時、父重代の刀をさし、角の着きたる弓に、神通の鐙矢を取り添へ、厩に下り、父乗りて死にけるうんしやうれうに向つて

曰く、汝馬の中の將軍なり。然るに父の敵に志深し。父の取られける野邊に、我を具足せよ、と言ふに、馬黄なる涙を流して膝を折り、高聲に嘶えけり。かうりよく大に喜びて、かのれうに乗り、馬に任せて行く程に、千里の野邊に出でて、七日七夜ぞ尋ねける。八日の夜半に及びて、ある谷間に、獸多く集り居たる其の中に、臥長一丈餘なる虎の、兩眼は日月を雙べたる様にて、紅の舌を振りて臥しければ、肝魂を失ふべきに、さる將軍の子なりければ、是こそ父の敵よ、と矢取つてさし番ひ、よつびいて放つ。過たず虎の左の眼に射立てたり。少し弱ると見えければ、かうりよく馬より飛んで下り、腰の刀を抜き、虎を切らんと見ければ、虎にては無くして、年経たる石の苔蒸したるにてぞありける。かやうの志にて、つひに敵を討つ。今の世の石竹と言ふ草、かうりよくが射ける矢なり、とぞ申し傳へたる。されば弓取の子は、七歳になれば、親の敵を討つとは、此のこゝろなり。志により、石にも矢の立ちさふらふぞや。歌にもこのこゝろをよみけるにや、

虎と見て射る矢の石に立つものをなど我が戀のとほらざるべき」
 十郎聞きて、「や殿、歌物語心得ず。祐成如何なる鬼神なりとも、遁さじとこそ思ふぞと

よ。などわが敵討たであるべきと語れかし」「けにや折による歌物語、あしく申すと覺ゆるなり。歌は兎もあれ角もあれ、此の度は敵討たん事易かるべし。老少不定の習なれば、もし我等敵に先立たば、惡靈ともなりて、取るべき者をや」と戯れつゝ、馬に鞭打ち急ぎけり。

七 三井寺の智興大師の事

十郎は、「足柄を越えて行かん」と言ふ、五郎は、「箱根を越えん」と言ふ所謂有り。此の三年別當の呼び給へども、男になりける面目なさに、見參に入らず、序に打ち寄りて、御目に懸るべし。最後の暇をも申さんとて参りたり、と思し召さば、聖經の一卷も、陀羅尼の一遍なりとも、弔ひ給ふべき善知識なり。其上、師の恩を重くすれば、法にあづかる例あり。近き比の事にや、園城寺に智興大師とて、めでたき上人渡らせ給ひけり。顯密有驗の高僧と聞えけれども、未だ肉身を離れ給はざりける故に、重病に冒され、苦痛惱亂辨へ難し。則ち晴明をよびて占はせけるに、「定業限にて助かり給ふべからず。たゞし多き御弟子の中に、報恩重くし命を軽くして、師の御命に代るべき人まし

園城寺一三井寺
 顯密一顯は
 天台宗密は
 眞言宗

清明—安倍氏天文博士たり花山一條天皇頃の人
うたてし—嘆かはし

まさば、まつりかへん」と申す。上人は苦痛の儘に、誰とはのたまはねども、御目を上げて、御弟子を見廻し給ふ。並び居給ふ御弟子、二百餘人あれども、我代らんと仰せらるる方一人も無し。目を互に見合せ、赤面し給ふ色あらはれにけり。うたてかりし御事なり。爰に證空阿闍梨と申して、十八に成り給ふが、末座より進み出でて、「吾報恩のあはれみ盡し難し、何としてか報じ奉るべき。吾等が命なり共、代り奉る身なりせば、喜の上の喜、何事かこれにしかんや。はやく」とて、墨染の袖をかきあはせ給ひて、晴明が前に跪き給ふ。上人聞こし召し、惱める御眦に御涙を浮べさせ給ひて、御顔を振り上げ、本尊の御方を御覽じけるは、證の命を御惜みありて、御身はいかにもと思し召さる。御容顔顯れたり。是又御慈悲の御志とぞ見えける。證空重ねて申されけるは、「深く思ひ定めて候ふ。變すべきにも候はず。其の上上人の苦惱を見奉るに、刹那の間も惜しくこそ候へ。御心に任すべきに非ず。急ぎ法會を行ひ、祀を急がれ候へ。但し八旬に餘る母を持ちて候ふ。今一度今生の姿を見々え候ひて歸り参るべし。暫時待ち給ふべし」とて、暇請うてぞ出で給ふ。證空阿闍梨を、哀と言はぬ者はなし。其の後母の許に行き、此の事委しく語り給ふ。母聞きも果てず、證空の袖に取り付き、「思ひも寄らず、師匠の

不孝する—
不孝の罪に
よりにて勘當
すること

御恩許にて、母があはれみをば捨て給ふべきか。御身を殘し、みづから先立ちてこそ順次なるべけれ。思ひもよらぬ例」とて、證空の膝に倒れかゝり、涙に咽ぶばかりなり。證空は母の心をと静めて、「よく聞く聞こし召せ。師匠の御恩徳には、何をか譬へて申すべき。はかなき仰ともおほえて候へ。」「はかなき母が生み置きてこそ、尊き師匠の恩徳をまかうぶり給へ。母の恩大海よりも深しとは、誰やの人かいひおきける。」「親は一世師は三世、浅き憐なり。知らせ給ふらん。」「何とて情はましまさぬぞ。今日の命を知らぬ身の、恥をば誰が隠すべき。叶ふまじ」とて取りつきたり。「聞き給はずや、淨飯大王の御子悉多太子は、一人おはします父大王を振りすて、阿羅々仙人に給仕し給ひしぞかし。」「それは生きての御別、これは死すべき別なり、喩にもなるべからず。」「御詞の重きとて、只今かくれ給ふ師匠をや殺し奉るべき。」「誠にみづからものならずば、暇を乞ひても何かせん。七生まで不孝するぞ」と言はれつゝ、うち轉び給ひけり。かくて證空進退ことに谷り、師匠の恩徳を報じ奉らんとすれば、母の不孝永劫にも遁れ難し。身の置きどころなかりければ、母の御前に跪き、「不孝の仰悲みても餘あり、奈落の責いつをか期せん。此の世は假の宿なり、未來こそ實の住所にて候ふ。師匠の命に

もだしがた
さに一黙止
し難き故に

代り奉らば、御迎にも参るべし。さあらば一つ蓮の縁にも、などかはならで候ふべき。思し召しきり候へ」とて、餘波の袂をひき分る。母はなほも慕ひかね、「さらばみづからをも連れて、ひとつ蓮の縁になし給へや。捨てられて老の身の何となるべき」と、たゞ悲み給ふ。阿闍梨は母をなだめかね、斯様ならんと思ひなば、中々申し出すまじかりつるものを、又は母に暇申さずとも、思ひ定むべかりつる事を、心弱くて斯様に憂目を見ることよ。惜み給ふも道理なり。只一人ある子なり、一日片時も見奉らぬだに心もとなくて、暇なき行法の間にさへ、心ならず思ひ見奉る事なし。まみゆる事遅き時は、杖にすがり來り給ひて、跪き背後に立ち、夏は扇をつかひ、冬は暖むるやうにしたよめ給ふ。これ然るべからず、と申せども、「幾程もなきみづからが、心に任せてくれよ」と仰せられければ、上人も憐みありて、心に任せよと御慈悲あるによつて、片時も離れ給ふ事なし。我また御憐のもだしがたさに、隙をはからひ見奉らん、と通ひしぞかし。けにも今更別れ奉りなば、さこそ悲しくましますまめ、と思へば、涙もせきあへず。誠にみづから亡せなば、やがてもだえ入り給ふべき志なれば、立つも立たれず居るも居られず、只惘然として泣く許なり。なほしも母は、ひかへたる袂を放さで寄りかより、泣き沈み給ひ

阿字一梵語
十二母音中
の最初の言
語文字阿字
より生ずと
爲す

ければ、袖ひきわき難くて、掌を合せ、「みづからが申す道理、よく聞くしめし候へ。惜み思しめさるゝ御事、僻事には存じ候はず。さりながら豫ても申しと如く、此の世は夢幻と住みなし給へ。佛と申す事は外になし。我がなす胸のうちに、明かなる月輪の曇らぬを悟と申す、埋るゝを迷と申し候ふ。されば佛は、衆生に善惡へだてなきよし、説きおかせおはしますものを、然あらば親となり子となり、師となり弟子となる、これ皆一心の願により、三箇大事悉く阿字の一字にこそ、をさまりて候へ」と怒りければ、母ひかへたる袖を少しゆるしける處に、兼恩入無爲信實報恩謝の道理を、つぶさに説きければ、母涙をおさへて、「さらば」とて許しけり。證空は嬉しくて、急ぎ坊に歸りけり。誠に孝行の程、天衆地類もあはれみを爲し給ふべきにや。

八 泣不動の事

晴明遅し、と待ちし事なれば、七尺に床をかき、五色の幣を立て並べ、きんせんさんぐ數の供具、菓子を盛り立て、證空を中にするて、晴明禮拜恭敬して、珠數さらりと押しもみ、上は梵天帝釋、四大天王、下は堅牢地神八大龍王まで勸請して、既に祭文に

五躰一體と
兩手兩足
五臟一心肝
肺腎脾の五
機關

きやうじや
一行者なる
べし

及びければ、牛王の渡ると見えて、種々のさんせん幣帛、或は空に舞ひ上りて舞ひ遊
び、或は壇上を跳り廻る。繪像の大聖不動明王は、利劍を振り給ひければ、其の時晴明
座を立つて、珠数をもつて證空の頭を撫で、「平等大慧一乘妙典」と言ひければ、すなは
ち上人の苦惱さめて、證空に移りけり。頓て五躰より汗を流し、五臟を破り、骨髓を碎
く事いふに及ばず。是を見る人、晴明が奇特の貴さ、證空の志のありがたさに、上下袖
を絞るばかりなり。さて證空の頭より烟立つて、苦痛忍びがたかりしかば、年來頼み奉
る、繪像の不動明王を睨み奉り、「わが二つ無き命師命に奉ず、召しとらしめ屍を壇上
に留めん、と正念に住して、安養淨刹に迎へ取り給へ。ちがしんしや即身成佛、あやま
ち給ふな」と、一心の願をなしければ、明王あはれとや思しけん、繪像の御眼より、紅
の御涙はらくと流させ給ひて、「汝貴くも報恩を重くして、一人の親をふりすて、師命
に代る志はうじても餘あり、我またいかで汝が命に代らざるべき。きやうじやを助
る大聖明王の誓、地藏薩埵に限らず、受くるところの苦痛を見よ」と新に靈驗顯れけれ
ば、明王の御頂より、猛火ふすほり出で、五體より汗を流し給ふ。貴しとも忝しと
も、言葉にもいひがたし。すなはち證空が苦惱止まり、智興大師も助かり、證空も誓

にあづかり給ふこと、有難かりし例なり。されば三井寺に泣不動とて、寺の寶の其の一
なり。流させ給ひし御涙紅にして、御胸まで流れかよりて、今にありとぞ承る。誠に
師匠の恩かやうにこそありたきものなれ。

九 鞠子川の事

鞠子川一相
摸、今酒匂
川といふ

「箱根を忍び出で候ひし時は、權現にも御暇をも申さず、まして師匠にかくとも申さざり
し事、今に其の恐残りて覺え候ふ」と申しければ、十郎もさこそとて、箱根にぞ懸りけ
る。鞠子川を渡りけるが、手綱かいくり申しけるは、「和殿三つ祐成五つの年より、廿餘
の今まで、此の川を一月に四五度づつも渡りつらん、いかなる日なれば、今渡り果てん
事の悲しさよ。などやらんいつよりも、此の川の水濁りて候ふ。心許なし」といひけれ
ば、五郎申す様、「皆人の冥途に赴く時は、物の色變り候ふとな。我等が行くべき道、曾
我を出づるは、娑婆を別るよにて候ふ。此の川は三途の川、ゆさかの峠は死出の山、鎌
倉殿は閻魔王、御前祇候の侍どもは、獄卒阿防羅利、左衛門の尉は善知識、箱根の別
當は、六道能化の地藏菩薩と念じ奉る。此の川の水、色變ると見えて候へ」とて、駒打ち

阿防羅利一
ともに梵語
地獄の獄卒
と鬼

入れけるが、やふありて十郎、

さみだれに淺瀬も知らぬ鞠子川波にあらそふ我が涙かな

五郎聞きて、歌の心あしくや思ひけん、むかばきづつみ打ちならして、かくぞ詠じける。

渡るより深くぞたのむ鞠子川親のかたきに逢瀬と思へば

かやうに思ひつらねて、通るところは、阿彌陀の院じゆ、かさま寺、湯本の宿を打ち過

ぎ、ゆさかの峠に駒を控へ、弓杖突きて申しけるは、「人生れて三箇國にて、果つるとは

理なり。我等生るゝ所は伊豆の國、育つところは相摸の國、最期どころは駿河國、富士

の裾野の露と消えなん不思議さよ」。五郎聞きて、「其の最期所が大事にて候ふぞ。心得給

へ」といさむれば、「仰せにや及ぶ」と宣へども、さすが故郷の餘波や惜しかりけん、我

が故郷の方をはるゝと眺むれば、只雲のみかより、何處をそことも知らねども烟少し

見えたるは、もし曾我にてや候ふらん」。團三郎これをかへり見て、「烟は曾我にて候は

ず。それより南の黒き森に、雲のかよりて候ふこそは、曾我にて候へ」と申しければ、古

き事どもの思ひ出されて、十郎、

曾我はやしかすみなかけそ今朝ばかりいまを限の途と思へば

此の人に云
々十郎と
同じ心に悲
しみては

とうち眺め涙ぐみければ、五郎此の有様を見て、此の人に同心しては、はかなくしき
事あらじ。いさめばやと思ひければ、怒り聲になりて、「殿こそは、大磯、小磯、曾我故
郷をも眺め給へ。時致に於ては思ふ事こそ急がはしく候へ」とて、駒ひき退け駈け出し、
二町許駈け通りぬ。十郎興さめて思ひながら、駒駈け出し追ひつきけり。五郎ひきさ
がり、口説きけるは、「人界に生を受くる者、誰かは最後の餘波惜しからで候ふべき。鬼
王團三郎が心をも御恥ぢ候へかし。彼等をば曾我へ歸し候ふべし。若此の事叶ひて候は
ば、申すにや及ぶ。仕損する者ならば、此の人々が、此處にては歌をよみ、彼處にては詩
を詠じて、しもたてぬ事など嘲られんも口惜し。いかばかりとか思し召し候ふ」と申
しければ、道理とや思はれけん、其の後は歌をもよまず、横目をもせず、うちける程に、
大くづれにこそつきにけれ。

十 二宮の太郎に逢ひし事

隙ゆく道を見渡せば、馬乗五六騎出できたる、誰なるらんと十郎見るに、二官殿と覺え
たり。「いでや此の事いつばし語らん」といふ。五郎聞きて、餘の事なれば返事もせず。や

笠懸—騎射
笠を的に用
ひたるより
の名なれど
も普通は藁
を革にて包
みたるを用
ふと也

やありて申しけるは、「いかでかやうの大事、聲には知らせ候ふべき。異姓他人にては候はずや。いかなる人か、世になき我等が、死に、行くとかたらはんに、同意する者や候ふべき。たゞ對面ばかりにて御通り候へ」。十郎聞きて、「御分の心を見んとてこそ」と相談し、あひ近くなりければ、此の人々馬より下り、弓取りなほし色代す。「人々は何處へ往き給ふぞや」。鎌倉殿富士の御狩とうけたまはり、狩場の體見まるらせて、末代の物語と思ひ立ちて罷り出で候ふ」と申す。義實聞きて、「あはれ人々の無用の見物かな。馬鞍見苦しくての見物然るべからず。これより歸り給へ。某も御供と仰せられつるを、見苦しさに、風の心地と梶原が方へ申して遣し候ふ。面々もたゞ是より歸り給ひて、二宮に逗留し、笠懸など射て遊び給へ」と申しければ、十郎、「畏り存し候へども、斯様の事は重ねて有難き見物と存じ、既に思ひ立ちて候ふ。馬弱くば山をば牽かせ候ふべし。歸りには參り、暫くも逗留仕り候ふべし。設の肴御用意候へ」と申しければ、「此の上は御歸りをこそ待ち申すべし」とて、馬引き寄せ打ち乗り、東西へ打ち別れにけり。只世の常とは思へども、是ぞ最後の別れなり。さても我等討死の後、形見ども曾我より二宮へも送りなん。其の時にこそ、男子なりせば一みちにならで有るべきに、女の身の悲しさ

は、其の事こそ叶はずとも、せめて道よりなど最後の言傳だになかりつるぞと、怨み給はん事さぞあらん、と思へば包む其の涙、先立ちぬるこそ悲しけれ。

十一 矢立の杉の事

「とても捨つべき命ども、遅速は同じ事ながら、さりぬべき便宜もこそあらめ、一時も急げや」とて、駒を早めて打つ程に、矢立の杉にぞ着きにける。「此の杉と申すは、元は湯本の杉といひけるを、一年九州阿蘇の平權守とて、虎狼の逆臣あり、九國をうち從へて、ちやうずる事四年なり。軍する事五十餘度なり。度ごとに勝てり。其の時の齡七十二歳なり。剩天下をなやまし奉らんとて、國を催す聞ありければ、六孫王の御時、其の討手の爲に、關東の兵を召されのほりしに、此の杉のもとに下り居て祈りけるは、九州に下り權守をうち從へ、難なく都に歸りのほり、名を後代にあぐべくは、一の矢受け取り給へ、とて、各射けるに一人も射損ぜず。さて筑紫に下り合戦するに、なんなくうち勝つて取り上りぬ。其の時よりして矢立の杉と申しけり。「門出目出度き杉とて、上下旅人、心あるもなきも、此の木に上矢をまるらせぬはなし。況や我等思ふところありて行く者

六孫王—經
基、清和の
第六子貞純
親王の子源
姓を賜はり
て人臣とな
る

ぞかし。いかでか上矢を參らせざらん」とて、十郎一の枝にとどむ。五郎二の枝にぞ射立
 てける。何となく射けれども、十郎はよひに討たれ、五郎はあしたに斬られにけり。此
 の杉の瑞相現れて、一二の枝のへだて不思議なりける次第とは、今こそ思ひ合せけれ。
 さても兄弟は、駒を早めてうつ程に、箱根の御山にぞ着きにける。

曾我物語 卷第八

一 箱根にて暇乞の事

抑箱根山と申すは、關東第一の靈山なり。後には高山峨々と連りて、眞如の月影を宿
 す。前には生死の湖漫々として波煩惱の垢をすよけば、無始の罪障も消滅すと覺えた
 り。本地文殊師利菩薩、衆生を化度し給へば、有爲の都と名づけたり。されば一度縁を
 結ぶ者は、長く惡所に墮さじ、と誓ひ給ふ事、頼もしくぞ覺えける。此の人々は御前に
 參り、「歸命頂禮、願はくは淨土に迎へとり給へ。時致十一よりこの御山に參り、今に至
 るまで毎日三卷づつ、普門品怠らず讀み奉るも只此の爲なり、憐み給へ」と念誦して、
 別當の坊へ行きにけり。

二 同じく別當に逢ふ事

行實やがて出で逢ひ給ひて、古今の物語し給ふ。「男になり給へばとて、昔になりかはり

眞如一萬有
 の實體をい
 ふ
 本地—この
 權現の印度
 にての本體
 願はくは—
 一本此下に
 「今生にて
 は思ふ敵を
 討たせ後世
 にては共に
 とあり」

お、たりー
謝罪

て思ふべきにあらず。御身こそよそがましくし給へ、面々の心中はじめより委しく知りて候ふぞ。哀にのみこそ思ひ奉れ。いかでか怨み申すべき。人に頼まるゝ事、在家出家によらず、愚僧も年だに若く候はど、なかはたよりに成らざるべき」とて、墨染の袖を顔におしあて、さめふくと泣き給へば、十郎承り、「御意畏り入り候へども、さらに野心の候はず。時致も其の後やがて罷り上り、男に成りて候ふおこたりを、申すべきにて候ひしを、母に不孝せられて候ひぬ。また恐をなし奉るゆゑ、今に遅なはり候ふ。別當聞き給ひ、「祈禱はたのもしく思ひ給へ。千騎萬騎の方人と思し召せ」とて、酒取り出し、三々九度勧め給ひけり。

三 太刀刀の由來の事

鞘卷一鏢なき短刀抜く時鞘ともに抜くるなり下緒を鞘に巻き帯ぶる

「何を以つてか、方々の門出祝はん」とて、鞘卷一腰取り出し、十郎にひかれけり。此の刀と申すは、木曾義仲の三代相傳とて、三つの寶あり。第一にりうわう作りの薙刀、第二にくもをどしと言ふ太刀、第三に此のかたななり。名をばみぢんと言ふ。通らぬ者なればなり。されば此の三つの寶を祕藏して持たれたり。御子清水の御曹司、鎌倉殿の

よりの名
清水の御曹司一義高

鏢鐙一名工の名こは刀鍛冶の意に用ひたり

聲になり給ひて、國の大將軍給はつて、海道を攻め上り給ひ候ふ由聞えければ、彼の寶を祈の爲とて此の御山へ參らせらる。寶殿の事は、一向別當の計ひたるに依て、是を御邊に奉る。高名し給へ」とてひかれけり。五郎には、兵庫鎖の太刀を一振り出しひかれけり。「此の太刀と申すは、昔頼光の御時、大國より、武惡大夫と言ふ鏢鐙を召し、三箇月に作らせ、一箇月に磨かせ二尺八寸に打ち出す。祕藏並ぶ者無くして持たれけり。或時二つの太刀を枕上に立てられし時、俄に雨風吹きて此の太刀を吹き動しければ、は風に傍なりける草紙、三帖の紙數、七十枚切れたりけり。頼光、てうかと名付けて持たれたり。夫より、河内守頼信の許へ譲られぬ。夫にての不思議には、此の太刀を抜かれければ、四方五たんぎりの虫も翼も切れ落ちにければ、むしばみとぞ附けられける。夫より頼義の許へ譲られたり。夫にての不思議には、折々御所中震動して、人死し失するこど度々なり。或時頼義、此の太刀を枕に立てられしに、例の如く雷電はけしくして、御所中騒し。此の太刀己と抜け出でて、大地一丈が底に入り、かゝる惡事仕る大蛇の尾頭、九尋ありけるを、四つにこそは切りたりけれ。其の後よりぞ御所中の狼藉も止りける。怪みて跡を尋ねて見給へば、かゝる不思議をしたりければ、毒蛇と名付けて持たれ

多門一四天
王の一、毘
沙門天とも
いふ

たり。夫よりして八幡殿へ譲られける。夫にての不思議には、其の比宇治の橋姫の、あ
れて人を取りけり。或夕暮に八幡殿、宇治へ参られけるに、人の申すに違はず、川の水
浪しきりにして、十八九許なる美女一人橋のうへに上りて、八幡殿を馬より抱き下し、川
の中へ入れんとす。彼の太刀おのれと抜け出でて橋姫の左手の腕を斬り落す。力及ばず
川の中へ飛び入りぬ。夫より狼藉も止りけり。然れば此の太刀を姫斬と名付けて持たれ
たり。夫より六條の判官爲義の許へ譲られたり。夫にての奇特には、此の太刀に六寸許
勝りたる太刀を添へて置かれたるに、夜に入りぬれば斬り合ひけるを、判官此の由聞き
給ひて、豫てよりやうある者をとて、五夜までこそ立ち添へて置かれけれ。五夜の間隙な
く戦ひ、六夜と申すに我が寸に勝りたるを、安からずや思ひけん、餘る六寸を斬り落す。
されば友切と名付て持たれたり。源氏重代にも傳ふべかりしを、保元の合戦に、爲義斬
られ給ひ、嫡子左馬守義朝の手へ渡りけるに、佛法守護の佛とて、鞍馬の毘沙門に籠め
給ふ。されども過ぎにし合戦に、父を斬り給ひしかば、多門も受けずや思ひけん、合
戦に打ち負け、東國指して落ち給ふ。尾張の國智多の郡、野間の内海と言ふ所にて、相
傳の家人、鎌田兵衛正清が舅、長田の四郎忠致に討たれ給ひて後、傳ふべき人なかりし

に、義朝の末の子、九郎判官殿未だ牛若殿にて、鞍馬の東光坊の許に、學文しておはし
けるが、如何にしてか聞き給ひけん、折々毘沙門に詣り、歸命頂禮願はくは、父義朝
の太刀、此の御山に籠められて候ふ。父の形見に一目見せしめ給へと、祈念申されけ
れば、多門哀と思し召しけるにや、此の太刀を下し給ふと夢想を蒙り、喜びの思ひを
なし、急ぎ参りて見奉り給へば、御戸開けて此の太刀あり。盗み出して深く隠し置き
て、十三になり給ひける年、相傳の郎黨奥州の秀衡を頼み、商人に伴ひ下り給ひける
に、美濃の國垂氷の宿にて、商人の寶を取らんとて、夜討の多く入りたりしかども、起
き合ふ者も無かりしに、牛若殿一人起き合ひ、究竟のつはもの十二人斬り止め、八人に
手を負うせて、多くの強盗追つ返す。高名したる太刀なりとて、奥州まで秘藏せられけ
るに、十九の年兵衛の佐殿謀叛起し給ふと聞こし召し、鎌倉に登り見参に入り、幾程無く
して、西國の大將軍にて發向せられけるに、今度の合戦に打ち勝たせ給へとて、此の御
山へ参らせ給ひて候ふ。自然に僻事し出し候ひて、上より御尋ねあらば、法師が御邊に奉
りて、狼藉なりと御不審あらん時は、京に上り、四條の町にて買ひ取りたる由申さるべ
し。御分男になり給へば、今は見参に入れ度は無けれ共、志を思ひやられて哀なるぞと

よ。祈禱は頼母しく思ひ給へ。此の法師が息の通はん程は、明王を責め奉らん、何の疑かあるべき」と宣ひけり。時致承つて、「仰かたじけなけれども、更に野心の儀は候はず。御不審の條尤もにて候へ共、恐れ奉つて參らぬなり。狩場より歸りには參るべく候ふ。又は思し召し合する事も候ひなん」とて罷り立ち、さらぬ體にはもてなせども、今を限なれば、忍びの涙を流しけり。別當も縁まで立ち出で給ひて、遙々見送りつゝ、名残惜しくぞ思はれける。兄弟の人々は、駒に鞭を打ち、急がれける程に、三島近くぞなりにける。

四 三島にて笠懸を射たる事

十郎道にて申しけるは、「只今別當の御詞、偏に御託宣とおほえたり。其の上我等に權現より劍一つ宛給はり候ふ上は、今度敵を討たんこと疑ひあるべからず」と喜びて、三島の大明神の御前にこそ着きにけれ。此の人々疊紙を挟み、七番宛の笠懸を射て、法樂し奉り、敵の事心の儘にぞ祈られける。「誠に思ふ事叶はずは、我等敵の手にかよりて、足柄を東へ二度歸し給ふべからず、南無三島の大明神」とぞ念じける。皆人は、神や佛に詣

託宣―神佛
の人につき
ていはるゝ
言

りては、或は壽命長遠と祈り、諸病悉除とこそ祈るに、此の人々の明暮は、父の爲に命を召せとのみぞ申しける、無慙なりし事どもなり。斯様の事迄も、最後の文に詳しく書きて、富士野より曾我へ返しける。母見給ひて、五つや三つより思ひ立ちけるとも知られけり。

五 浮島が原の事

儲も御寮は、浮島が原に御座の由承り、曾我兄弟も急ぎ追つ付き奉りぬ。浮島が原を通りけるに、彼の原の昔は、海にてありけるに、大國より愛鷹山と言ふ山、富士と丈競せんとて、來りけるを、權現蹴崩し給ひければ、其の山海に浮きて、今の浮島が原になりにけり。一方は海漫々として雲行客の跡をうづみ、一方はよこをり伏せる小夜の中山、宇津の山邊續ぎ、東路わけて遙かなり。或人東國に下りけるが、此の原にて、滄波路遠くして雲千里と云ふ、詩の上の句を作り、下の句をよせかねたりける折節、十六歳になりける娘を連れたりけるが、詩をば作り得ずして、路遠く雲井はるけき山中に又ともきかぬ鳥の聲かな

よこをり伏
せる―古今
集甲斐歌に
甲斐がれを
さやにも見
しかけけれ
なく横ほり

伏せる小夜の中山とあるを引く
滄波路遠く
橋直幹の句
に蒼波道遠
雲千里、白
霧山深鳥一
聲とあり娘
の詠歌の事
は虚構也

と詠みたりければ、父聞きて、先の下の句を繼ぎけり。はくぶ山深うして鳥一聲、と言ふ詩も、今更思ひ知られたり。其の夜は君浮島が原に御泊りあり。此の人々も便宜善くば、と伺ひけれども、用心隙なかりければ力なし。其の夜も其處にて伺へども、北條殿の警固にて隙もなし。

六 富士の狩場への事

次郎一六郎の誤か

御れうは相澤の御所にましましけるが、梶原源太左衛門を召して仰せ下されけるは、「昨日の狩場より勢子少くては叶ふまじ。其のよし相觸れよ」承つて人々に觸れ、射手を揃へけり。先武藏の國には、畠山の庄司次郎重忠、三浦の和田左衛門義盛、三浦介義澄、下總の國には千葉の介、甲斐の國には古郡左衛門兼忠、武田の太郎信義、下野の國には宇都宮の彌三郎友綱、横山の藤馬の丞、相摸の國には松田河村の人々を先として、以上三百餘人なり、若侍には、畠山の次郎重保、梶原源太左衛門景季、朝比奈三郎義秀、同じくひこ太郎、御所の太郎、森の五郎、林の四郎、小山の三郎、笠井の六郎、板垣の彌次郎、本間の彦七、澁谷の小五郎、愛甲の三郎を始めとして四百五十餘人なり。總じて弓

ふぢまつ
藤の松に懸
りたる模様
の衣服
しばうち長
に一行藤の
裾長々と着
たる也

持ち馬に乗る侍、三百萬騎もあるらんと見えし。其の後勢子を山へ入れけるに、東は愛鷹の峯をさかひ、西は富士川を際として、引き廻されけり。勢子は雲霞の如し。嶺に登り谷に下り、野干を平野に追ひ下し、思ひくりに射止めけり。御寮の其の日の御装束には、羅綺の重衣のふぢまつ、風折したる立烏帽子に、狩衣は柳色、大紋の指貫に、熊の皮の行藤、しばうちながにめし、連錢葦毛なる馬の五尺に餘りたるに、白鞍置かせ、厚房の鞆、かけてぞ召されける。御劍の役は江戸の太郎、御笠の役は豊島の新五郎、沓の役は小山の五郎、御敷皮は金子の十郎なり。其の外一人當千の武士、六七百人御馬の廻りと見えたりし。其の中に殊に勝れて見えたりしは、五郎丸なり。萌黄織の胴丸に、一尺八寸の太刀指し、四尺八寸の太刀を佩き、黒金の棒の三人して持ちけるを、もと輕けにつきて、御馬の前にぞ立ちたりける。御陣の左右には和田畠山いづれも鷹をぞ据ゑさせける。馬うち静かにして又竝ぶ人なくぞ見えし。其の外數千騎の立、花を織り月を招く粧、廣き富士野も所なくぞ見えし。かくて山より鹿ども多く追ひ下し、思ひくりに止めて、御寮の御見參にぞ入れにける。畠山の六郎重保、左手右手に相付けて、鹿二頭止む。宇都宮五頭、一條板垣五頭、武田小山の人々も、五頭こそ止めけれ。其の狩場

とねりなし
を云々と
ねりなくて
も動かぬ様
に手綱を結
び置く也
むごんりう
—今いふ自
己流

の物数は此の人々とぞ聞えし。爰に葛西の六郎清重日の暮方に至るまで、鹿一頭も止めずして、勢子に漏るゝ鹿もやと、繁みく、に目をかけて廻りける。折節右手の繁みより、鹿一頭出で来る。願ふ所と見渡せば、矢比に少し延びたり。鎧に鞭を打ち添へて、下り様にぞ落しける、既に二三段切り違へて、弓打ち上げて引かんとする所に、思はぬ岩石に、馬を乗り掛けて、四つ足一つに立てかねて、わなよきてこそ立ちたりけれ。おろすべき様もなく、進退ことに谷れり。上下萬民これを見て、唯「あれはく」とぞ申しける。今は馬人諸共に、微塵になるとぞ見えたりける。清重手綱を静に取り、とねりなしを結び置き、かどみの鞭を打ち添へて、二つ一つの捨手綱、むごんりうに落ちかより、放せば後に下り立つたり。馬は手綱を捨てられて、真砂につれて落ちて行く。かづき弓のもと岩角にえり立て、暫しこらへて立ち直る。諸人目をこそすましかれ、「乗りたり下りたり、据ゑたりや堪へたり」と、暫しは鳴も静まらず。君も御感の餘りにや、常陸の國小栗の庄三千七百町下されけり。時の面目日の高名、何事かこれにしかん、と感ぜぬ人こそ無かりけれ。

七 源太と重保が鹿論の事

矢目—矢の
あたりしあ
と

斯かる所に上の繁みより、鹿一頭出で来り、梶原源太ひかへたる、左手を通りてぞ下りける。景季幸にやと喜びて、鹿矢を打ち番ひよつぴき放つ。追つ様筋かひに首をかけ、つよとぞ射貫きたる。されども鹿はものともせず、思ふ繁みに飛び下る。二の矢を取つて番ひ、鞭打ち下す所に、不思議に馬を乗り懸けて、足竝亂るゝところに、下り立つて、馬引つ立つる其の隙に、畠山の六郎重保、馳せ竝べてよつびいて放つ。源太が矢目をはきり迄ぞ射ける。源太にはしたよかに射られぬ。鹿は少しもはたらかず、二つの矢にてぞ止まりける。重保馬打ち寄せて見る所に、源太も駈け寄せて、「鹿は景季止めて候ふぞ」。重保聞いて、「心得ぬ事を宣ふものかな。鹿は重保が矢一つにて止めたる鹿を、誰人か主あるべき」。源太弓取り直し嘲笑ひて申す様、「狩場の法定まれり。一の矢二の矢次第あり、矢目は二つも有らばこそ、一二の論も有るべけれ、景季も正しく射つるものを」とて、見れば實にも矢目は一つならでは無かりけり。さりながら御前で、取らるゝ者ならば、時の恥辱に思ひければ、源太大きに怒りをなし、「勢子の奴原は無きか、寄りて

中や絶えなむ—古今集の龍田川紅葉みだれて流るめり渡らば錦中や絶えなむを引用す

此の鹿を取れ。重保も駒打ち寄せ、「雑人は無きか、重保が止めたる鹿のかはたて」。源太さる者なりければ、少しも怯む氣色はなし。「臆したる奴原かな。景季が止めたる鹿のかはたてかきて取れ」。重保さらぬ體にて駒駆け廻し、「雑色共は、など鹿をば取らぬぞ」と、早事實なる詰論なり。源太は手綱搔くり駒打ち寄せて小聲に言ふ様、「懸路に迷ふ隠し文やる者こそ主候ふよ」。重保聞いて、「優しく宣ふ譬かな。思ひの色の數夜まで、空しく返すには、返し得たるぞ主となる」。源太打ち笑ひ、「吉野龍田の花紅葉、誘ふ嵐は主ならずや」。重保聞きて、「言れずや誘ふ嵐も其の儘に、終に連れても行かばこそと宣ふ、龍田の河の河波に、散りて流ると花の雪、紅葉の錦渡りなば、中や絶えなんさりながら、流れて止る所こそ、誠の主と思はるれ」。實に故ありて聞えたり。波にも連れて行かばこそ。かよるるせきも主なるべき。「るせきも留め果てばこそ。流れて止る湊こそ、誠の主とは覺えけれ」。源太此の詞を打ち捨て、「更け行く月の傾くをも、詠むる者こそ主となれ」。重保聞きて高らかに打ち笑ひ、「世界を照す日月を、主と宣ふ過分なり」。過分は人によるものを、御分一人に歸すかとよ。重保たまらぬ男子にて、「獨に歸すか歸せざるか。手竝の程を見せん」とて、既に矢をこそ抜き出す。源太も白まぬ者なれば、「案の内

白まぬ者—俗にいふひけ取らぬ男

魚鱗—中高になりて突出する陣法
鶴翼—廣がりて敵を包む陣法

よ」と言ふまよに、既に中指抜き出す。梶原が郎黨は、言ふに及ばず時の綺羅、竝ぶ者なかりしかば、知るも知らぬも押し竝べて、梶原方へぞ馳せ寄りける。三浦の人々も是を見て、源太に意趣ある上は、秩父方へは疎遠なり、見放すまじ、とて馳せ寄りける。以下の人々兒王の人々は、梶原方へぞ與力する。みま本間の人々は、秩父方へぞ寄せ来る。駿河の國の人々は、梶原方へぞ寄りにける。伊豆の國の人々は、北條殿を先として秩父方へぞ馳せ寄りける。安房と上總の武士は、二つに割れて寄りにける。常陸下總の人々は、秩父方へぞ集りける。八箇國のみにあらず、日本國中に名を知らるゝ程の侍、魚鱗に重なり、鶴翼に連りて、ひたひしめきに犇きけり。畠山殿は、始めより知り給ひしが、如何思はれけん、知らぬ由にてぞましましける。頼朝これを御覽じて、「あれ〜義盛静め候へ」と、仰せ下されければ、和田殿、兩陣の間へ馬駆け入れ、「上意にて候ふぞ。鹿論の事互に其の理あり。所詮鹿をば上へ召され候ふ。兩人御前へ參られよ、との御説にて候ふ」と、大音聲にて言ひ、其の後勢子を召し、彼の鹿を昇せ、六郎と源太と引き連れ、御前差して參られけり。さてこそ兩陣は破れにけれ。危ふかりし事共なり。さればにや、君の御惠遍く、御憐深くして、事靜まりぬ。方々も安穩なるにて、昔を

思ふに。

八 燕の國旱魃の事

大國―支那
―生命歟
しやうめい

大國の燕の國、旱魃する事三箇年なり。然れば草木悉く枯れ失せ、人民多く亡びける上は、鳥獸に至るまで、生き残るべしとは見えざりけり。國王大きに歎き給ひて、大法祕法、残さず行ひ雨を祈られ共、驗なし。大王思ひの餘りに、諸天に恨み奉りて曰く、「我生れてより此の方、禁戒を犯さず、事を妄りに行ふとも思はず候ふに、斯の如く旱魃して、人のしやうめいすくなし、若我が身に過る所あらば、戒め給へかし」と歎き申さるれども、其の驗なし。今は身命を民の爲に捨てんには如かじとて、廣き野邊に出で、萱を多く集めて、高さ廿丈に積み上げさす。公卿大臣、奇異の思ひをなす所に、國王臨幸なりて、其の萱の上に登り給ひて、「火をつけよ」と綸言なりければ、臣下大きに辭してつくる者なし。其の時大王宣ふ、「若し過りて、政事猥なること有らば、焼けぬべし。焼くる程の身ならば、命生きても益なし。若又過らずは、天是を守るべし」とて、大きに逆鱗ありければ、綸言背き難くして、四方より火をつけよれば、猛火山の如くに燃

逆鱗―人君

の怒龍の喉
下に徑寸の
逆鱗あり是
に觸るれば
怒つて其の
人を殺すと
いふより出
づ

え上りて、炎空に満てり。大王も烟に咽び、前後辨へ難し。已に御衣に火の付きければ、目を閉ぎ掌を合せて、正念に住して、火坑變成池と念じ給ひければ、天是を憐みて、大雨俄に降り下りて、山の如くなりつる猛火を消し、國王も助かり給ひ、人民も命を繼ぎ、五穀成就しけるとなり。されば論語に曰く、過りて改むるに憚る事勿れ。過りて改めざるは、賢かへりて愚なり、と見えたり。此の文の名を圓珠と言へり。まどかなる玉の、盤を走るとよそへてなり。君御言葉の重き一つにて、多勢の静まりけるにて知られけり。曾我の人々は、あはれ事の出で來れかし。荷擔人する風情にて、狙ひ寄つて一刀、刺さむと許思ひけり。斯くて日も暮方に成りしかば、今日を限と、傾く日影を惜みけり。

九 新田が猪に乗る事

爰に伊豆の國の住人、新田の四郎忠常、未だ鹿に逢はずして、落ち來る鹿を相待つ處に、幾年経るとも知らざる猪が、ふしくさかく十六つきたるが、主を知らぬ鹿矢ども、四つ五つ立つたりしが、大きに猛つて駈け廻る。譬へば、養由が術、きよりくりう

忠常―原本
たゞつな
養由―支那



其二
仁田節
猛獸を
仕る
圖

大童一亂髪

が神變も、及ぶべしとは見えざりけり。近づく者をたければ、落ち合ふ者も無くして、徒らに中を明けてぞ通しける。忠常是を幸と、駈け寄せけり。御前近うなりければ、「よしや新田よしや忠常」とぞ仰せ下されける。人もこそ多き中に、斯様の御誼蒙る事、生前の面目、何事か是に如かんと存する間、鐵とうを丸めたる猪なりとも、餘さじ者を、と思ひければ、大の鹿矢を抜き出し、只一矢にと引いて放つ所に、矢よりも先に飛び來たり、乗りたる馬を主共に、宙にすくうて投げあけ、落ちば懸けんとする所に、叶はじとや思ひけん、弓も手綱も打ち捨てよ、向様にぞ乗り移る。されども倒にこそ乗つたりけれ。猪は乘られて腹を立て、馬を彼處へ駈け倒し、雲と霞に分け入つて、虚空をとんで廻りしは、周の穆王、釋尊の教法を聞かんとて、八匹の駒に鞭を上げ、萬里の道利那に飛び着きしも、是には争で勝るべき。新田は、習ひし手綱の様、腰もきれよと挟みつけ、尾筒を手綱に取り、樂天が傳へし三頭王良が祕せし手綱、是なりけりと堪へけれども、詮方なくぞ見えたりける。猪は愈猛りをかき、木の下萱の下、巖岩石を嫌はずして、宙に飛んで廻りしかば、烏帽子、竹笠、杓、行膝、一度に切れて落ちにけり。大童になりて、只落ちじとばかりぞ堪へける。大きに猛き猪も、數多手は負ひぬ、新田が

威にや押されけん、御前近き枯杭に、躓き弱る所に、過たず腰の刀を抜き、胴中に突き立て、助骨二三枚掻き切りければ、猪は四足を四五寸土に踏み入れて、立すくみにこそなりにけれ。新田は急ぎ飛び下りて、かすの止を刺す。上下の狩人これを見て、「前代未聞の振舞かな、面白くも止めたり。乗りも乗つたり、堪へも堪へたり」と、感ぜぬ人こそ無かりけれ。君も此の由御覽じて、「狩場の中の高名は、是に如かじ」と御感あり。富士の下方にて、五百餘町を給りけり。勢餘りてぞ見えし。されども此の猪は、富士の裾隠居の里と申す處の、山の神にてぞ座しける。凡夫の身の悲しさは、夢にも是を知らずして、止めにはける御咎にや、やがて其の夜、曾我の十郎に打ち合ひ、數多の手負ひ危かりし命、幾程なくて、田村の判官が謀叛同意の由讒言せられて、討たるべかりしを、重保につき申し開き、御目にかよらんとて參じける折節、めしの御馬放れたりしが、御庭狭しと馳廻る。日本一の荒馬なれば、追ひ廻す人々是を見て、「よしや新田、取れや忠常、繩を懸けよ、過すな」と、聲々に呼ばはりて、庭上騒動す。新田が郎黨門外に集りて、「我等が主、只今搦め取らるゝぞや、主の討たるよを見捨てよ、何處迄か逃るべき」とて、思ひきつたる兵ども、二三十人抜き連れて、御前指して斬つて入る、新田が運の極

なり。御所方の人々は是を見て、「新田が謀叛眞なり。餘すな方々」とて、非番當番の面々出で合ひて、火出づる程こそ戦ひけれ。御所方の人々數多討たれしかば、新田が陳ほう逃れずして、二十七にて討たれにけり。不便なりし事どもなり。是然しながら富士の裾野の猪の咎なり、とて、舌を卷かぬは無かりけり。是や靈神怒る時は、災害衝に滿るなるも、今こそ思ひ知られたれ。

十 船の始りの事

諸も御寮は、何時の暮より、御狩の興に入り、四方の海山をぞ眺めさせ給ひける。折節沖つ島の木の間より、漕ぎ浮べたる蟹小舟、同じ風にぞ行き違ふ。「實に不思議なる舟のあやつりかな。誰人か仕始めつらん」と仰せられけり。千葉の介が申しけるは、「船の始は昔黃帝の御時、しうと云ふ逆臣ありて、おうごうと言ふ海を隔て、攻むべき様なかりけり。爰にくわてきと言ふ臣下あり。折節秋の末なるに、寒き嵐に散る柳の、一葉の上に乗りつよ、次第々々に小蟹の、いとほかなくも柳の葉の、汀に寄りし秋霧の、立ち來るくもの振舞、實にもと思ひそめしより、たくみて船を造らせ、おうごうを易く渡り、し

小蟹―蜘蛛の枕詞、こにてはい

との序とし又立ち來るくも(雲)に懸りて調を爲す
龍頭鶴首―軸に龍又は鶴といふ水鳥の形を飾に付けたる船

うを平け、御代を治め給ふ事、一萬八千歳となり。然るに船の船の字を、君に薦むと書きたり。又天子の御駕を龍駕と名付け奉り、又船を一葉と言ふ事も、此の時よりぞ始りける。又君の御座船を、龍頭鶴首と申すも、此の御代よりぞ起りける」と申しければ、「儲極樂の弘誓の船は如何にや」。「夫は菩薩聖衆の御法にて、凡夫の及ぶ所に候はず」とぞ申されける。同じく、富士の高嶺を遙々と見上げさせ給ひて、昔竹取の翁、鶯の卵を養じて、かぐや姫となりし行方又
風に靡く富士の烟の空に消えて、行方も知らぬ我思かな
と詠じし西行法師が下心まで、思し召し出しけり。

十一 祐經を射んとせし事

梶原源太左衛門景季は、未だ鹿に逢はずして、落ち來る鹿を待ちかけつよ、駈け並べよつびいて放つ。されども上を遙に射越して通しけり。景季取り敢ずかくこそ申しけれ。夏草の繁みが下を行く鹿のそでの横矢は射にくかりけり
君聞こし召して、神妙なりとて、これも富士の裾野にて、百餘町をぞ賜りける。人々は

しよし一所
司歟

を聞いて、「鹿射外し歌よみてだに恩賞に預る。況て好く止めたらん輩は、如何に」とぞ申しける。御寮、左衛門の尉祐經を召して、「不審なる事あり、用心せよ」と仰せ下されければ、畏り存じ候ふ由を申しける。爰に梶原源太景季、侍のしよしにて、總奉行第一の者なれば、上の御説を承はり、曾我の人々を近付けて申しけるは、「神妙に御供申され候ふ。奉公は何れも同じ事。御宿に大事の御物具あり、留守の御宿直申されよ。如何様今度鎌倉へ入らせ座して、御免蒙り給ふへし。奉公心に入れられよ」と申しければ、祐成是非に及ばずして、「畏り入り候ふ。よき様に御申し候へ。頼み奉る」とぞ返事しける。源太重ねて申す様、「御給仕によつて、本領仔細あらじと存じ候ふ」と言ひてこそ歸りにけれ。時致是を聞きて、「あはれ源太、我々を賺さんと思ひたる氣色の、さし現はれたる奴かな。蛇は一寸を出して其の大小を知り、人は一言を以つて其の賢愚を知る。狐の子は小狐より。父が孫を繼ぎて、此の冠者が頼の白さよ。いつの奉公によりてか、御氣色もよかるべき。定めて御寮の仰には、其の冠者原は誰が許して、狩場へは出でけるぞ。よくく賺し置きて、首を斬れとの御説か、流罪せよ、との仰にてぞあるらん。實にや古き詞を案ずるに、國の賢を以つて興し、諛を以つて衰ふ、君は忠を以つて安じ、

夏毛一鹿の
也
たかうすべ
う一高をす
めどりふ
(護田鳥文)
にて白羽の
上方に高く
薄黒の文あ
るものとぞ
ひやう紋一
紋の中を色
々に彩りた
るもの

偽を以つて危し。人は巧にして偽らんよりも、拙うして誠あるには如かず。此の者の振舞は、世の煩ともなりぬべし。其の上奉公申すべき爲ならず。哀身に思だに無かりせば、此の冠者が頼一太刀斬つて、慰まんずる者を」とぞ申しける。諸兄弟は、見え隠に連れつ離れつ、心を盡し狙ひけるこそ無慙なれ。十郎が其の日の装束には、萌黄匂の裏打ちたる竹笠、村千鳥の直垂に、夏毛の行膝深くひつこうで、たかうすべうの鹿矢、管高に取つてつけ、重藤の弓の真中取り、葦毛なる馬に具鞍置きてぞ乗つたりける。五郎が其の日の装束には薄紅にて裏打つたる、ひやう紋の竹笠真深に被て、からざいみに蝶を二つ三つ所々に附けたる直垂に、紺の袴、秋毛の行膝、たぶやかに穿き下し、鶴の元白の征矢、管高に負ひなし、二所藤の弓の真中取り、鹿毛なる馬に、蒔繪の鞍置きて乗つたり。遙に遠き敵を見付けて十郎につけ、下にて祐經を見附けて五郎につけ、互に心を通はしけり。人は皆、鹿に心を入れ、如何にもして、上の見參に入らん、と嶺に登り谷に下り、野を分け里を尋ねけれども、よそめいかどと思ひしに、列卒を破りて鹿こそ三頭出で来りけれ。是は如何にと見る所に、彼の祐經こそおつすがひて落しけれ。其の日の装束花やかなり、浮線綾の直垂に、大斑の行膝に、切斑の矢負ひ、吹寄藤の弓の真中

中差―普通の征矢その左にさす二筋の雁股(又は鏑矢)を上差といふに對す

取り、金砂にて裏打ちたる浮紋の竹笠、嵐に吹き靡かせ、黒き馬の太く逞しきに、白覆輪の鞍置いてぞ乗つたりける。馬も聞ゆる名馬なり、主も究竟の乗手なり、三つある鹿に目を懸けてこそおつすがうたれ。三つある鹿には隔りぬ、馬の駈場もよかりけり。十郎是を見て、「此の鹿は埒の外に列卒を破りて落ち來るにや。追ひ返し奉らん」とて、十三束の大の中差取つて番ひ、矢所多しと言へども、奥野の狩場の歸り様に、父の射られけん鞍の山形の端、行膝の引合、報のしらする恨の矢、餘の所をば射べからず、如何なる金山鐵壁なりとも、志のなかは通らざらん、と左手になしてぞ下りける。五郎も同じく、中差取つて差し番ひ、左衛門の尉が首の骨に目をかけて、大磐石を重ねたりと言ふとも、なか斬つて捨てざらん、と鞭に鎧を揉み添へて、右手に相付け馳せ並べ、三つある鹿と左衛門を真中に取り込め、矢先を左衛門に指し當てよ引かんとする所に、祐經が暫しの運や残りけん、祐成が乗つたる馬を、思はぬ伏木に乗りかけて、眞倒にころびけり。あやまたず弓のもとを越して、馬の頭におり立つたり。五郎は之を知らずして、矢筈を取り立ち上りけるが、兄の有様を一目見て、目もくれ心も消えにけり。此の隙に、敵は遙に馳せ延びぬ。鹿をも人に射られけり。五郎空しく引き返し、急ぎ馬より

介錯―介抱

たいさんの龜は云々―枚乗の諫―吳王―書に泰山之雷穿石、彈極之、繩斷、幹、水、非石之鑽、索非木之鋸、漸靡使之然也―ある句の誤なり

下り立つて、兄を介錯しける、心の内こそ悲しけれ。「哀實に我等程、敵に縁なき者あらじ。只今はさりとともこそ思ひしに、馬強かりせば、斯様にはなりゆかじ。是も貧より起る事なり、人を恨むべきにもあらず。叶はぬ命ながらへて物を思はんよりも、自害して惡靈にもなりて、本意を遂げん」とぞ悲しみける。十郎是を聞きて、「暫く待ち給へ。それたいさんの龜は巖を穿ち、雷は石を穿つ、たんさくの釣瓶の繩は井桁をきる、水は石の鑿にあらず、なほは木の鋸に非ず、せんひの然らしむる所なり。只心をのべて功を積み給へ」とて、馬引き寄せ打ち乗りける。

十二 畠山歌にて訪はれし事

其の後は人々如何に見るらんとて、十郎駈くれば五郎控へ、五郎行けば十郎止り、他目をも包みければ、時移り事延び行きければ、其の日も已に暮れなんとす。畠山殿は程近く座せば、兄弟の有様をつくくと御覽じて、今まで本意を遂げざるぞや。あはれ平家の御代と思はど、なか矢一つとぶらはざらん。當君の御代には、斯様の事も叶はず、重忠も若き子供を持ちぬれば、人の上とも思はずして、誠に無慙に覺えたり。梶原觸狀

には、明日鎌倉へ入らせ給ふべきなれば、今宵討たでは叶ふまじ。此の由知らせんと思ひ給へども、人々數多有りければ、歌にてぞ訪ひ給ひける。

まだしきに色づく山の紅葉かなこの夕暮を待ちて見よかし

と詠め給ひて、涙ぐみ給ひけり。折節梶原源太左衛門が、近う控へたりしが、「何事にや曾我の殿原に、まだしきに色づく」と詠じ給ふは心得ず。重忠聞いて、「夏山に夕日影のさし残る風情、初紅葉に似ずや。この夕こそ猶も移り行かば、誠秋にやなり行かん」。源太猶も言葉あり顔なりしを、君より急ぎ召されしかば、駈け通るとて、「重忠の御歌の不審残りて」と言ひながら、馳せ過ぎければ、人々聞きて、「今に始めぬ梶原がわん讒とは言ひながら、ことにかよりて見えぬるをや」と申し合ひける。重忠仰せけるは、「命を養ふ者は病の先に薬を求め、世を治むる者は亂れぬ先に劍を習ふ」と三部論に見えたり。夫迄こそ無くとも、斯様のえせ者を近く召し使ひて、末の世如何」とぞ仰せける。其の後曾我の人々を近付けて、「今宵重忠が所へ座せ、歌の物語を申さん」と宣へば、畏り存じ候ふ由返事して、十郎弟に言ひけるは、「畠山殿は情を以つて、早此の事を知り給ひけるぞや。耳を信じて目を疑ふ者は、耳の常の弊なり。尊みて近付くを賤む者は、

わん讒一和
讒と書くよ
き顔して相
手を讒言す
ること
えせ者一惡
人
尊みて一

人の常の情、と抱朴子に見えたり。されども歌の心は如何に」と問へば、「知らず」と言ふ。十郎は萬に情深くして、歌の心を得たり。「思ふ事あらば今宵限と告げ給ふぞや。君は明日伊豆の郷、明後日鎌倉へ入らせ座す由、其の聞あり。思ひ定め給ふべし」と言ふ。「珍しくも思ひ定め候ふべきか」。申すにや及ぶ」とぞ申しける。元來剛なる時致が、重忠には勇められ、愈今宵を限とぞ定めける。豫てより思ひ定めし事なれども、差當りて心細さ、思ひやられて無慙なり。日暮れ、君井出の館へ入り給ひしかば、國々の大名小名、御供してぞ歸りける。曾我兄弟も人並々に柴の庵へぞ歸りける。

十三 館廻りの事

道にて十郎申す様、「和殿は館へ歸り給ふべし。二人連れては人も怪しく思ひなん。祐成許行きて、館の案内見て歸らん」とて、太刀ばかり持たせ、館々を廻りけり。思ひくの幕の紋、心々の館の次第、なか／＼言葉も及ばれず。爰に二つ木瓜の幕打ちたる館あり。誰が幕やらん、是は我等が家の紋なり。御敵となり亡びぬ。伊東と名乗る者無ければ、此の幕打つべき者なし。誰なるらんと不思議にて立ち寄り、幕の物見より見入れけ

— 妄なる
— ずるなる

れば敵左衛門が館なり。是は如何に、彼等は一つ木瓜の幕をこそ打つべきに、心得ぬ者かな。誠や人人に非ず、鹿を以つて人とし、家家に非ず、何處を以つてか家とす。繼ぐべきをば繼がで、ずるなる曾我の某と呼ばれぬる上は、家の紋いるべからず、祐經は誠やらん、我々が先祖の知行せし所領を知るによつて、斯様になり行く者をや。哀昔は斯様に無かりし者を、と見入れて歸りける。

十四 祐經が館へ行きし事

かくて祐經が嫡子犬房、祐成を見つけて、「只今十郎通り候ふ」。左衛門聞きて、「玉の井の十郎か横山の十郎か」と問ふ。「曾我の十郎殿」と言ふ。「是は祐經が館にて候ふ。立ち寄り給へ」と言はせければ、祐成少も憚らず、館の内へ入り見給へば、手越の少將は、左衛門の尉が君と見えたり。木瀬川の龜鶴は、備前の國吉備津宮の王藤内が君と見えて、嫡子犬房に酌取らせ、酒盛しける折節なり。幾程の榮華なるべき。今宵の夜半にひきかへん事の無慙さよ、と思ひながら座敷にぞ直りける。祐經、敷皮を去りて、「是へ」と言ふ。十郎、「かくて候はん」とて、押し退け居たり。祐經が初對面の詞ぞこはかりける。「誠や殿原

君—遊君

— 員外にて
— 人外に同じ
— 歟

は祐經を敵と宣ふなる、努々用ひ給ふべからず、人の讒言と覺えたり。差當る道理に任せて、人の申すも理なり。伊東は嫡々なる間、祐經こそ持つべき所なるを、面々の祖父伊東殿横領し、一所をも分けられざりしかば、一旦は恨むべかりしを、第一養父なり、第二叔父なり、第三烏帽子親なり、第四に舅なり、第五に一族の中の長者なり。一方ならざるによつて、堪へて過ぎしに、是は只高きに望み登らざれ、賤しきを誇り笑はざれ、と言ふ本文を捨てよ、我等をるんぐわいに思ひ給ふ故なり。面々の父河津殿、奥野の狩場の歸りに討たれ給ひぬ。獵師多き山なれば、をこしの矢にや當り給ひけん、又は伊豆、駿河の人々多く打ち寄り、角力とりて遊び給ひけるに、股野の五郎と勝負を争ひ、當座に喧嘩に及びしを御寮の御成敗に依り静りぬ、左様の宿意にてもや討たれ給ひけんを、在京したる祐經に、かけて申されけるなれども、更に知らず。剩へ祐經が郎黨共數多失ひぬ。其の時分頓て對決を遂けたりせば、遁るべがりしを、幾程無くして當御代となりて、面々親しき人々皆御敵とて、ながらへ給はぬ。只祐經一人になりて、終に此の事さんだんせすして止みぬ。然れば只祐經がしたるになりて、年月を経候ふ。是不祥と言ふも餘りあり。よく聞き給へ十郎殿。祐成聞きて、兎角言ふに及ばず、只謹んで居た

り。「是なる客人をば知り給ふにや」。「今日初めて見参に入り候へば、争でか見知り奉るべき」。「あれこそ、備前の國、吉備津宮の王藤内とて、さる人なるが、今年七年君の御不審を蒙り、所領召されて有りつるを、この三箇年祐經とりつぎ申しつる間、御免を蒙り、所領に安堵して、蒲原まで上り給ひしが、祐經に名残惜まんとて歸り給ふ。斯様に、他人だにも、申し承れば親しくなるぞかし。まして殿原と祐經は、從兄弟甥と言ふ者なれば、今は親とも思ふべし。便宜然るべく候はゞ上様へ申し入れ、奉公をも申し、一所をも賜りて、馬の草飼所をばし給へ。殿原は祐經が思ひ奉る様には、思ひ給はじ。北條へは、常に越えて遊び給へども、何を恨みてか、更に伊豆へは見え給はず。しもたてぬ賢人顔せんよりも、我々に睦びて、若き者共に背かずして座せ。面々の馬屋を見るに瘦せ弱り候ふ。伊東に馬ども數多候へば、乗りつけて乗り給へ。怒に人の言ふ事について、祐經討たんと思ひ給はん事、今生にては叶ふまじ。曾我殿原」と、廣言しけるが如何思ひけん、言葉をかへて言ひけるは、「醉狂の餘り。言失仕ると覺えたり。今より始めて、互の遺恨を止めて、親子の契たるべし」とて、盃取り寄せ客人なればとて、王藤内にはじめさせ、其の盃珍しきとて、十郎にさす。其の盃少將にさす。其の盃を祐經

御前達一遊
女を指す

にさす。其の盃龜鶴にさす。其の盃を十郎にさす。酒を八分にうけて思ひけるは、憎き敵の廣言かな。身不肖なり、何事かあるべき、と思ひこなし、初對面に、さんぐに言ひつるこそ奇怪なれ。此の君共が耳こそ、東八箇國の侍の聞くとところ、日比は親の敵、只今は日の敵、あをに衣を重ねても逃すべきに非ず。うけたる盃、敵の面にうちかけて、一刀刺し、如何にもならばや、と千度百度進めども、心をかへて思ふ様、待て暫し、兄弟と言ひながら、祐成と時致は、父の敵に志深くして、一所にて兎にも角にも、と契りしに、心はやりの儘に、祐成いかにもなるならば、五郎空しく縛められ、恨みん事こそ無慙なれ。爰は堪ふる所と思ひ靜めて止りしは、情深くぞ覺えける。左衛門の尉は神ならぬ身の悲しさは、我に心をかるとは、夢にも知らずして、「十郎殿、盃は如何にほし給はぬ。御前達數多坐せば、肴待ち給ふと覺えたり。今様を諂ひ給へ」と言ひければ、二人の君、扇拍子を打ちながら、蓬萊山には千年経る、千秋萬歳重れり。松の枝には、鶴巢くひ、巖の上には龜遊と云ふ一聲を返し、二遍迄こそ諂ひけれ。其の時盃取り上げて、三度迄こそ乾したり

けれ。其の土器、祐經乞うて、「方々は何とか思ひ給ふらん知らねども、今日よりして、親子の契約あるべし。あの小童奴を弟と思召され、汝も兄と思ひ奉れ。他人の悪からは恨にあらす。親しき中の疎きをば、神明も憎み給ふ事なれば、今より後互に憚あるべからず。此の盃賜りて祝ひ候はん。但し所望候ふぞや、十郎殿は亂拍子の上手と聞けども未だ見ず、一番舞ひ給へ。一つは客人の爲、一つは祐經が祝のあやにく如何あるべき。御前達面白く候ふべし。早々」と責めければ犬房囉ぞ立てたりける。祐成、仔細に及ばずして、持つたる扇さつと開きて、「君が住む、龜尾か山の瀧つ瀬は」と言ふ一聲を揚げて暫舞ひけるが、ちどに心を通して、兎やせん角やせまし、と思ひ亂るる舞の手に、夜更けば入るべき道づたひ、番はづさん長舞に、此處より入り彼處より廻らん。彼處はつまり此處は通路、忍びて入らば音は立たじ、入るとも知らじ。さす腕、袖の返に目を遣ひ、半時許ぞ舞うたりける。座敷に連る人々は、見知る印の無き儘に、興を催す許なり。君どもを始として、囉すも覺えぬ風情なり。かくて十郎舞ひ入りければ、祐經、盃思ひがへしとて、十郎にさしたりければ、十郎取り上げ、三度乾して扇取り直し、畏つて申しけるは、「今宵は是に御宿直申したく候へども、北條殿に申し合する仔細

蟬螂—かまきり、莊子に猶、蟬螂之怒、臂以當車轍と見え不可能なる事の喩寸の金—一本此上に寸の金にて尺の木をば切れども尺の木にての十九字あり

候ふ。何様明日参りて、常々宿直申すべし」と、暇乞うて出でにける。祐成案者第一の男子にて敵何とか言ふらんと思ひ、小柴垣に立ち隠れ、聞く事は知らで、王藤内、「此の殿原の父をば、誠に討ち給ひけるか」と問ふ。左衛門の尉聞きて、「今は彼等が聞かばこそ、以前具に申しつる様に、我等嫡孫にて持つべき所領を、彼等が祖父に横領せられぬ。某が在京ながら、田舎の郎黨共に申し付けて、彼等が父河津の三郎と言ひし者を討たせしなり。人もやさぞ知りて候ふらん。此の者共の子孫は、皆謀叛の者、君に失はれ奉り、今祐經一人に罷りなる。然れども君不便の者に思召し、先祖の所領拜領の上は、祐經に狭められ、思ひながらぞ候ふらん。かれが此の比の分限にて、祐經に思ひかゝらんは、蟬螂が斧を取つて隆車に向ひ、蜘蛛が網をはりて、鳳凰を待つ風情なり。哀れなる」とぞ申しける。王藤内聞きて、「それこそ僻事よ。世にある人は所領財寶に心が留り、思ふ事は滞るなり。されば寸の金を切る事なし。貧なる侍と鐵とは、あなづらぬものをや。何とやらん悪しき様に仰せつる時には、頻りに目をかけ奉り、刀の柄に手を掛け、片膝押し立てつる時、事出で來ぬと見えしが、されども色には出さず、よき兵かな」とぞ譽めたりける。左衛門の尉是を聞き、「何程の事か仕るべき。龍は眠りて本體を

須彌一梵語
妙高山と譯
す高さ八萬
四十由旬と
佛經に見ゆ
落ちば一王
藤内が遁げ
ば

現はす、人酔ひて本心を現はす。思ふ事こそいはれ候へ。恒河沙はつき、螢の火にて
須彌は焼くるとも、討たる事あるべからず。南無阿彌陀佛」とぞ申しける。後に思
ひ合はすれば、是や最後の念佛、と哀にぞ覺えし。十郎かく言ふを立ち聞きて、即ち館
の内へ走り入り、如何にもならばや、と思ひしが、五郎に憂身の惜まれて、只空しく歸
りける、心の中こそ無慙なれ。抑只今の言葉どもよく思へば、唯王藤内が言はする
言葉なり。今宵は落ちば落さんと思ひつれども、今の言葉の奇怪なれば、一の太刀には
左衛門、二の太刀には王藤内、と思ひ定めて、館よりこそ歸りけれ。

十五 屋形の次第五郎に語る事

五郎兄を待ち兼ねて、心もとなくして佇みける處へ、十郎來りて、「いかに待遠なるか」。
五郎聞きて、「さらぬだに人を待つは悲しきに、愚に思し召すものかな」。「祐成もさ存す
るを、敵左衛門が屋形へ呼び入れられ、酒をこそ飲みつれ」。「さていかに、便宜あしく
候ひけるか」。「言ふにや及ぶ。亂舞のをりふし、あはれと思ひしかども、御分一所にこ
そ、と存じて、堪へつる志おし量り給へ」。五郎も聞きて、「御ふちはさる事にて候へど

きい—紀清
の誤歟

も、是程よりつかずして心をつくす、便宜よく候はゞ御ふち候ふべきものを、さりなが
ら一太刀づつ、ともぐに斬りたく候ふぞかし。其の屋形の様御覽じ候ひけるにや」。
「其の爲案内はよく見おき候ひぬ。但し屋形の數多くして、見知りたる人は所々にこそ
候ひつれ。扇開きてこそは數へけれ。先君の御屋形に並べてうちたりしは、北條の四
郎時政、御一門には、一條、板垣、逸見、武田、小笠原、南部、下山、山名、里見の人
々、石山、山形、梶原、屋形を並べて候ふなり。東には、和田、畠山、黒戸、姉崎、本
田、榛澤、池邊、兒玉、小澤、山口、丹の横山、きいの兩黨、岡部、坂西、金子、村山
村折、なかさや、岡原、比企、中條、みたむろの人々、屋形をならべて候ふ。常陸の國
には、佐竹、山内、志田黨、近島、行方、こく、宍戸、森山、ちよはの殿原、下總の國
には、千葉介常胤、相馬次郎諸胤、けしの三郎胤盛、こくほの五郎胤道、たうの六郎胤
兼、葛西三郎清重、大猿島、大島、小原、屋形をならべ候ふなり。上野の國には、伊
北、伊南、廳北、廳南、印藤、金岡、小寺、深須、山上、大越、大室、上總の國には、
桐生、黒川、丹後、片山、新田、園田、玉村、安房の國には、安西、金丸、東條、信濃
の國には、内藤、片桐、黒田、周防、齋藤、村上、井上、高梨、海野、望月、屋形を並

おしむる
おほむるの
誤ならむ

べ候ふなり。下野の國には、小山、宇都宮、結城、長沼、氏家、鹽谷、木村、皆川、足柄、まのだの人々、屋形を竝べ候ひぬ。相摸の國には、座馬、本間、土屋、愛甲、土肥の次郎父子、糟屋の藤五、澁谷、佐藤、秦野の右馬丞、岡崎、三浦の人々、伊豆の國には、入江、薬科、木津川、船越、大森、桂山、遠江の國には、石尼、清水、參河の國には、設樂、中條、尾張の國には、大宮司、宮の四郎、關の太郎、美濃の國には、山本、柏木、たつる、錦織、佐々木黨、屋形を竝べ候なり。當番の人々には、結城の七郎川越、高坂、大胡、おしむる、難波の太郎、上總介父子、屋形を竝べしなり。坂東八箇國、海道七箇國のみに非ず、三年の一番、訴訟人といふ程の者の屋形、雲霞の如くなり。さて君の御座所をば真中に、四角四面に瑠璃を延べ、五十九間に飾られたり。面々思ひくゝの屋形造、いろくゝの幕の紋、金銀を鏤めてこそ飾られけれ。およそ屋形の數二萬五千三百八十餘軒なり。總じて上下の屋形の數、十萬八千軒のきを竝べてこうちをやり、葺を竝べてうちたりけり。東にそうたるは梶原平三景時、西のはづれば左衛門の尉祐經が屋形なり、幾程とこそ思ひけん。五郎聞きて、「客人は何處の國の如何なる人にて候ひける。」「備前の國の住人、吉備津宮の王藤内、手越の少將、木瀬川の龜鶴を

面にあて
面に向つて

竝べおきて、酒盛半なりしに呼び入れ、祐成も舞をまふ程の事なりつるに、面にあてよ。廣言どもしつる無念さよ。一刀さしいかにもと思ひけれど、和殿に命が惜まれて、手に握りたる敵を逃しつるこそ無念なれ。五郎聞きて、「是や寶の山に入り、手を空しくする風情なり。嬉しくも御こらへ候ふものかな。あまし候ふべきにも候はず。南無阿彌陀佛」とぞ申しける。

曾我物語 卷第九

一 和田の館へ行きし事

「來つて暫時も留らざるは、有爲轉變の悟、去りて再度歸らざるは、冥途黄泉の別なり。愛傷戀慕の悲、今にはじめぬ事なれども、日本國に我等程、物思ふ者あらじ、と案ずるに、劣らず歎をする者のあるべきこそ不便なれ。五郎聞きて、「たれやの者か我等に勝りて候ふべき」。さればこそとよ、備前の王藤内が、七年御不審蒙り、此度安堵の御下文を賜はりし使先に下り、かくといはゞ、國に留る親類、集り悦びあはん處に、又人下りて、討たれぬといふならば、さこそ歎かんすらん、と深き言葉を案ずるに、人として能あるものは、天の加護により、人として財あるものは、歎による、と見えたり。されば王藤内助けばよとは思へども、雑言餘に奇怪なれば、祐成に於ては餘す可からず。御分も漏すな」と申しければ、「承る」とぞ申しける。「かくて夜の更けん程待たんも遙なり。いざや和田殿の館へ行き、最後の對面せん」。然るべし」とて、二人打ち連れ、義盛の館

はるか—久
潤
斧の柄の朽
つる—晋の
王質山に入
りて仙人の
碁を圍むを
見暫時と思
ひし程に持
ちし斧の柄
朽ちたりと
の故事

へぞ行きける。頓て義盛出で合ひて、「いかに殿原達、はるかにこそ存ずれ。狩くらの體
是が初にてぞましますらん。何とか思ひ給ひけん。誠に見物には上やあるべき」。十郎扇
笏に取り直し畏つて、「さん候ふ。斯様の事は珍らしき見物、末代の物語に、あの冠
者に見せ候はん爲、二三日の用意にて罷り出で候ふが、餘の面白さに、斧の柄の朽つる
を忘れ、曾我へ人をこして候ふ。其の程と存じまりて候ふ」といひければ、和田聞き
て、何條其の儀あるべき。日比の本意を遂げんとするが、一家のみはてに、義盛に今一
度對面せんとてぞ來りぬらん、と哀に思ひければ、「さぞ思すらん。數度見て候ふだに
も面白く候ふ。まして若き人々の、初て見給はんにさぞ思し召すらん、嬉しくも來り給
ふ者かな。豫てより知り奉りなば、初より申すべかりつる者を」とて、酒取り出し勸め
けり。盃二三度廻りて後、和田宣ひけるは、「相構へて、せばよく爲給へ、爲損じなば一家
の恥辱なるべし。後楯には成り申すべし。頼もしく思ひ給へ」とて、盃さよれけり。折節
梶原源太館の前を通りけるが、かくいふを聞き、「何事ぞや和田殿、曾我の人々にせばよ
くせよと、仰せられつる不審なり。御耳にや入り候ふべき」といふ。和田殿聞きて、こは
如何に、曲者通りけるよ。さりながら陳じて見ん、と思ひければ、「自然の物語何と聞き

わざん—和
譏、前にい
づ
むもれ—お
ぼれの誤

て、御分御耳に入らんとは宣ふぞ。この面々我に親しき事、上にもしろし召されたり、
それにつきては御狩と承り、必ず召はなければども、末代の見物に、忍びて御供仕り候ふ。
若き者の習、木瀬川にて女共と遊び候ひしが、君相澤の御所に御入の由承り、急ぎ參
り候ひし間、引出物をせず候ふ。歸に何にても取らせんと申し候ふ間、道の者は恥しき
ぞ、引出物せばよくせよ。爲損じなば一家の恥ぞと申しつるが、此の事ならでは何申し
たりとも覺えず。急ぎ御申ありて、義盛失ひ給へ」と高聲なりければ、景季も、「一興に
こそ申し候へ。何とて和田殿は、某に逢ひ給へば、よし無き事にも角を立てと宣ふら
ん。是は苦しからぬ」とて、空笑して通りけり。なほもわざんの者にて、何とか言ふと暫
し佇む。是をば知らで、和田殿宣ふは、「水をよく泳ぐ者はむもれ、馬によく乗る者は落
ち、日は晝中に移る、月は満るに傾く、昊天に踞れ厚地に踏せよ、とあるをや、此
のものは十分に過ぎて如何ぞと覺ゆる」。五郎是を聞き、「御ちんほうを用ひす通る者な
らば、しや細首ねち切つて、捨て候ふべきを」と申しければ、梶原立ち聞きて、誠や此
の者は、朝比奈にみぎは勝の大力、鳥澁の者と聞きたり。此處にて事爲出し勝負せんよ
り、上様へ申しあげ、我が力もいらで失はん事、易かるべし、と思ひ定めて、聞かざるよ

しにて通りけり。和田宣ひけるは、「今暫くも候ひて物語申したけれども、源太と申す曲者が御前に参りつるが、いか様にか申し上げ候はんずらん。相構へて爲損じ給ふな」といひ置きて、和田は御前へぞまるられける。此の人々は館に歸り、夜の更くるを待ちけるが、やとありて十郎申しけるは、「件の梶原が御分がいひつる事を立ち聞きけるが、いか様大勢にて寄せぬと覺ゆる。館を替へん」と言ひければ、五郎聞きて、「源太程の奴何十人も候へ、一々に切り伏せなん」と申す。十郎聞き、「身に大事さへなくば、いふに及ばず、但し某に任せ候へ」とぞ申しける。

二 兄弟館をかへし事

かくて兄弟の人々は、柴の庵をひきはらひ、思はぬ所へより居つと、時を待つこそ哀なれ。是をば知らで、源太百餘人の兵を引き連れて、人々の館へぞ押し寄せたる。されども人なかりければ、日本一の不覺人、かやうに有るべしと思ひしに違はず、人にてはなかりけり、と高言して歸りしは、をこがましくぞ見えし。是や鼠深く穴を掘りて、群禽の害を遁れ、鳥高く飛んで、さうめいの害を遠ざけるとは、かやうの事なり。危ふ

かりし事どもなり。

三 曾我への文かきし事

さても兄弟の人々は、更けゆく夜半を待ち兼ねて、十郎いひけるは、「いざや此の際に、幼少より思ひし事を委しく文に書いて、曾我へ参らせん」。然るべし」とて、各文をぞ書きける。我等五つや三つの年より、父の討たれにし事忘るゝ隙なくて、七つ九つと申せしに、月の夜に出でて、雲井の雁金を見て父を戀ひ、明くれば小弓に小矢を取り添へて、障子を射通し、敵の命に準へ、彼を討たん事を願ひ歎きしを、母の制し給ひし事、また父の戀しき時は、一間所にて、二人は語りて慰めども、人々には言はざりしなり。祐成は十三にて元服し、五郎は十一より箱根に上り學問せしに、十二月の末つ方に、里々より衣裳音物、取り添へく餘の稚子達には送れども、箱王が里よりは贈物もなし。まして父の文もなし。明暮父を戀しく思ひて、権現へ参り、敵を見んと祈りしに、程なく御前にて、祐經を見そめし事不思議なりとて、法師になるべかりしを、此の事によりて、只一人夜に紛れて、曾我へ逃げ下りしなり。男になりて、母の勘當蒙りし事、又打ち出

音物―心づ
けの贈物

でし時、互の形見給はり参らせ置きて出し事、信濃の御狩に徒にて下り狙ひし事、虎に契をこめし事、鞠子川湯坂の峠、箱根寺大崩までの有様、矢立の杉の事ども、今の様に覺えたり。思ふ事ども詳しく書き、命をば父に回向申し、讀誦の御經は母に手向け奉る。親は一世の契と申せども、これを形見にて來世にては参り逢はん、と同じ心に書き止めければ、大きな巻物一つ宛ぞ書きたりける。十郎が言葉の末五郎に代りたるは、大磯の虎が事なり。五郎が言葉の十郎に代りたるは、箱根の別當の事なり。扱いづれも同じ文章なり。哀にこそは覺えけれ。

四 鬼王團三郎曾我へ歸りし事

扱鬼王團三郎を呼びて、「汝は急ぎ曾我へ歸るべし。小袖をば上へ参らせよ。馬鞍は曾我殿に奉れ。自然の時は御先途に代り参らせ候ふべき由、随分心に懸けしを、父の敵に志深くして、先立ち申す事無念に存じ候へども、恐れながら二人の子供の形見に御覽候へ。五つ三つよりして、左右の御膝にて、育てられ参らせし御恩、忘れ難くこそ存じ候へ。肌守と鬢の髪をば、弟どもの形見に御覽じ候へとて、二宮殿に参らせよ。弓と矢

自然の時
もしもの事
のある時

ゆきしき
すぐれて

は汝等に取りするぞ。亡き後の形見に見候へ。鞭と弓懸をば二人の乳母が方へやるべし。脊行膝は守り育てし二人が守に取らせよ。夜もこそ更くれば、是を持つて落ち候へ」と有りければ、二人の者共忍の形見を受取りて申しけるは、「我等相摸を出でしより、自然の事候はど、君より先に命を捨て、暫く三途の御供とこそ存じ候ふに、下郎をば命惜む者と思し召し、斯様に承り候ふか。只召し具せられ候へ。ゆきしき御用にこそ立ち申さずとも、志ばかりの御供」と申しければ、十郎聞きて「各が思ひ寄る所誠に神妙なり。斯様な者共を、世に無ければ恩をもせて離れん事こそ無念なれ。浮世の中何事も思ふやうにならば、いかで叶はぬ事あらん。主君ば三世の縁あり。來世にて此の恩をば報すべし。唯此の形見どもを、悉く曾我へ届けたらんは、最後の供に勝りなん。狩場に事出で來ぬと聞えなば、物思ふ子持ち給へる母の、我が子供やらんと歎き給はんに、急ぎ参りて此の由かくと申すべし。今少しもとく急げや」とありければ、團三郎承つて、「かへり候ふまじ。聞こし召せ。君をばちの中より某こそ取り上げ奉りては候へ。されば九夏三伏の暑き日は、扇の風を招き、立冬素雪の寒き夜は、衣を重ねて肌を温め参らせ、膽心を盡し育て、月とも星とも明暮は、見上げ見下し頼み奉り、御世に出でさせ給ひ候

九夏一夏九
十日

三伏一夏至
後の第三庚
日を初伏と
し第四を中
伏とし立秋
後の初庚を
末伏とす此
の二十日間
は極暑の候
也

ばど、誰やの者にか劣るべき、と頼母しくも可憐しくも思ひ奉り、今まで影形の如く附
き添ひ参らせたる印に、情無くも落ちよと承る、假令罷り歸りて候ふとも、千年萬年を
保ち候ふべきか、只御供に召し具せられ候へ」とて、稚き子の親の跡を慕ふ如くに、聲
も惜まず泣き居たり。兄弟の人々も、心弱くぞ見えける。いかにもして歸すべき者をと
聲を高くして、「如何に未練なり、君臣の禮黙止し難けれど、心に従ふを以つて孝行とせ
り。其の上終に添ひ果つまじき身なれば、名残惜しき事盡くべきにあらず。急ぎ出で候
へ」とて、荒らかにこそ宣ひけれ。鬼王居直り、畏つて申しけるは、「某も母の胎内を出
で、竹馬に鞭をあてしより、君に付き添ひ申し、成人の今に到るまで、片時も離れ奉る
事なし。其のしるしにや落ちよとの仰こそ、誠に御怨めしくは候へ。捨てられ参らせて
後、何に懲りて片時のながらへもあるべき。憂身の果こそ悲しけれ」と、さめくくと泣き
居たり。誠に志深く、なじみの久しければ、互に語り給へば、憂につけても、夜や明け
日や暮れん。「既に明方近くなるものを、急げや汝等、早くも行け」と重々責めければ、
二人の者共言ひかねて、「御供申すへき命何處も同じ事よ。住み果つべき終の住處、後れ
先だつ道芝の、變らぬ露の濡衣、拂ひて御供申さん」とて、二人が袖をひきちがへ、既に

しだい一兄
弟か

菩提一佛道

刀を抜かんとす。時致早くも座敷を立ち、二人が間に押し入つて、涙と共に言ひける
は、「誠に汝等が志は切なり。然りとは雖も、我々は程様を變へ制するを聞かずして、狼
藉を致すものならば、淺間大菩薩も御照覽候へ。未來永劫不興すべし。我等に命を捨つ
ると言ふとも、故郷へ形見を届けずば、長く志に受くべからず。此の上は制するに及ば
ず」と、荒らかにこそ叱りけれ。あかぬは君の仰なり、しだいの形見を給はつて、曾我へ
とてこそ歸りけれ。互の心の内さこそは悲しからめ、と思ひ遣られて哀れなり。

五 悉達太子の事

斯て鬼王團三郎は、次第の形見を賜り、泣くく曾我へぞ歸りける。是や悉達太子の十
九にて、菩提の志を起し、檀特山に入り給ひしに。車匿舍人鞆泥駒を賜り、王宮へ歸り
し思、今更思ひ知られたり。鞍の上空しき駒の口を引き、故郷へとは急けども、心は後
にぞ止まりける。五月雨の雲間も知らぬ夕暮に、何處を其所とも知らねども、其方ばか
りを顧みて、涙と共に歩みけり。心の中ぞ無慙なる。

六 兄弟出立つ事

一寸斑一烏
帽子の紐を
白黒一寸置
に斑に染め
たるもの
から質布一
さよみに同
じ木皮もて
製せる一種
の布

扱も此の人々は、郎黨共はこしらへ返しぬ。今は思ひ置く事なし。いざや最後の出立せん。然るべしとて、十郎が其の夜の出立には、白き帷子の腋深く搔きたるに、群千鳥の直垂の袖を結びて肩に懸け、一寸斑の烏帽子懸を強くかけ、黒鞘巻赤銅造の太刀をぞ持ちたる。同じく五郎が装束には、裕の小袖の腋深く搔きたるを、狩場の用意にやしたりけん、から質布の直垂に、蝶を二つ三つ所々に書きたるに、紺地の袴の括ゆるらかに寄せさせ、袖をば結びて肩に懸け、平紋の烏帽子懸を強くかけ、赤木の柄の刀を差し、源氏重代の友切肩に打ち懸け、誠に進める姿ぶきうが昔とも言ひつべし。頼母しとも餘りあり。十郎松明振り上げて、「此方へ向き候へや時致、飽かぬ顔見ん」と言ふ、五郎聞きて、敵に逢ひ刹那の隙もあるまじければ、是こそ最後の見參の爲なるべし。誠に祐成を兄と見奉らんも、今許と思ひければ、兄が顔をつくづくと守りけり。十郎も又弟を見んも是を限と思ひければ、松明差し上げつくづく見、涙ぐみけり。互の心の中推し量られて哀なり。「今は是迄候ふ。御急ぎ候へ」とて。五郎先に進みけるを、十郎袖を控へて、「女數

さうにや云
々一兎角仰
せらるるま
でもなし

多あるべきぞ、太刀の振り廻し心得候へ。罪造に手ばしかくるな。後日の沙汰も憚りあり」と言ひければ、「さうにや及び給ふ」とて、足早にこそ急ぎけれ。

七 館々の前にて咎められし事

五つ一夜の
八時頃

此處に座間と本間と館數十軒向ひ合ひてぞ打ちたりける。彼の兩人が郎黨箒を數多ところに焚かせ、木戸を結び重ねて固め、通るべき様なかりけり。如何せんとやすらふを見て、「何者ぞ是程に夜深けて通るは。殊に其の體事がましく出で立ちたり。怪しや通すまじ」とぞ咎めける。「苦しからぬ者なり。是も用心の態人をこそ咎むべけれ。」「いや誰にてもまませ、五つ打ちて後叶ふべからず、との御掟なり。通すまじき」とぞさよへける。十郎打ち向ひて、「御咎あるまじき者なり。是は土屋殿より愛甲殿への御使なり。通し給へ」と言ひければ、「さらば通せ」と許しけり。此處をば過ぎぬれど、いまだ幾個の木戸幾重の關警固をか通るべき。事難しき折節かな、と足早に行きけるに、千葉の介が館の前をぞ通りける。此處にも木戸おきぶく立てと、番装束の警固の者數十人、これも箒を焚きてぞ固めける。「何者なれば是程夜更けて通るらん。遣るまじき」とぞ咎め

おさへて一
強ひて

ける。五郎打ち寄りて、「御内方の者なり。苦しからず」とて打ち寄り、木戸を押し開く。「おさへて通るは様あり。我等が知らぬ人有るまじ。御内方とは誰なるらん。苗字を名乗れ」とぞ咎めける。「我等は苗字もなきものなり。通し給へ」と言ひければ、「御内方へとは虚言なり。やはか通る」と廣言して、木戸を荒くぞ押し立てたる。五郎は木戸を閉てられて、大きに怒つて言ひけるは、「苦しからねば通るなり。苦しき者の振舞をみよ。これこそさる所へ強盗に入る者よ。止めんと思はん奴原は組み止めよ。手には懸けまじき者を」と言ひければ、番の者共是を聞き、「夜半のひやうじは何の用ぞや。斯様の狼藉静めん爲なり。打ち止めよ」と追つ駈けたり。五郎も「心得たりや、事々し。懸かりて見よ」と言ふ儘に、太刀取り直し待ちかけたり。十郎少しも騒がず、静々と立ち歸り、「是は更に苦しからぬ者にて候ふ。廳南殿より廳北殿へ大事の御物具の候ふを、取りに参り候ふが、夜深に候ふ間人を連れて候へば、若き者にて酒に酔ひて雑言申し候ふ。只某に御免候へ」と、打ち笑ひてぞ言ひたりける。御免と言ふに勝に乗り、「さればこそとよ不審なり。其の儀ならば事易し。廳南殿へ尋ね申す可し。其の程待ち給へ」とぞ怒りける。十郎聞きて、かよる笑止こそなけれ、さりながらも陳じて見んと思ひければ、此の

者共怒りける其の中へ、ながくと立ち交り、「御分達我々をば見知り給はずや。廳南殿の御内に、彌源次彌源太とて、兄弟の既の者なり。何時ぞや宇都宮殿北山へ御出の時、見参に入りたりしをば、忘れ給ひ候ふや」と言ふ。其の中に溫和しき雑色歩み出で、十郎が顔をつくくんと守りけり。祐成彼奴は怖しと思へば、松明少し側へ廻し、眼を少し眇めて居たりけり、此の者共よくく守りて、「誠に思ひ出したり。片瀬より關戸へ御歸りに、参り逢ひたる様に覺ゆるぞや」。十郎、事こそよけれと思ひければ、「さぞとよ殿原、其の時の酒盛には、座敷の一の狂人ぞかし。忘れ給ふか」と言ひければ、「實に其の人にてましましたしけり。殿は人をば宣へども、二王舞をばし給はぬか」。傍なりける男が、「是程の知音にてましますや。御使なるに急ぎ通し給へ」と言ふ。「哀れ濁酒一桶あらば、如何なる御使なりとも、得手の二王舞を所望申さぬか。一番見たし」と言ひければ、十郎聞きて、「同じ心にて候ふ。さりながら後日に参り逢はん」とて、側目にかけてぞ通りける。此の者共打ち寄りて、「誤りけん、通り給へや人々」とて、木戸を開きて押し出す。兄弟の人々は、鰐の口を逃れたる心地して、十郎言ひけるは、「斯様の處にては、如何にも降を乞ふべきに、御分の雑言心得ず。孔子の言葉をば聞き給はずや。事を見ては勇む事

富樓那一釋迦十六弟子中にて説法第一の人

勿れ。太事の前に小事なし、とこそ見え候へ。身ながらも善くこそ陳じぬれ。是や富樓那の辯舌にて、波斯匿王の憤をやめけるも、今に知られたり」とぞ申し合ひける。

八 波斯匿王の事

「抑富樓那の辯舌にて匿王の怒をやめける由來を尋ぬるに、昔釋尊靈山にて法を説き給ひしに、波斯匿王問法結縁の爲に參らせられたり。富樓那尊者と申すは、辯舌第一の佛弟子にて座しけり。然れども匿王の臣下の子なり。教法に心を染めて、匿王の方をだに見遣り給はざりけり。匿王怒りを爲して曰く、「扱も尊者は自ら佛前にありつるを、終に夫とだにも見られざりつる奇怪さよ。此の度參らん時は、其の色見すべし」とて、高臣數相具し、怨敵を含みて參られける時、富樓那尊者は路中にて行き逢ひ給ひ、如何に尊者、何處へ、と宣ふ。尊者聞き給ひて、殊の外恭敬して、過ぎにし佛の御説法の時、君參り給ひしかども、法文歡喜の砌、身を忘れ他を知らざりし事なれば、其の禮更に無かりしなり。匿王は未だ心ぞく残り、是非にたづさはり給ひき。それ亦道理なきに非ず。御憤黙止し難し。王宮よりの御企、さぞと知られて急ぎ參りたり。誠に此の道理辨へ

如禪定の時は云々一眞實修行に入る時は一心をこめて他事あるまじき也

長道具一長刀熊手類の長き武器

給ふにや、眞如禪定の時は、無二亦無三と説かれてこそ候へ。さるにおきて自も無く他もなく、法界平等なり、何者かありて、邪とも又正とも隔てん。萬法一如にして、阿字本不生の願をなし給へ、と示し給ひければ、匿王猶しも邪に入つて、自らが言葉徒になりて、無禮に等しく候ふべきにや。愈怒を高くして、尊者の理に受け候はず。是ひとへに驕慢嗔恚の外道と、あさましくこそ覺えけれ。其の時富樓那、にやくいしきたんかいをんしむしやうくが、斯様の人は、正に邪道を行じて、如來を見る事叶ふべからず、とこそ説かれて候へ。色に耽り言葉に尋ねんは、むじやうしはくかんく」と見えたるをや」。匿王猶承つて、其の繩は誰か致しける。其の心に歸りて尋ね給へど、外には無し、と宣ひける所に、匿王一理を受けて、恭敬禮拜して、佛果に生じ給ふ。即ち尊者引き具し、靈山に參り給ふ。實にや本文に、私の志を忘れ、誠の苦行によつて、波斯匿王も方便の教化によれり。かへすく私なしとこそ示されてこそ候へ。但し梶原と言ふ曲者の館の前如何すべき。我等を見知りたる者なり。されども歸るべき道にもあらず。浮沈爰に極れり。運に任せよ」とて通る。案の如く辻固の兵、數十人長道具立ち並べ、誠に厳しく見えたり。詮方なくして、「南無二所權現助け給へ」と念じて、知らぬ様にて通

りけり。されば神慮の御助にや、咎むる者も無かりけり。「すはや好きぞ」と叫きて、足早にこそ通りけれ。唯事ならずとぞ見えける。

九 祐経館をかへし事

既に祐経が館近くなりて「此所ぞ」と言へば、打ち領き既に館へ入らんとしける時、十郎弟が袖を控へ、「我々敵に打ち逢ひなば、刹那の隙も有るまじ。今こそ最後の隙なれ。心静に念佛せよ」と言ひければ、「然るべし」とて、兄弟西に向ひて手を合せ、「臨命終の佛達、親の爲に回向する、迎へ取り給へ」と祈念して館の中へぞ入りにける。されども王藤内が申す様に随ひ、祐経思はぬ所に館をかへたりければ、唯空しく土器踏み散して、一人も無かりけり。是は如何にと松明振り上げ見れば、館も同じ館、座敷も宵の所なり。人は多く伏したれども、晝の狩場に疲れ、酒に酔ひ伏しければ、誰そと咎むる者もなし。此の人々は力無く館を立ち出でて、天に仰ぎ地に伏し、悲みけるぞ道理なる。「敵に縁なき者を尋ぬるに、我等には過ぎじ。今宵はさりとともと思ひしに、あましぬるこそ口惜しけれ。斯様にあるべしと知るならば、曾我へ人をば返すまじき者を、さなきだに世間

に披露せられんこそ悲しけれ。自害して失せなん」とて立ちたりけれ。

十 祐経討ちし事

去る程に兄弟の人々、敵は討ち漏しつ、呆れて立ちたる處に、秩父殿の御内なる本田の次郎親經、具足指し固め、夜廻の番なりしが、「庭上今宵も餘しけるよ」と、小聲に言ふ音しけり。いか様伊豆駿河の盜賊の奴原にてあるらん。討ち止め高名せん、と思ひ、太刀の鐔元二三寸透し、足早に歩み寄りけるが、心をかへて思ふ様、一定曾我の殿原の、日比の本意を遂げんとて、夜晝附け廻りつるが、左様の人にてもや、と障子の隙より忍びて見れば、案にも違はず、兄弟は敵のかへたる館を知らで、呆れてこそは居たりけれ。痛はしく思ひ、左衛門の尉が伏したる館の妻戸を密に押し開き、何とも物をば言はずして、扇を出して招きけり。五郎此の由きつと見て、本田が我等を招くは様こそあれ、と思ひ、松明わきに引き側め、廣縁につと上り、「何事ぞや本田殿」と叫けば、本田小聲になりて、「夜陰の苗字は詮無し。波にゆらるよ沖つ船、知邊の山は此方ぞ」と言ひ捨てよこそ忍びけれ。「其所とも知らぬよる浪、風を頼りの港入り、心有るよ」と戯れて、館の内

無明の酒一
昏迷して覺
むる期なき
をいふ佛經
の語
優曇華一譯
して瑞應華
といふ三千

へぞ入りにける。兄弟ともに立ち添ひて、松明振り上げよく見れば、本田が教に違はず、敵は此所にぞ伏したりける。二人が目と目を見合せ、あたりを見れば人もなし。左衛門の尉は、手越の少將と伏したり。王藤内は疊少しひき退けて、龜鶴とこそ伏しにけれ。十郎敵を見付けて弟に言ひけるは、「和殿は王藤内を斬れ。祐經をば祐成に任せよ」とこそ言ひける。時致聞きて、「愚なる御詞かな。我々幼少より佛神に祈りし事は、王藤内を討たん爲か。此の者は逃げば逃すべし。立ち逢はど斬るべし。祐經をこそ千太刀も百太刀も、心の儘に斬るべけれ。早斬り給へ、斬らん」とて、勇み懸りて立ちたりけり。果報目出度祐經も、無明の酒に酔ひぬれば、敵の入るをも知らずして、前後も知らでぞ伏したりける。二人の君どもをば衣に押し巻き、疊より押しおろし、「汝聲立つな」と言ひて、松明側に指し置き、十郎枕に廻りければ、五郎は後にぞ廻りける。二人の君共はじめより知りたりけれども、餘り恐しさに、音もせず。兄弟の人々は、祐經を中に置きて、各目と目を見合せ、打ち領きて喜びけるぞ哀れなる。三千年に一度花咲き實なる、西王母が園の桃、優曇華よりも珍しや。優曇華をば拜みて手折ると言ふなれば、それに見ゆる敵なれば、拜みて斬れや斬れとて、二人が太刀を左衛門の尉に、當てとは引

年に一度現
す

き引きては當て、七八度こそ當てにけれ。やゝありて時致、此の年月の思ひ、唯一太刀にと思ひつる氣色顯はれたり。十郎是を見て、「待て暫し、寢入りたる者を斬るは、死人を斬るに同じ。起さんものを」とて、太刀の切先を祐經が胸もとに指し當て、「如何に左衛門殿、晝見參に入りつる曾我の者共参りたり。我等程の敵を持ちながら、何とて打ち解け伏し給ふぞ。起きよや左衛門殿」と起されて、祐經もよかりけり、「心得たり。何程の事あるべき」と、言ひも果てず起き様に、枕元に立てたる太刀を取らんとする所を、「やさしき敵の振舞かな。起しは立てじ」と言ふ儘に、左手の肩より右手の脇の下、板敷までも通れとこそは斬り付けよれ。五郎も「得たりやおう」と罵りて、腰の上手をさし上げて、疊板敷斬り通し、下もち迄ぞうち入りたる。道理なるかな、源氏重代友切何者か堪るへき。當るに續く所なく、「我幼少より願ひしもこれぞかし。妄念拂へや時致」「忘れよや五郎」とて、心の行くく三太刀宛こそ斬りたりけれ。無慙なりし有様なり。

十一 王藤内を討ちし事

斯て後に伏したる王藤内、寢おびれて、「詮なき殿原の夜中の戲哉。過し給ふな、人違し

給ふな。人々をば見知りたり。後に争ふな」とは言ひけれども、刀をだにも取らずして、高這にしてぞ逃げたりける。十郎追つ懸けて、「晝の詞には似ざるものかな。何處迄逃ぐるぞ。餘すまじ」とて、左の肩より右の乳の下かけて、二つに斬つて押し退けたり。五郎走り寄り、左右の高股二つに斬りて押し退けたり。四十餘の男なりしが、時の間に四つになりてぞ失せにける。逃げば逃がすべかりし者を、かいふしては逃げずして、慙なる詞言ひて四つになるこそ無慙なれ。五郎、王藤内が果を見て、一首取り敢へず詠みたり。

馬は吠え牛は嘶くさかさまに四十の男四つになりけり

十郎聞きて「よく仕りたり。一期詠じても、是程こそ詠み候はんすれ。秀歌に於ては、時致集にも召されなん。思ふ本意をば遂げぬ。今は憚る事無し」と、高聲に言ひ散し、どつと笑ひて出でにけり。

十二 祐經にとどめを刺す事

扱も兄弟は、敵を心の儘に討ちて、門より外に出でけるが、十郎言ひけるは、「祐經にと

れたに―れ
たさに歟

さんき―慚
愧なるべし
六根―耳目
鼻舌身意

どめを刺しけるか。とどめは敵討つての法なり。實檢の時、とどめの無きは、敵討ちたるに入らず。「さらばとどめを刺し候はん」とて、五郎立歸り、刀を抜き取つて押へ、「御邊の手より賜はつて候ふ刀ぞかし。只今返しぬるぞ、確に受け取り給へ。取らずと論じ給ふな」とて、柄も拳も通れくと刺す程に、餘りに繁く刺しければ、口と耳と一つになりにけり。扱こそ後に人の申しけるは、「宵に悪口せられし其のねたに、慙と口を裂かるよ」とぞ申しける。幼少より敵を見んと箱根に祈請申し、御前にて祐經を見初むるのみならず、一腰の刀を得たり、今とどめを刺したる刀是なり。權現の御恵とて感じける。流石に離れぬ一門の中、哀れとや思ひけん、「我過去の宿業と言ひながら、一念の瞋恚により、敵味方とは隔てたるなり。さんき懺悔の力により、六根の罪障を消滅し、因果の輪廻を只今盡し果てよ、一念の菩提心誤り給はで、一つ蓮の縁となし給へ。阿彌陀佛」と回向して、館をこそは出でたりけれ。十郎は庭上に立ちて、五郎を待ち得て言ひけるは、「我々名乗りて人々に知られん」「尤も」とて、大音聲にて罵りけり。「遠からん人は音にも聞け、近からん者は目にも見よ。伊豆の國の住人、伊東の次郎祐親が孫、曾我の十郎祐成、同じく五郎時致とて、兄弟の者共、君の館の前にて、親の敵一家の工藤左衛



門の尉祐經を討ち取り罷り出づる。我と思はん人々は、討ち止め高名せよ」と言へども、晝の狩場に疲れければ音もせず。小柴垣の下に跳り寄り、猶聲を擧げて呼ばはりければども、東西南北に音もせず。三浦の館には、かねてより知りたれば、態と出づる者もなし。次の館に聞き付けて、坂西、赤澤、柏原を始として、宗徒の者共出でんとする所を、重忠聞き、「餘りな騒ぎぞ。一定曾我の人々が本意を遂ぐると覺えたり。如何に嬉しく思ふらん。心静によくさせよ。さらぬだに若き者は、心騒ぎて仕損ずる事ありぬべし。静まり候へ」とありければ、出づる者こそなかりけれ。兄弟の人々は暫し休らひ、敵を待てども無かりければ、十郎言ひけるは、「いざや時致一先落ちて、今一度母に逢ひ奉り、思ふ事をも語り申し、猶事延びば、鬚を切り、如何ならん野の末、山の奥にも閉ぢ籠り、父の孝養をもせん。それ叶はずば心静かに念佛申し、自害するまで」と言ひければ、五郎聞き、餘りの憎さに音もせず。稍ありて、「此の仰こそ條々然るべしとも覺えず候へ。弓矢取る者の習には、假初にも一足も逃ぐると言ふ事、口惜しき事にて候ふ。命の惜しき者こそ入道をもし山林に閉ぢ籠り候はんすれ。幼少より思ひし事は遂ぐるなり。何事を思ひ残して落ち候ふべき。母に對面の事、科を懸け奉るべき爲か、させる孝

養報恩をこそ送らざらめ。科も無き母痛められ、子供の行方知らぬ事あらじとて責め問はれ、禁獄死罪にも行はれば、我等がいたさずして叶ふまじ。心に逃げ隠れ居て、彼所此所より搦め出だされ、あまつさへ諸國の侍共に、幾程の命惜みて、曾我の者共が鬚切り乞食をす。と沙汰せられん事は恥かし。其の上一旦隠れ得たりと言ふとも、東は奥州外の濱、西は鎮西鬼界が島、南は紀伊の路熊野山、北は越後の荒海までも、君の御息の及ばぬ所あるべからず。天に翔り地に入らざらん程は、一天四海の内に、鎌倉殿の御權威及ばざる事なし。唯羅網の鳥、釣を含む魚の如し、信實の仰とも覺えず。時致におきては、向ふ敵あらば、太刀の目釘堪へん程は、命こそ限りなれ」と申しければ、十郎聞きて、「和殿が心見んとてこそ言ひたれ。祐成が心をもかねてより知りぬらん。一足も引き候ふまじき」と語りひて、寄する敵をぞ待ちかけたり。

十三 十番斬の事

去る程に夜討の時、恐しさに聲も立てざりし二人の君共が、「御所中に狼藉人ありて祐經も討たれたり、王藤内も討たれたる」と、聲々にこそ呼ばはりければ、鎧、甲、弓矢、太刀

六種震動一
佛説に見ゆ
即ち動起踊
(以上形)震
吼覺(以上
聲)の六
董猶は云々
一香草と臭
草、善惡一
にすべから
ざる喻、世
説に見ゆ
けう鷲一梟
鷲にてふく
ろうと鳳凰
なるべし

馬よ、鞍よ、とひしめき周章つる程に、具足一領に二三人取り付きて、引き合ふ者もあり、繫馬に乗りながら、打ちあふる者もあり、某かれがしと罵る音は、唯六種震動にも劣らず。稍ありて武者一人出で来て申しけるは、「何者なれば我が君の御前にて、斯る狼藉をば致すぞ。名乗れ」とぞ言ひける。十郎打ち向ひて、「以前名乗りつれば定めて聞きつらん。斯く言ふ者は如何なる者ぞ。」「是は武藏の國の住人、大樂の平馬の助」と名乗る。祐成聞きて「董猶は入る者を同じくせず、けう鷲は翼を交へず、我等に逢ひて斯様の事は過分なり。これこそ曾我の者どもよ、敵討つて出づるぞ。止めよ」と言ひて追つ駈けたり、馬の助詞には似ずかいふつて、逃げにけるが、押付のはづれに胛骨かけて打ち込れ、太刀を杖につき引き退く。二番に是等が姉婢、横山黨愛甲の三郎と名乗つて押し寄せたり。五郎打ち對ひ言ひけるは、「紫燕は柳樹の枝に戯れ、白鷺は蓼花の蔭に遊ぶ、斯様の鳥類までも、己が友にこそ交はれ。御分達相手には不足なれども、人を選ぶべきに非ず。時致が伎倆の程を見よ」とて、紅に染りたる友切眞額に差し挿し、電の如くに飛んで懸る。叶はじとや思ひけん、少し痿む處を、進みかよつて討ちければ、五郎が太刀を受け外し、弓手の小腕を打ち落されて引き退く。三番に駿河の國の住人、岡部の三郎

いしく一よ

十郎に走り向ひて、左の手中中指二つ討ち落されて逃げけるが、御所の御番の内に走り入り、「敵は二人ならでは無く候ふ。いたくな騒ぎ候ひそ」と言ひければ、「神妙に申したり。いしくも見たり」とて、高名の御意にぞ預りける。四番に遠江の國の住人、原の小次郎斬られて引き退く。五番に御所の黒弥五と名乗り押し寄せ、十郎に追ひ立てられ、小鬢斬られて引き退く。六番に伊勢の國の住人、加藤の彌太郎攻め來つて、五郎が太刀を受け外し、二の腕斬り落されて引き退く。七番に駿河の國の住人、船越の八郎押し寄せ、十郎に高股斬られて引き退く。八番に信濃の國の住人、海野小太郎行氏と名乗りにて、五郎に渡り合ひ、暫し戦ひけるが、膝を割られて大居に伏す。九番に伊豆の國の住人、宇田の小四郎押し寄せ、十郎に打ち合ひけるが、如何がしけん、首討ち落されて廿七歳にて失せにけり。十番に日向の國の住人、臼杵の八郎押し寄せ、五郎に渡り合ひ眞額割られて失せにけり。此の次に、安房の國の住人、安西の彌七郎と名乗つて、「敵は何處にあるぞや」とて立ちけるが、十郎打ち向ひて、「人々は優くも面も振らで討死したるは見つらん。愚人は銅を以て鏡とす、君子は友を以つて鏡とす。引くな」と言ひて討ち合ひけり。彌七も然る者なり、「さうにや及ぶ」と言ひあへず飛んで懸る。十郎足を踏

高紐―鎧の
胴釣りの紐

無下なる者
―甚つまぬ
者

み違ひ、側目にかけてちやうど打つ。肩先より高紐の端へ、切先を打込まれ、引き退くと見えしかど、それも其の夜に死ににけり。比しも五月廿八日の夜なりければ、闇さは暗し、降る雨は車軸の如くなり。「敵は何處にあるぞや」とて、走り廻る所を、小柴垣に立ち隠れて、出づるをちやうど斬りては陰に引き籠り、向ふ者をばたと斬る。斬られて引き退く者を、後陣に受け取りて、味方討する所もあり。二人の者共、呼ばはりけるは、「武藏相摸のはや者共は如何に。是も重代是も重代と思ふ太刀と刀の鐵の程をも見せよかし。敵は十人ある、二十人あると、後日に沙汰するな、我等兄弟許ぞ。火を出せ其の明にて名乗り合はん。無下なる者共かな」と呼ばはりければ、御厩の舍人、時武と言ふ者、傘に火を付けて投げ出す。之を見て館々より我劣らじと、雑人の蓑笠に火を付けて投げ出す。二千軒の館より、松明を出しければ、萬燈會の如し、白晝にも似たり。彼等二人は素肌にて敵に逢はんと走り廻る有様は、小鷹の鳥に逢ふが如し。斯る處に武藏の國の住人、新開の荒四郎と名乗りかけて、進み出でて申しけるは、「敵は何十人もあれ。某一人にや越ゆべき。出で會へや對面せん」とぞ言ひたりける。十郎打ち向ひて、「優しく聞ゆる者かな。大將に代りて仕へる者は、必ず其の陣を破るとは、文選の詞なるを

べつの次郎
―親の別當
の別を取り
たるならむ
恥ある―名
譽を重んず
る

や、引くな」と言ひて飛んで懸る。言葉は主の恥を知らず、「御免あれ」とて逃けるを、十郎繁く追つ駈けたり。餘りに逃所なくして、小柴垣を破りて、高這にして逃げにけり。次に甲斐の國の住人、市川黨に、別當の次郎進み出でて申しけるは、「如何なる白痴なれば、君の御前にて斯る狼藉をば致すぞ。名乗れ聞かん」と言ふ。五郎申しけるは、「事新しき男の問ひ様かな。曾我の冠者原が、親の敵討ちて出づると幾度言ふべきぞ。臆して耳が潰れたるか。親の敵は陣の口を嫌はず。扱斯様に申すは誰人ぞ聞かん」と言ふ。「是は甲斐の國の住人、市川黨の別當の大夫が次男、べつの次郎定光」とぞ答へける。五郎聞きて、「吾殿は盗人よ。御坂片山つるはんどくに籠り居て、京鎌倉に奉る年貢御物のひやうじの少なきを、遠矢に射て追ひ落とし、片山里の下司人の立て逢はざるを夜討などにし、物取る様は知りたりとも、恥ある武士に寄り合ひ、晴の軍せん事はいかでか知るべき。今時致に逢ひて習へ、教へん」とて、躑り懸り打つ太刀に、高股きられて引き退く。是等を始めとして、兄弟二人が手に懸けて五十餘人ぞ斬られける。手を負ふものは三百八十餘人なり。數々出づる松明も、一度に消えて元の闇にぞなりにける。人は多くありけれども、此の人々の氣色を見て、此所や彼所に群立つて、寄する者こそ無かりけ

れ。

十四 祐成討死の事

一河のしるし一説法明
眼論に曰く
宿三樹下、
汲三河流、
一夜同宿一
日夫妻、皆
是先世結縁

稍暫時ありて、伊豆の國の住人に新田の四郎、十郎に打ち向ひ、「如何に曾我の十郎祐成か」「むかひは誰ぞ」「新田の四郎忠常よ」「扱は御分と祐成は正しき親類なり」「其儀ならば互に後ばし見するなよ」「左右にや及ぶ。今宵未だ尋常なる敵に逢はず。言甲斐なき人の郎黨の手に懸らんと心に懸りつるに、御邊に逢ふこそ嬉しけれ」「一河のしるしに同じくは、忠常が手に懸けて、後日に勸賞に行はれ給はゞ、御邊の奉公と思ひ給へ」と言ひて打ち合ひける。十郎が太刀は少し寸延びければ、一の太刀は新田が小肘に當り、次の太刀にて小鬘を斬られけり。されども忠常、究竟のつはものなれば、面も振らず、大音聲にて罵りけるは、「伊豆の國の住人、新田の四郎忠常、生年二十七歳、國を出でしより、命は君に奉り、名をば後代に止め、屍は富士の裾野に曝す、さりとて後は見すまじきぞ。御分も引くな」と言ふ儘に、互に鎧を削りあひ、時を移して戦ひけるに、新田の四郎は新手なり、十郎は臂よりの疲武者、多くの敵に打ち合ひて、肱下り力も弱

犬居になり
て一尻もち
つきて

り、太刀より傳ふ血ののりに、手の内繁く廻りければ、太刀を平めて討ちければ、十郎が太刀鏢元より折れにけり。忠常勝に乗つて討つ程に、左の膝を斬られて、犬居になりて腰の刀を抜き、自害に及ばんとする所を、忠常太刀取り直し、右の肘の端を指し通す。忠常今はかうと思ひ、館を差して歸りけるを、十郎伏しながら、懸けたる言葉ぞ無慙なる。「や殿、新田何處へ行くぞ、情なし。同じくは首を取つて、上の見参に入れよ。親しき者の手に懸らんは本意ぞかし。返せや殿、忠常」と呼ばられて、實にもとや思ひけん、即ち立ち歸り、乳の間斬りて押し伏せたる。祐成が最後の言葉ぞ哀れなる。「五郎は何處にあるぞや。祐成こそ新田が手に懸り、空しくなるぞ。時致は未だ手負ひたるとも聞えず、如何にもして君の御前に参り、幼少よりの事ども、一々に申し開きて死に候へ。死出の山にて待ち申すべきぞ。追つ付き給へ南無阿彌陀佛」と言ひも果てず、生年廿二歳にして、建久四年五月二十八日の夜半許に、駿河の國富士の裾野の露と消えにけり。弓箭取る身の習、今に始めぬ事なれども、親の爲に命を軽くし、屍は路逕の岐に捨つれども、名をば龍門の雲井にあぐる、哀と言ふも愚なり。五郎は兄が最後の言葉を聞きて、死骸なりとも今一目見んと思ひ、又忠常を討つべきと思ひけん、太刀振り廻し、大勢の中

龍門一白樂
天の詩の語
前にいづ

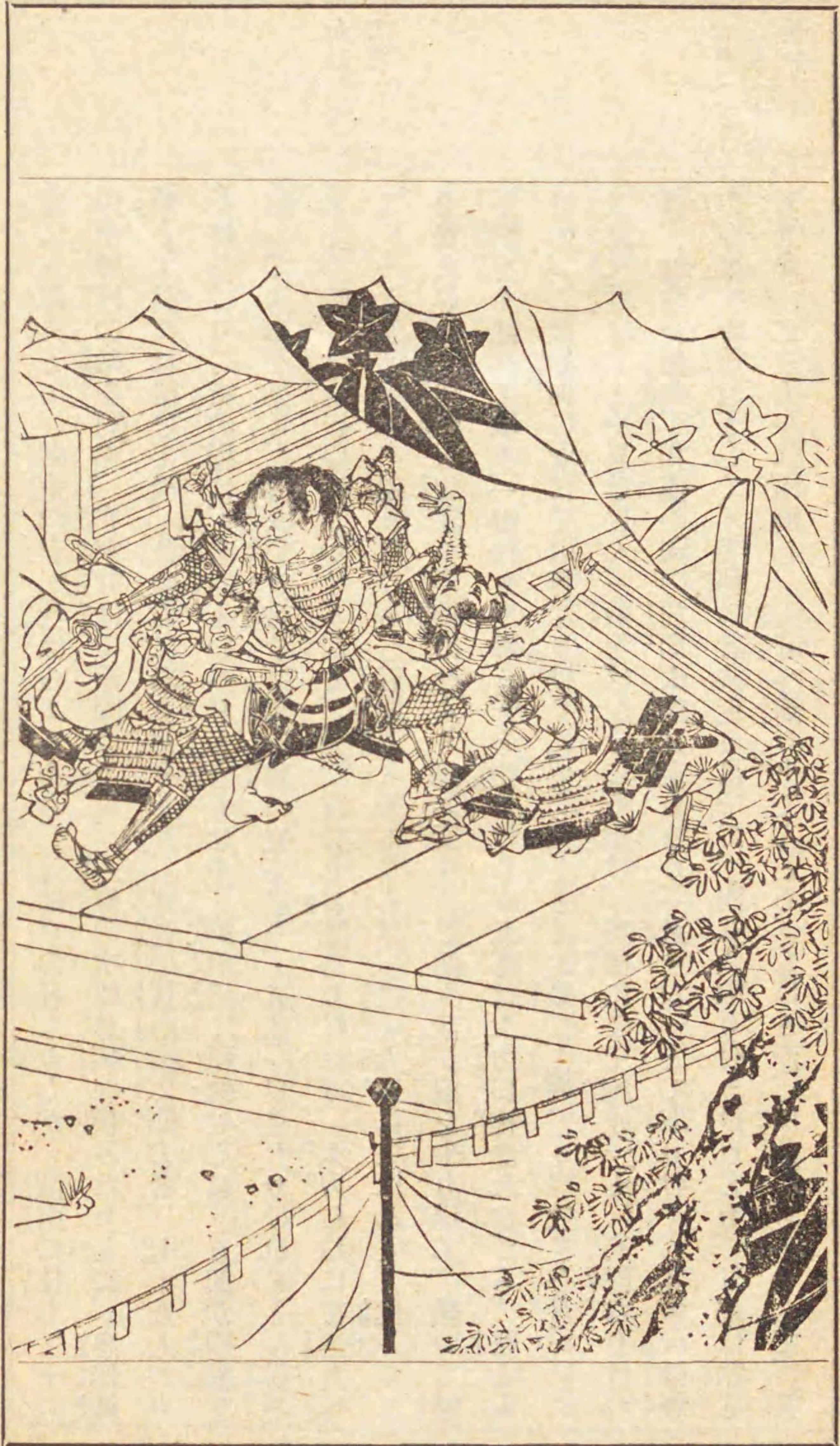
を斬り分けて走り寄り、兄が死骸に轉び懸り、「恨めしや時致をば誰に預け置き、何處まで生きよとて、捨てよは何處へ御座するぞや。ながらへ果つべき憂身にも非ず。連れて座ませや」と打ち口説き、涙に咽びて伏したりけり。實にや同じ兄弟と言ひながら、互の志深ければ、別の涙さぞ有るらんと推し量られて哀なり。茲に又堀の藤次と名乗りて、武者一人出でて、「五郎は何處へ行きたるぞや。兄が討たるよを見捨てよ落ちけるかや。未練なり」とて尋ねける。五郎此の詞を聞き、起き上り太刀取り直し、「や殿、藤次殿、兄の討たるよを見捨てよ、何處へか落つべき。祐成は新田が手にかよりぬ。時致をば吾殿が手にかけて首を取れ。惜まぬ身ぞ」と言ひければ、藤次は五郎が太刀影を見て、かいふいて逃けにける。五郎追つ懸け、「汝は何處まで逃ぐるぞ」と追つ懸けよれば、他所へ逃げては叶はじとや思ひけん、御前さして逃けにける。五郎も續いて入りければ、親家幕をつかんで投げ上げ、御侍所へ走り入り、五郎も幕を投げ上げて、親家を掴まん掴まんと思ひける風姿は、只天魔の如く、雷の落ちかよるかと思ひ覺えける。

十五 五郎召し捕らるる事

太刀むね
刀背

ならへず
こらへずの
誤か

爰に五郎丸とて、御寮の召し仕はる童あり。元は京の者なりしが、叡山に住して十六の年師匠の敵を討ち、在京叶はで東國に下り、一條の次郎忠頼を頼みたりしに、忠頼御敵とて討たれ給ひて後、此の君に参りたりしが、究竟の荒馬乗の剛の者、七十五人が力を持ちけり。宵の程は、夜討といへども音もせず、御前近く祇候せしに、五郎が親家を追うて入るを見て、薄衣引き被き、幕の傍に立ちけり。五郎一目見たりけれども、館を出でし時、女房に手ばしかくるなど、兄が言ひし言葉ありければ、太刀むねにて通り様に、一太刀當てよぞ過ぎにける。五郎丸と知るならば、唯一太刀に失はんと、危ふくこそ覺えけれ。時致も親家を手捕にせんと思ふ所を、五郎丸我が前をやり過し、續いて懸る腕をくはへて取り、「得たりやおう」と抱きける。五郎は大力に抱かれながら、物ともせず、「こは如何に女にては無かりけり。物々しや」と言ふ儘に、續いて内へぞ入りける。五郎丸叶はじとや思ひけん、「敵をばかうこそ抱け、斯様にこそ抱け」と、高聲なりければ、彼等が傍輩、相摸の國の前司太郎丸走り寄り、「逃すな」と取り付く。其の後御厩の小平次を始めとして、手柄の者共走り出でて、四五人取り付きけれども、五郎は物ともせず、二三人をば蹴倒し、大庭へ躡り出でんと心ざしけるが、板敷ならへずして、五



五郎丸
時致と
紐為の圖



かなぐりー
一本下につ
くの二字あ
り

郎は足を踏み落し、立たんくとする所に、小平次起き上り、双の足に取り付きければ、其の外の人々、餘すな漏すなとてかなぐり、是や文選の辭に、百足虫は死に至れども戯れずと言ふ、心は猛く思へども多勢に叶はずして、空しく搦め捕られけり。無慙なりし有様なり。君も此の由聞こし召して、糸毛の御腹巻に御重代の鬚切ぬき、出でさせ給ひける所に、相摸の國の住人、大友左近將監が嫡子に、一法師丸とて生年十三になりけるが、御前さらぬ者なるが、小賢しく御寮の御袖を控へ奉り、「日本國だにも君は居ながら從へ給ふに、是は僅なる事ぞかし。いか様若き殿原の醉狂か、又は女の盃論か宿論か、いづれにてか候はんには、御座ながら尋ね聞こし召され候へ」と止め申しければ、實にもとや思し召しけん、止まり給ひけり。さしも出でさせ給ひて、五郎に見えさせ給ふものならば、危くぞ覺えける。後に彼の一法師いしくも申したりとて、御恩賞にぞ預りける。誠に古き言葉を見るに、大さうとうけいに遊ばず、君子はふんしに拘はらず、と言ふ事、今こそ思ひ知られたれ。其の後小平次御前に参り、畏りて申し上げけるは、「曾我の五郎を搦め捕りて候ふ。十郎は討たれて候ふ」と申したりければ、「神妙に申したり。五郎をば汝に預くるぞ」と仰せ下されける、哀なりし次第なり。

曾我物語 卷第十

一 五郎御前へ召し出され聞こし召し問はるゝ事

扱も仰を承つて小平次罷り出で、御厩の下部、總追國光五郎を預り、既に御厩の柱に縛り付けて、其の夜は守り明しける。「大將殿より尋ね聞こし召さるべき事あり、曾我の五郎連れて参れ」との御使ありければ、小平次繩取にて参りけるを、母方の叔父、伊豆の國の住人に、小川の三郎祐定申しけるは、「如何に小平次侍程の者に繩付けずとも、具して参れかし。山賊海賊の輩に非されは、逃げ失すべきにも非ず。事により人にこそよれ。無下に情無し」と言ひければ、五郎聞きて、「誰一言の情を残す者のなきに、御分の芳志の嬉しさよ。さりながら御分、時致に親しき事皆人知れり。斯様になりて親類入るべからず。詮無き沙汰して人に聞かれ、荷擔人したりと言はれ給ふな。人の上を善く言ふものは無きぞとよ。時致は、盜強盜せざれば、千筋の繩は付くとも恥ならず。是は父の爲に誦み奉りし、法華經の紐よ」とて、事とも思はざる氣色して、御坪の内へぞ引き

御坪—中庭

入れられける。「其の上敵の爲に捕はる者、時致一人にも限らず、般湯は夏臺に捕はれ、文王は菱里に捕はる、更に恥辱に非ず」とて、打ち笑ひてぞ居たりける。哀と言はぬ者ぞなき。五郎御前に参りければ、君御覽せられて、「これが曾我の五郎と言ふ者か」。一某が事候ふよ」とて立ち上り、繩取中に引き立てければ、警固の者共、狼藉なりとて引き据ゑたり。其の時相摸の國の住人新開の荒四郎實光、伊豆の國の住人、狩野の助宗持座敷を立つて、「申し上ぐべき事あらば、急ぎ申し候へ」と言ふ。時致聞きて大の眼を見出して、彼等を礎と睨みて、「見苦しきぞ人々、御前遠くばさもありません。近ければ直に申すべし。左様なれば問はれて申す白狀に似たり。問はるによりて申すまじき事を申すに非ず。面々骨折りに退き候へ」とて、嘲笑ひてぞ居たりける。君聞こし召され、「神妙に申したり。各退き候へ。頼朝直に聞くべし」と仰せ下されけり。扱五郎居直り、顔振り上げて、高らかに申しけるは、「兄にて候ふ十郎が最後に申し置きて候ふ。我等が父を祐經に討たせ候ひしより以來、年月狙ひし心の内、如何許とか思し召され候ふ。それにつき候ひては、一年君御上洛の時、酒匂の宿より付き奉り、祐經が御供して候ひしを、泊泊に徘徊し、便宜を窺ひ候ひしかども叶はで京にり上、四條の町にて鐵よき太刀を買ひ

取り、昨夕の夜半に御前にて、本意を遂げ候ひぬ。今は何をか思ひ残して、命惜しく候ふべき。御恩には、今一時も疾く頭を刎ねられ候へ」とぞ申しける。彼は京へは上らざりしかども、箱根の別當に契約せし故、太刀の出所をも隠し、又は別當の罪科もやと思ひて、斯様にぞ申したりける。君聞こし召され、「此の太刀の出所、隠さん爲にこそ申すらん。更に別當の咎にあらず。先祖重代の太刀、箱根の御山に籠めし由、兼てより傳へ聞く。如何にもして取り出さばや、と思ひしを、神物になる間、力及ばざりつるに、只今頼朝が手に渡る事偏へに、正八幡大菩薩の御計ひと覺えたり。斯様の事無くては如何にして、再主になるべき」とて、自ら御頂戴ありて、錦の袋に入れ深く納め給ふ。御重寶の其の一つなり。代々傳はりけるとかや。やとありて君仰せられけるは、「此の事曾我の父母に知らせけるか」。五郎承つて、「日本の大將軍の仰とも存じ候はぬ者かな。當代ならすいづれの世にか、繼子が悪事企てんとて、暇乞ひ候はんには、神妙なり急ぎ僻事して、我まどひ者になせとて、喜ぶ父や候ふべき。又母の慈悲は山野の獸類、江河の鱗族までも、子を思ふ志の深き事は、父には母すぐれたりとこそ申し候へ。況や人界に生を受け、廿歳餘の子供が、命死なんとて母に知らせ候はんには、急ぎ死にて物思はせよとて、

けいしやく
—景迹、官
人の行跡を
いふ令の
語、轉じて
勘考の意

もろこし—
唐が原、相
摸の地名

こざかしく
—小賢しく

喜び出したつる母や候ふべき。御けいしやくとぞ申しける。「扱親しき者共には如何に」。「身貧にして、世にある人々にかくと申し候はんは、只手を捧けて是を縛らせ、首を延べてこれを斬れ、とこそ申し候はんずれ。誰かは頼まれ候ふべき。愚なる御説かな」とぞ申しける。君けにもとや思し召しけん、「父母親類に至る迄も仔細なし。又祐経は、伊豆より鎌倉へ繁く通ひしに、道にては、狙はざりつるか」。「さん候ふ。この四五箇年の間、足柄、箱根、湯本、國府津、酒匂、大磯、小磯、とかみが原、もろこし、相摸川、懷島、やつまとが原、腰越、稻村、由井の濱、深澤邊に徘徊し、野路、山路、宿々、泊々にて狙ひしかども、敵の連るゝ時は四五十騎、連れざる時も二三十騎、我々は、つるゝ時は兄弟二人、連れざる時は只一人、思ひながらも空しく今迄延び候ひぬ。又「祐経は敵なれば限あり、何とて頼朝がそごるなる侍共をば、多く斬りけるぞ」。「それこそ理にて候へ。御所中に参りて、かよる狼藉を仕る程にては、千萬騎にて候ふとも、餘さじと存ずる所に、こざかしく、敵は何處にあるぞ、と尋ね候ふ間、公には忠を盡し、忠には命を捨つる習神妙に存じて、是にありと申す聲に驚きて、足の立處も知らず、逃げのびし間罪つくりと存じて、追うて斬り殺すに及ばず、戦ふ許の側太刀、かたの如く當てたる迄

にて候ふ。面傷はよも候はじ。只今召し出して御覽候へ」と申しければ、馳て御使して聞こし召されけるに、申す如く面傷は無かりけり。面目なうぞ聞えける。又王藤内を何とて討ちけるぞ。「恐れ入つて候へども、年比の傍輩の討たれ候ふを、見捨てよ逃ぐる不覺人や候ふべき。誠に健氣に振舞ひ候ひつる者をや。人富みて故郷に歸らざるは、錦を着て夜行くが如しと言ふ、古き言葉をや知りたりけん、所領安塔の印、本國に下りしが、祐経に暇乞とて道より歸りての討死、不便なり」とぞ申しける。此の言葉により、「神妙なり。是も頼朝が先途に立ちけるよ」とて、「本領子孫に於て仔細なし」と、重ねて御判下されけり。是も兄の十郎が館を出でし時、王藤内が妻子、さこそ歎かざらん、無慚なりしと言ひし、言葉の末にぞ申しける。偏に時致が情によつて、所領安塔す、有難しとぞ感じける、稍ありて、「頼朝をも、敵と思ひけるか」と御尋ありければ、五郎承つて、「さん候ふ。身に思の候ひし時は、木も萱も怖しく、命も惜しく存じ候ひしが、敵討つての後は、如何なる天魔疫神なりとも、と存じ候ふ。まして其の外は、生きたる者とも思ひ候はず。されば千萬人の侍よりも、君一人をこそ思ひ掛け奉りしかども、御果報目度き御事にて渡らせ給へば、御運におされて、斯様に罷りなりて候ふ」と申したりければ、君

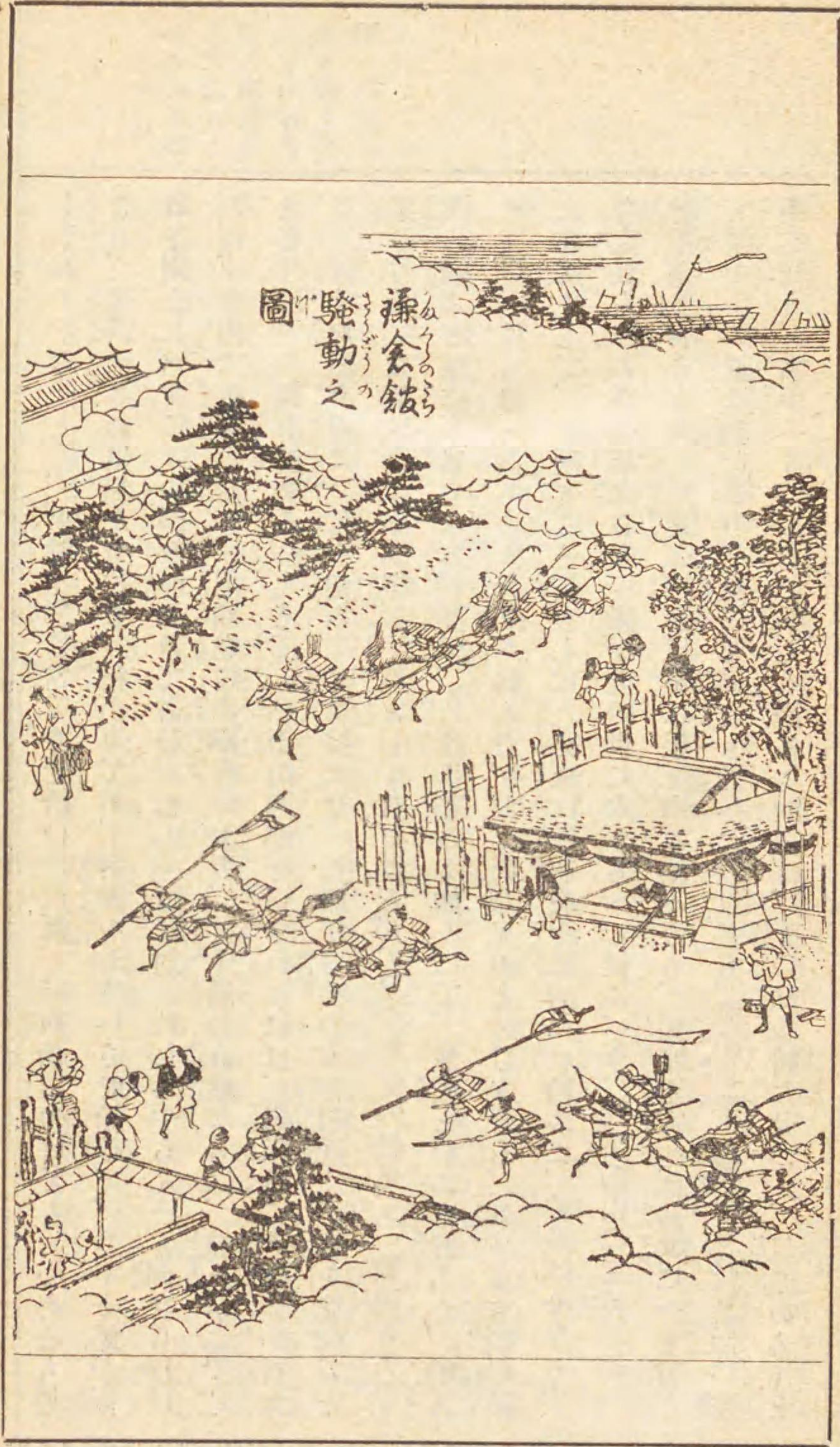
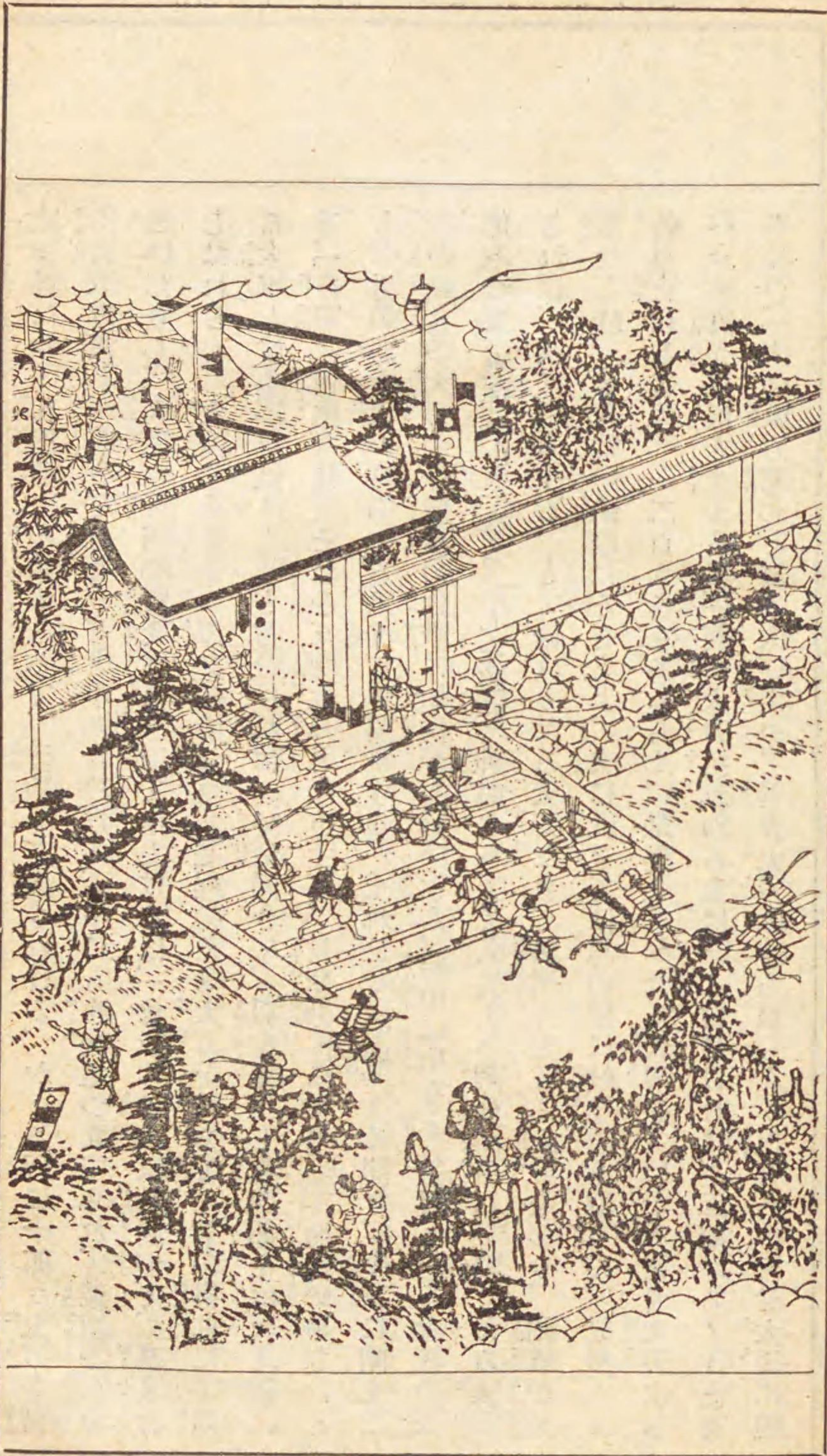
とんこうの魚呑釣の魚か

かまへーこしらへ

聞こし召されて、「敵討つての後、身を軽く思ふは道理なり。頼朝を何とて敵と思ひけるぞ。」「自業自得果とは存じ候へども、伊東入道が謀叛により、我等が本領永く絶えぬ先祖の敵にては渡らせ給はずや。又は閻魔王の前にて日本の大將軍、鎌倉殿を手に掛け奉りぬと申さば、一の罪や赦さるべき、と随分窺ひ申しつれども」と申す。「扱五郎丸には如何にして抱かれけるぞ。」「それは彼の童を女と見なし、何事か候はんと存じて、不慮に捕られて候ふ。斯様なるべしと存する者ならば、只一太刀の勝負にて候はんずる者をとて、後悔益なし。是偏に宿根の盡きぬる故なり。けにや羅網の鳥は、高く飛ばざるを恨み、とんこうの魚は、飢を忍ばざるを歎く、とはようらん言葉なるをや、今こそ思ひ知られたり。君の御佩刀の鐵の程をも見奉り、時致が腐太刀の刃の程をも試し候はん者を」と、言葉を放ちてぞ申しける。君聞こし召され、「猛將勇士も、運の盡きぬる上は」と仰せられ、双眼より御涙を流させ給ひて、「これ聞き候へ人々、日比は思はぬ事なれども、只今頼朝に問はれて、當座のかまへの言葉なり。叶はぬ迄も遁れんとこそ言ふべきに、露ほども命を惜まぬ者かな。世にありなば思ひ止まる事も有ぬべし。餘の侍千萬人よりも、斯様の者をこそ一人なりとも召し使ひたけれ。無慙の者の心やな。惜

いづれをわきて云々其の働振五郎との甲乙あり難しの意

しき武士かな」ととて、御袖を顔に當てさせ給ひければ、御前祇候の侍ども、心あるも無きも、皆涙流さぬは無かりけり。稍ありて君、御涙をおさへさせ給ひて、さて十郎が振舞を聞こし召すに、いづれをわきて言ひがたし。「誠に討たれたるやらん」と仰せられければ、「新田に御尋ね候へ。黒鞘卷に赤銅作の太刀、村千鳥の直垂ならば、誠に候ふ」と申す。さらば實檢あるべしとて、新田の四郎を召されければ、黒鞘卷に赤銅作の折太刀、村千鳥の直垂に、首を包みて童に持たせ、五郎が弓手の方を間近く、首を見せてぞ通りける。五郎は今迄思ふ事なく高言して有りけるが、兄が首を一目見て、膽魂も失ひ、涙に咽ぶ有様は、盛りなる朝顔の、日蔭に萎ると如くにて、無慙といふも餘あり。稍ありて申しけるは、「羨しくも先立ち給ふ者かな。同じ兄弟と言ひながら、幼少より親の敵に志深くして、一所とこそ契りしに、祐成は昨夜夜半に討たれ給ふに、時致は心ならず、今迄長らふる事の無念さよ。誰か此の世にながらへて候ふべき。死出の山にて待ち給へ。臆て追ひ付き奉り、三途の川をば手に手を取り組み渡り、閻魔王宮へは諸共に」と言ひも果てず、涙に咽びけり。袖にて顔をも押へたけれども、高手小手に縛められければ、左手へ傾き、右手へうつぶき、猶しも溢ると涙をば、膝に顔を持たせつと、只さめくと



泣き居たり。和田畠山を始めとして、皆袖をぞ濡されける。かよる所に十郎が太刀を御侍に取り渡し、善きぞ悪しきぞと申し合ひける、中にも昨夜追つ立てられ、柴垣を破り逃げたりし、新開の荒四郎實光進み出でて申しけるは、「曾我の者共は敵討つて、高名はしたれども、太刀こそ悪き太刀を持ちたれ。是程のえせ太刀を持ちて、君の御前にて斯る大軍しける不思議さよ」と言ひければ、時致聞きて、眼を見出し荒四郎をはたと睨んで、「吾殿は何處を見てそれをえせ太刀とは申すぞ。只今御前にて申して無用の事なれども、男の悪き太刀持ちたるは恥なる間申す也。それこそ、や殿よく聞け。平家に聞えし新中納言の太刀よ、屋島の合戦に如何がし給ひけん、船中に取り忘れ給ひしを、曾我の太郎取つて、九郎判官へ参らせしを義経、神妙なり、さりながら、御分高名して取りたる太刀なれば、汝に取らす、とて給はりたる太刀なり。奥州丸と言ふ太刀是なり。祐成が元服せし時、曾我殿の給びたるぞとよ。夫に就きては思の儘に敵を討ち取りぬ。兄弟して斬り止むるもの、一二百人こそあるらん。是程こらへたる太刀を、いかでえせ太刀なるべき。實光なほも止まらで、「既に太刀折れぬる上は」と言ひければ、五郎からくと打ち笑ひ、「人の太刀悪しと言ふ人、定めて善き太刀は持ちぬらん。但しあのえせ太刀に追

心にくからず一ゆかしからず
さんし一君子の誤か

はれて、小柴垣を破りて逃げしは如何に。御分の良き太刀も心にくからず」と言ひければ、聞く人皆汗を流さぬはなかりけり。實光なまじひなる事をいひ出し、赤面してぞ立ちにける。これやさんし一言思慮あるべき事にや、とぞ申しける。

二 犬房が事

爰に祐経が嫡子犬房とて、九つに成りける童あり。御前さらぬ切者にてぞ有りける。傍にて父が事をつくぐ聞き、さめぐと泣き居たりしが、思ひやかねけん走りかより、五郎が顔を扇にて二つ三つ打ちけり。時致打ち笑ひ、「汝は祐経が嫡子犬房な。其の年の程にてよくこそ思ひよりたれ。打てやく、打つべしく、犬房よ。我々も幼少にして、汝が親に父を討たせぬ。年比の思いかばかりぞや。今更思ひ知られたり。誠に古りにし事を思へば、打つ杖はいたますして、弱る親の力を歎きしころざし、五郎が今に知られたり。討たるよをば痛まず、ぬしが心を思ひやるこそ哀なれ。珍しからぬ事なれども、果報程勝負ある物はなし。我々祐経を思ひかけて、此の二十餘年の春秋を送りしに、汝はいみじき生れじやうかな。昨夜討ちたる親の敵を、只今心のまよに討つ事の羨

しさよ。夫につきても前生の宿業こそ拙けれ。現在の果を見て未來を知る事なれば、來世またいかならん。南無阿彌陀佛」とぞ申しける。犬房はなほも打たんと寄りけるを、「いかにや退き候へ」と、繩取の者共いひけれども退かざりけり。御寮御覽せられて、「犬房退き候へ。なほもの問はん」と仰せられければ、其の時退きけり。是や禽鳥百を數ふると雖も一鶴に如かず、數星相連ると雖も一月に如かず。君の御詞一つにてぞ退きける。

三 五郎が斬らるゝ事

さて其の後君仰せられけるは、「汝が申す所一々に聞き開きぬ。されば死罪宥めて召し使ふべけれども、傍輩是を嫉み、自今以後狼藉絶ゆべからず。其の上祐經が親類多ければ、其の意趣のがれがたし。然れば向後の爲に汝を誅すべし、怨を殘すべからず。母が事をぞ思ひおくらん、不便にあたるべし。心安く思ひ候へ」とて御硯召し寄せ、曾我の別所二百餘町を、彼等兄弟が追善の爲に、頼朝一期母一期、と自筆に御判を下され、五郎に戴かせ、母が方へぞ送られける。けにや心の猛く情の深き事人に勝るゝにより、屍

晉の文王は云々—文王は文公の誤齊の桓公は云々—管仲を用ひし事を

構へて—注意して

の上の御恩有難し、と皆人感じける。是や文選の詞に、晉の文王は其の仇を親みて諸侯をさとり、齊の桓公は其の仇を用ひて天下を匡す、とは、今の御代に知られたり。五郎委しく承つて、「首を召されんに於ては遁るゝ所なし。暫時も存へ申さん事深き愁と存すべし。母が事は辱く仰せ下され候へども、故郷を出でし日より一筋に思ひきり候ひぬ。御恩に一時も疾く首を召され候へ。兄が遅しと待ち候ふべし、急ぎ追ひ付き候はん」とすゝみければ力なく、御厩の小平次に仰せつけられ斬らるべかりしを、犬房が「親の敵に候ふ」とて、ひらに申し受けよれば渡されにけり。口惜しかりし次第なり。祐經が弟に伊豆の次郎祐兼といふ者あり、五郎を請取りて出でにけり。時致東西を見渡し、「某が姿を見ん人々は、いかに嗚呼がましく思ふらん。さりながら親の爲に棄つる命、天神地祇も納受し給ふべし。つけたる繩は孝行の善の綱ぞ、各よつて手をかけ結縁し給へ」と申しければ、けにもといはぬ人ぞなき。其の後五郎をばはますかにつれて、松が崎といふ處の岩間にひきすゑ斬らんとす。時致見かへり申しけるは、「構へてよく斬り候へ。人もこそ見るに、悪しく斬り候はど、惡靈となつて七代まで取るべし」といひければ、祐兼聞きて、誠に斬り損じなばいかなる惡靈にも成るべし、と思ひしより、膝振ひ太刀の

紀信一漢の高祖の臣、高祖祭陽に圍まれし時高祖の身代となりて楚軍に降れり

打處も覺えざりける所に、筑紫のなかだと申しけるは、御家人訴訟の事ありて左衛門尉につきけるが、訴訟叶ふべき比祐經討たれければ、是等が所爲とや思ひけん、わざと太刀にては斬らで苦痛をさせん爲に、鈍き刀にて搔首にぞしたりける。さしたる親類知音にあらざる者も、別を惜み名残を悲ますといふ事なし。然るに勇士の至つて猛きは、敵を破り利を碎き、軍の先を駈くる故に、敵の爲に囚ると雖も、藝を感じ身を助け情をかくるは先規なり。傳へ聞く紀信が軍車に乗りしも、武威を感じ、楚王將になさんといひしかども、自ら死を望み、沛公軍を破り、片時も生きん事を悲みて、戦場の石に腦を碎きてうせにき。因て勇士敵の爲に命を暫くも全うせざるは、古今の例なり。然れば五郎も背にや亡せんと思ひしが、夜明けて死す事矢立の杉の一二の枝の謂なり

四 伊豆次郎が流されし事

さても悪事千里を走るならひにて、伊豆次郎未練なりと鎌倉中に披露ありければ、秩父重忠御前にて此の事を聞き、「曾我の五郎をば重忠給はつて、重代のかうひらにて誅し候ふべきを、不覺第一の伊豆次郎に下し給はつて、可愛き次第と承り、口惜しく候ふ」と

御不審一御勘當

申されければ、君聞こし召し、「左様の不覺人にてあるべくは、誰にても仰せ付けらるべき物を」とて、伊豆次郎は御不審を被り、奥州外の濱へ流されしが、幾程なくて悪しき病をうけて、同じ年の九月に廿七歳にして失せにけり。これ偏に五郎が憤の報の所にやと、唇を反さぬ者はなかりけり。時致は五月に斬られければ、祐兼は九月に失せにけり。不思議なりし例、因果歴然とぞ見えける。

五 鬼王團三郎曾我へ歸りし事

爰にこの人々の郎黨に、鬼王團三郎とて二人の者あり。彼等は富士の裾野井出の館より、次第の形見を取り持ち曾我の里へぞ急ぎける。されども惜みし名残なれば、心は後にぞ留りける。けにや幼少よりとり育て奉り、世にも出で給はど、我々ならでは誰かはあるべき、と人も思ひ我も亦頼しかりつるに、かやうに成り行き給ひしかば、慕ひあぐがれしも叶はで、泣くく曾我へぞ歸りける。思の餘に道の邊に暫し休らひ、富士野の方を顧みれば、松明多く走りめぐり、只萬燈會の如し。今こそ事出で來ぬると見えければ、我が君の御命いかど渡らせ給ふらんと、心もとなさ限なし。只二人ましませば、

しやうある
—生ある
覺束なき—
心懸りなる

大勢に取り込められ、いかに隙なくましますらん、今は御身も疲れ給ふらん、と思へば、走り歸りて御最後を見奉らまほしきも、隔りぬれば叶はずして、只泣くより外の事ぞなき。暫くありて松明の数も次第に少く、火の光も薄くなり行けば、君の御命もかくやと火の光も名残惜しく思ひければ、道の邊に倒れ伏し聲も惜まず泣き居たり。馬もしやうある物なれば、人々の別をや惜みけん、富士野の空を顧みて、二三度までぞ嘶えける。さてあるべきにあらざれば、遠近のたづきも知らぬ山中に、覺束なきは富士野なり。泣くく、駒の口を牽き、故郷へとは急けども、行きもやられぬ山路の、末もさだかに見え分かず。爰に人の使とおほしくて文持ちたる者、後より急ぎ來る。團三郎袖をひかへて、「今宵井出館には何事のありければ、松明の数の見え候ひつる」と問ひければ、「さればこそとよ。知り給はずや、曾我の十郎五郎といふ人兄弟して、一族の工藤左衛門の尉殿を、親の敵とて討ち給ひぬ。剩へ御所の内まで斬り入りて、日本の侍達の斬られぬは候はず。手負死人二三百人もこそ候ふらん。されども兄の十郎は夜半に討死し給ひぬ、弟の五郎殿は曉に及び生捕られ給ひき。この人々のふるまひは、天魔鬼神の荒れたるにや、かゝる夥しきことこそ候はざりつれ。かやうの事を大磯の虎御前の妹、木

瀬川の龜鶴御前より、大磯へつけさせ給ふ御使なり」とて、走り通りけり。二人のものども聞きて、仕損じ給ふべしとは思はねども、一期の大事なれば、心もとなく思ひ奉りしに、何事なくて本意を遂げ給ひぬるよ、と歎の中の喜にて、しだいの形見を面々に奉りけり。

六 同じく彼の者共が遁世の事

されば此の者共は、我が家にも歸らず、高野山に尋ね登り、共に髻切りて、墨染の衣の色に心をなし、一筋に此の人々の、後世菩提を弔ひけるぞ有難き。

七 曾我にての追善の事

偕も母は、子供の返したる小袖を取り上げて、おのく顔に押し當てよ、其の儘倒れ伏し、消え入り給ひにけり。女房達漸介錯し、薬など口にそよぎ、養生しければ、僅に目ばかり持ち上げける。せめての事に、文を開きて讀まんとすれども、目もくれ心も心ならねば、文字も更に見え分かず。「恨めしや妾を」と許言ひて、胸に引き當てまた

二の宮の女房一兄弟の姉一切有爲法云々一金剛般若經の語、一切生あるものくはかなきを夢幻以下の

打ち伏しぬ。稍ありて息の下にて口説きけるは、「誠に、凡夫の身程はかなきものはなし。此の小袖を請ひて、永き世迄の形見と思ひて、折節こそあるに、二人連れて來たり、請ひける物を知らずして、返せと言ひけん悔しさよ。五郎も限と思ひてや、此の度強く言ひけるぞや。幾程なきもの故に不孝して、年比添はざりける悲しさよ。なほも心強く赦さざりせば、一目も見ざらまし。ひさしく添はざしりに、珍らしくも頼母しくも覺えしものを、せめて三日とも打ち添はで名残惜しさよ。なつかしかりつる面影を、何時の世にか逢ひ見ん」とて聲も惜まず泣き居たり。いかなる賤の男賤の女に至る迄、涙を流さぬは無かりけり。二の宮の女房をはじめとして、親しき人々は集りて泣き悲む事斜ならず。思ひの餘に、母は十郎が居たりける所に倒れ入り、「爰にも住みしものを」と許にて憂かりし閨の傍に、書きたる筆のすさびを見れば、一切有爲法、如夢幻泡影如露亦如電、應作如是觀、とぞ書きたりける。我が身を有りとも思はぬ口すさび、見るに涙も止まらず。此の押板には古今萬葉を始めとして、源氏伊勢物語に至るまで、數の草紙を積み置きたれども、今より後の慰びには、誰かは是を見るべき、と見るに思ぞ増りける。文をば二の宮の女房ぞ、泣くく讀み連ねける。聞くにつけても、心は心とも覺えず。

ものに喩ふ

「人のならひ神や佛に參りては、命を永く福幸をこそ祈るに、此の者共は只明暮死失せんとのみ申しければ、此の度遁れたりとも、終に添ひ果つまじきぞや。夫につけても箱王を、年比不孝して添はざりし事の悔しさよ。それは草の蔭にても聞け、誠には不孝せず。たとへば法師になさんとせし事の叶はぬに、不孝と言ひしを次手なくして、何となく月日を重ねし許なり。小袖直垂をきせし事も、日比に變らざりしを、二の宮の女房の着する様にて取らせしを、誠と思ひて妾をばつらき者にや思ひけん。よしなかく、今に今は歎きの便なり、打ち添ひ馴るゝ身なりせば、愈名残も惜しかるべし。かくて我が身は何にかは存らへ果てん憂き命、有るもあらぬ例かな」と、悶え焦れける。曾我の太郎も幼き時より取り育て、わりなき事なれば、實子にも劣らず、心様又さかしかりしかば、はいきやうちくいての思をなし、朝夕疎かならざりしかども、所領廣からざれば、一所を分くる事もなし。其上御勘當の人々の末なれば、清けならんも恐ありなどと、思ひし事も夢ぞかし。今更後悔益なしとぞ歎きける。母は日の暮れ夜の明くるに従ひて、愈思ぞ増りける。「惜しからざりし憂身なれども、彼等が行方若やと思ふ故にこそ、辛き命も惜しかりつれ、今は淨土にて生れあひ、今一度見ん」とて、湯水を絶ちて伏沈みければ、

さかし一怜
惻なり

露の命も危くぞ見えし。親しき人々集りて、憂世の習、「御身獨の歎にあらず。さしも繁昌し給ひし平家の公達も、一度に十人二十人、目の前にて海中に沈み、弓箭にたづさはり給ひし時の別どもよ、日數積り年月隔たりぬれば、さてのみこそ過ぎ候ひしか。今の世にも或は父母に後れ、或は夫妻に別れ、又は親子兄弟に離れ、歎く者のみこそ多く候へども、忽ち命を捨つる者なし。誠に御子の爲に御身を捨て給はん事、逆なる罪の深さ、いか許と思し召す。泣く涙も猛火となりて、子に懸るところ聞きつれ。まして子の爲に、命を失ひ給はん事、罪業の程を知らず。いかにも身を全くして、後世菩提をひ給へ」と、様々に申しければ、僅湯水ばかりぞ聞き入れける。さてあるべきならねば、僧達を請じ奉りて、正等正覺頓生菩提とぞ取り納めける。母の弔はるべき身の、逆なる事に歎き悲みける。けにや世の中の定めなき、涙の種とぞなりにける。箱根の別當も此の事を聞き、急ぎ會我に下り、諸共に歎き給ふ。「箱王が去りし時の面影、愚老が涙の袖に止り、師弟親子の別變るべきに非ず」とて、さめふくと泣き給ふ。其の後は持佛堂に参り、彼の菩提を弔ひ給ひけり。七日々々四十九日迄怠らず追善あり。誠に彌陀の誓願は、十惡五逆の大罪をも、一念十念の力を以つて、來迎引接し給ふべき、他力の本

十惡一殺生

偷盜貪欲愚
痴邪淫妄語
綺語惡口兩
舌瞋恚

五逆一第一
父を殺し第
二母を殺し
第三阿羅漢
を殺し第四
佛身より血
を出し第五
和合僧を破
ること

願頼母しかりけり。此の人々は父の爲に、身を捨てける志なれば、罪にして然も罪にあらず、其の上在世の時も、仁義を亂さざりしかば、後の世までも惡道へは、墮在せられじ、と頼母しくぞ覺えける。

八 禪師法師が自害の事

偕も此の人々の弟に、御房とて十八になる法師一人あり。故河津の三郎が、忌の中に生れたる子なり。母思の餘に棄てんとせしを、伯父伊東の九郎養ひて、越後の國九上と云ふ山寺に登せ、伊東の禪師とぞ言ひける。九郎平家へ参りて後親しきにより、源義信が子と號して、折節武藏の國にありけるを、頼朝聞し召し、義信に仰せつけて召されければ力無く、家の子郎黨數十人下し事、不便なりし次第なり。大方同じ兄弟とは申しながら、乳の中より他人に養はれ、然も出家の身なり、是も唯普通の儀なりせば、彼等まで御尋あるまじきを、兄共の世に超え、名を萬天にあけし故ぞかし。義信の使は、本坊に來りて斯様の次第を言ふ。禪師法師聞きて、「心憂や、弓矢取の子が、我が家を捨てて他の親につく事は、ゆめくあるまじき事なり。斯様の罪過は、其の源を正されける

をや。同じ死する命、兄弟三人一つ枕に討死せば、如何が人目も嬉しからまし。今更後悔すれども叶はず。佛前に参りて、御經開き讀まんとすれども、文字も見えざりければ、巻き納め、珠數さらくと押し揉み、「南無平等大恵、一乘妙典願はくは、法華讀誦の功に依り、刹那の妄執を消滅し、安樂世界に迎へ取り給へ」と祈請して、劔を抜き弓手の脇につきたて、右手へ引き廻さんとする所を、同宿早く見付けて、「是は如何に」と取り付き押へければ、「退き候へ。人手に懸らんより、清き自害をして見せ申さん。一つは同朋達の思し召さるゝ所もあり。空しく鎌倉へ捕られん事、寺中坊中の名折なり。放し給へ」と怒りけれども、大勢なれば力及ばず、其の上愈弱り果てにけり。誠に心ならず、人數多にて働かさず、自害半にぞしたりける。無念と言ふも餘あり。御使は庭上に充満して責めければ、力及ばず、上意黙止し難くして渡されにけり。口惜しかりし次第なり。御使請け取り輿に乗せて、鎌倉へこそ上りけれ。君聞こし召されて、御前に召されければ、昇れて参りけり。君御覽せられて、「和僧は河津が子か」と御尋ありければ、禪師坊前後も知らざりけるが、君の仰を聞きて、兩の手を押し動し、起き上らんと志しけれども叶はで、頭を持ち上げ、「さん候ふ、伊東が爲には孫候ふ」と申す。「諸兄共が敵討

意趣—遺恨

ちけるをば知らせざりけるか。「恐ながら將軍の仰とも存じ候はず。一腹一生の兄共が、親の敵討ち候ふとて知らせ候はんには、假令出家にて候ふとも、同意せぬ畜生や候ふべき。御推量も候へ」とぞ申し上げたりける。君聞こし召し、「汝が眼ざしを見るに、頼朝に意趣ありと見えたり。事を尋ねん爲に召しつるに、粗忽の自害所存の外なり。」「粗忽とはいかでか承り候ふ。既に御使給はつて、召し捕れとの御詔を承つて、其の用意仕らぬ事や候ふべき。哀兄共が知らせてだに候はど、二人の者共をば祐經に押し向けて、愚僧は一人にて候ふ共、君を一太刀伺ひ奉りて、後世の訴に仕るべきものを」とて、御前を睨み、言葉を放ちてぞ申しける。君聞こし召して、「頼朝には何の意趣かありけるぞ。」「我等が先祖の敵、又は兄共が敵にて候はずや。是につきても果報の勝劣程、憂き物は候はず。唯御威勢に押されて、斯様に罷り成つて候ふ。恐ながら身が身にて候はど、源平兩氏の戦に、何れ甲乙候ふべき」と申しければ、君は暫く物をも仰せられず、稍ありて猶も心を見んと思し召しけん、「其の手にても生きてんや。さも思はど助くべし」と仰せ下されければ、禪師承つて、からくと打ち笑ひ、「よくよく人とも思し召され候はずや。御助けある程ならば、争て是迄召さるべき。若さもとや申さんを、聞こし召されん

正なや一け
しからず

爲か。正なや人によりてこそ、左様の御言葉は候ふべけれ。口惜しき仰かな」とぞ申しける。御寮聞こし召し、此の法師も兄共には劣らざりけり。助け置きなば、又大事を起すべき者なり。よくぞ召し寄せたりける、と思し召しける。禪師重ねて申しけるは、「とても助かるまじき身、刹那のながらへも苦しく候へ」と、頻に申しければ、生年十八歳にして、終に斬られにけり。無慚なりし次第なり。君此の者の氣色を御覽じて、「剛なる者の孫は剛なり。哀彼等に世の常の恩を與へて召し仕はど、思ひ止まる事もありなまし。弓矢取る者は、誰劣るべきにはあらねども、斯程の勇士天下にあらじ」と、仰せもあへず御涙を流させ給ひしかば、御前伺候の侍共も、袖を濡さぬは無かりけり。

九 京の小次郎が死する事

爰に此の人々に語らはれ、同意せざりし一腹の兄京の小次郎も、同じき八月に、鎌倉殿の御一門、相摸守の侍に、由良の三郎が謀叛起して出でけるを、止めんとて、由井の濱にて大事の傷を蒙り、曾我に歸り、五日を経ずして死にけり。同じくは五月に、兄弟どもと一所に死にたらば、如何がよかるべき、とぞ申し合ひける。

十 三浦の與一が出家の事

三浦の與一も與せざりしが、幾程なくして御勘當を蒙り、出家してけり。人は只義と信との道をば、正しくすべき事をや。

曾我物語 卷第十一

一 虎曾我へ來りし事

抑建久四年九月上旬の比なるに、世の憂きを思ふに、つながぬ月日も移り來て、昨日今日とは思へども、うき夏も過ぎ、秋も漸たちぬれば、彼岸をかけ、しやう林の霜にとふ、貞女何處にかある。くわんしよ衣を打ちて、れうしん未だかへらざる所に、せんき尼一人、濃き墨染の衣に、同じ色の袈裟をかけて、蘆毛なる馬に貝鞍おきて乗りし人出できたる。何者ぞと見れば、十郎が常に通ひし大磯の虎なり。彼等が母のもとに行き、近き所に立ち入り使をして言ひけるは、「此の人々の百箇日の孝養、大磯にてもかたの如く營むべけれども、箱根の御山にてあるべしと承り候へば、此の御佛事をも聽聞申し、我が身の營をもその序にして、一つの諷誦をも捧げばやと思ひ、参りて候ふ」と言ひければ、母聞きて、「嬉しくも思ひよりおはします物かな。十郎ありし方へ入らせ給へ。やがて見参に入るべし」と、荒れたるすみかの扉あけて呼び入れにけり。虎は十郎が住所へ

ありし方
居室

月やあらぬ
—伊勢物語
業平、月や
あらぬ春や
昔の春なら
ぬわが身一
つは元の身
にして

立入り見れば、何時しか庭の通路に草繁り、跡ふみつくる人もなし。塵のみ積る床の上。打ち拂ひたる氣色も見えず。今はの別の曉まで、見なれし所なれば、變る事はなけれども、其の主はなかりけり。思ひしより過ぎこし方のゆかしく、我が身は元の身なれども、心は有りし心ならず、月や有らぬ春や昔のかこち草、深き名残の盡きせねば、泣くより外の事ぞ無き。まろび入りたる其の儘にて、暫し起きも上らざりけり。枕も袖も浮く許、立ちそふ物は面影の、それと計の情にて、涙も更に止らず。やと暫く有りて、母出で會ひけり。虎を一目見しより、何とも物をば言はで、袖をば顔に押し當て、さめざめと泣きけり。虎も母を見て、有りし容顔の残り止る心地して、打ち傾き聲も惜まず泣き居たり。夫の歎子の別、さこそは悲しかりけめと、推し量られて哀なり。母涙をおさへ言ひけるは、「斯く有るべしと思ひなば、十郎が有りし時、恥しながら見奉るべかりし物を、身の貧なるにより、親むべきにも疎く、語らふべきにもさもあらで、萬思ふ様にも候はで、打ち過ぎし事の悔しさよ。十郎淺からず思ひ奉りし事なれば、唯十郎に向ふ心地して、なつかしく思ふ」と泣くく語りければ、虎も亦「身の數ならぬにより、御見參申さず」とて、是も涙を流しけり。「形見とて残し置かれし馬鞍、見る度毎に目もく

つれなき—
情無き

かりそめに
—ちよと輕
々に

れ、佛の御名を唱ふる障となり候へば、亡き人の御爲も然るべからず。此の度の御佛事の御布施に思ひ定めて候ふ」と言ひもはてず、打ち傾きけり。「仰の如く、形見は由無き物にて、此等が狩場より、返したる小袖を見る度毎に、心亂れ候ふぞや。是も此の度の御布施に思ひ向けて候ふ。御身は十郎が事許こそ歎き給へ。わらは程罪深き者は候はじ。河津殿におくれたりし時、一日片時の命も存命へ難かりしに、つれなき身の存命へ、百日の内に數多の子に後れたり。如何許とか思し召す。殊に彼等二人は身を離さで、雙の膝に据ゑ育て、父の形見と思へば、憂き時も彼等にこそは慰みしか、今より後は誰を見何に心の慰むべき。箱王は法師に成らざりしを、かりそめに不孝と言ひし其の儘、許せと言ふ人もなし。身の貧なるにより何となく打ち過ぎ、月日を送り、年來添はざりし事、今更悔しく候ふぞとよ。打ち出でし時、兄が連れて來り、限と思ひてや、許せと申せしに、さらばと言ひし言の葉を、嬉し氣なりし容顔の、現れたりし無慚さよ。親ならず子ならずは、老いたる妾が言葉の末、誰かは重く思ふべき、と頼もしく思ひて、つくく凝視りしに、盃とり舉げかたぶく程涙浮びて候ひしを、不孝を許す嬉しさの、涙と思ひて候へば、斯様に成るべきとて、限の涙にて候ひけるを、凡夫の悲しさは、夢にも知

あらまし一
末の事を豫
め言ふこと

上東門院一
藤原彰子、
一條院の皇
后

らで、なつかしかりける容顔、何しに年月不孝しけん、過ぎにし方まで悔しきに、せめて三日打ち添はで、歸れと許のあらましを、如何に哀に思ひけん。いつの世にかあひ見て憂きを語りてまし」とて、又打ち伏して泣きけり。虎も涙に咽びつと、暫し物をも言はざりけり。互の心の内、さこそと思ひやられたり。「是なる御経は、彼等が最期に、富士野よりも送りたる文の裏に、書き奉りて候ふ。此の文を讀まんとすれば、文字も見えず、近く寄りて讀み給へ。聞き候はん」とて差し出す。十郎が文と聞けばなつかしくて、讀まんとすれば目もくれ、何れをそれとも見え分かず、胸にあてと泣く許にてぞ有りける。流を立つる習、斯程の志あるべしとは思はざりしを、優しくも見ゆるなりけり、と思ふに涙ぞ増りける。「今宵は是に留まりて、心靜に物語申すべきが、箱根への用意させ候ひて、暁出で候ふべし。聞き給ひぬるや、是等が孝養せよとて、君よりは所領給はり候ふ。世には敵討つ者こそ、多く候ふなれども、心様人に勝るよにより、斯様の御恩に預り候ふ。如何に言ふ甲斐なくとも、彼等が安穩ならんこそ嬉しくも」とて、「是や昔上東門院の御時、和泉式部が娘、小式部の内侍に後れて、悲みけるに、君哀と思し召して、母が心を慰めんと思し召し、御衣を下されしかば、和泉式部、

諸共に云々
—金葉集に
見えて二の
句苔の下に
は、五句見
るぞ悲しき
とあり

もろともに苔の下にも朽ちずして埋もれぬ名を聞くぞ悲しき
斯様に詠みたりし事迄、思ひ知られて忝くおほえ候ふぞや。それにつき候ひては、此の度の佛事心の及ぶ程營むべきにて候ふ。此の邊にはさりぬべき導師も候はねば、別當を導師に定め参りて候ふ。五郎が事忘れず御歎き候へは、一入懇なるべし。暁は伴ひ奉るべし」とて歸りにけり。虎は母が後姿を見送り、十郎が装思ひ出でられて、是も名残は惜しかりけり。さらぬだに、秋の夕は寂しきに、獨伏屋の軒の月、涙に曇る折からや、折知顔の鹿の聲、枕に弱る蟋蟀、軒端の萩を吹く風に、古郷思ひ知られつと、時しも長き夜もすがら、明しかねたる思寐の、逢ふ夢だにもなければや、片敷く閨の枕に置き添ふ露の重なれば、うつとの床も浮く許、明方の雁の、侶を語り啼く聲も、羨しくぞ思ひやる。他處の砧を聞くからに、身に沁む風のいとどしく、鐘聞く空に明けにけり。

二 母虎を具して箱根へ上りし事

荒れぬる宿とは思へども、枕並べし睦語の、出でぬる後の別路は、今も打ち添ふ心地して、起きもせず寐もせて物を思ひ居たる所に、馬に鞍置きひつ立つる。使は來たり木幡

震旦—支那
曠劫—未來

山、君を思へば心から、うはの空にや籠るらん。母も立ち出でて、急ぐといへば打ち出でぬ。おのづからなる道の邊、我が方遠くなり行けば、其處とも知らぬ毬子川、蹴上けて波や渡るらん。湯坂の峠を上るにも、別れし人も此の道を、かくこそ通ひ馴れしと思ひやらるゝ梓弓、矢立の杉を見あけつゝ、其の人々の射ける矢も、此の木の枝にあるらんと、梢の風もなつかしく、山路遙々行く程に、箱根の坊に着きにけり。やがて別當出で逢ひ給ひて、「さても御歎の日數の、あはれにて候ふ」と仰せられければ、此の人々も佛事の本意を申されけり。別當虎を見給ひて、「あれは何處よりの客人にや」と問ひければ、母ありのまよにぞ語りける。別當有難き志とて、墨染の袖をぬらし給ふ。やゝありて別當、涙をとどめて仰せられけるは、「法師が思とて、かたんに劣り奉らず。さかりなる子を先に立つる親、若うして夫に後るゝ妻、世のつね多しと申せども、師に先立つ弟子は稀なり。それも先規なきに非ず。遠く震旦を思へば、顔回はくわんしゆの弟子にて、才智並ぶ人なかりしかども、廿五歳にて師に先立ち給ふ。我が朝の慈覺は、大師の御弟子なりしが、師の天台大師に先立ち奉る、西方院の座主印賢僧正は良賢大徳に後れ給ふ。かやうの事を思ひ出せば、愚僧一人が歎に非ず。けに、曠劫を経て、相見ん事ある

曠劫と熟し
無窮の長年
月
きう—歸依
か
第一の戒—
殺生は五戒
中の第一に
あり

まじき別の道、歎き給ふも理なり。歎くべし」とて、御涙をばらくと流し給ふ。「思へば誰も劣るべきにはあらねども、大磯の客人の御志こそ誠に有難こそ候へ。あひかまへて、深く歎き給ふべからず。是を實の善知識として、他念なく菩提心を起し給へ、一念の隨喜だにも莫大にて候ふぞかし。かやうに思ひきり、誠の道に入り給ひ候はゞ、餘念なくて行じ給ひ候へよ。佛も六年仙人にきうし行じてこそ、法華をば授かり給ひし、かまへて惡念を捨て給ふべし。人々を討ちける人を、怨めしと思ひ給はゞ、嗔恚の妄執となりて、輪廻の劫盡くべからず。あながち手を下して殺し、行きて盜まされども、思へば其の科を犯すにて候ふぞ。かまへて、殺生を心に除き給ふべし。されば第一の戒にて候ふぞ。女は殊に執情深きによつて、三途の業盡きず侍ふぞや。あひかまへて」と、細やかに教へられけり。

三 鬼の子捕らるゝ事

昔天竺に、鬼子母といふ鬼あり、大阿修羅王が妻なり。五百人の子を持ち、是を養はんとして、物の命を斷つ事、恒河沙の如し。殊に親の愛する子を好みて、捕り食ふ罪つくし

乙子一季子

難し。佛是を悲み思し召し、如何して此の殺生を止めんとて、智慧第一の迦葉尊者に告げ給ふ。迦葉佛に申し給ひけるは、「彼が五百人持ちて候ふ子の中に、殊に寵愛の子を御隠し候ひて、御覽ぜられ候へ」と御申ありければ、「然るべし」とて、五百人の乙子をと、御鉢の下に隠し給ふ。父母の鬼是を尋ねけり。神通自在の者なりければ、上は非想非々想天六欲天の雲の上、下は九泉八海龍宮奈落の底までも、くもりなく尋ねけれども無かりけり。鬼共力を失ひ、大地に伏し轉び、泣き悲みけるぞ愚なる。思の餘に佛に参り申しけるは、「我五百人の子を持ちて候ふ。其の中にも乙子こそ殊に不便に候ひしを、物に捕られて失ひ候ひぬ。餘に悲しく候ひて、到らぬ所もなく尋ねて候へども、我等が神通にては尋ね出すべしとも覺えず候ふ。然るべくは御慈悲を以つて教へさせ給ひ候へ」とて、黄なる涙を流しけり。其の時佛曰く、「諸子を失ひて尋ぬるは悲しきものか」「申すにや及び候はず。是だにも出で來候はど、我等夫婦はいかになり候ふとも苦しからず。餘に可愛く候ふ」と申しければ、「左様に子は悲しく無慚なる者ごとよ。汝五百人の子を養はんが爲に、物の命を殺す事、いか許とか思ふ。其の殺さるよものよ中に、親もあり子もあり、兄弟親類いか程の歎とか思ふ。思ひ知れりや、汝今只一人失ひてだにも、かや

さば一生飯
又は散飯と
書く食に當
りて鬼神に
供する爲に
傍にすこし
取りわけ置
くもの

うに悲むにや。まして多くの人いかど」と示し給ひければ、鬼共頭をうなだれて。圍繞して伺候しけり。「いかに汝等、なほしものよ命をや斷つべき。止るならば、有所しらせん」と仰せられければ、鬼大きに悦び、「今より後は更に殺生仕るまじ。失ひし子の在所教へ給へ」とたいはう申しけり。「さらば堅く殺生を止めよ」と約束ありければ、鬼かさねて申すやう、「我等肉食を絶えては、身命助かり難し。御慈悲の方便にあづからん」と申す。佛御思案ありて、「さらば一切衆生の用るる飯の上を、少しさばを取り汝に與ふべし。それにて命をつぎ候へ」と佛勅ありければ、鬼承り、「我等は悪業煩惱にて身をまろめたり。假令佛勅の如く、頂戴申すといふとも、肉食を止めては命あらじ」と申しければ、「さらば一口の飯に、人の肉をすり塗りて與ふべし」と、御約束ありけり。さればにや、今に至りて、さばとて飯の上を少し取り、掌にあてて置く事は、此の謂にてぞありける。かやうに堅く誓約ありて、御鉢の下より子鬼を取り出し給ひけり。其の時鬼申しけるは、「我等神通を超えたりと思へども、佛の方便には及び難し。まして後世こそ恐しけれ」とて、即ち御弟子となり佛果を得るとかや。剩へ法華守護神となり、法華經を擁護せんと誓ひ給ふ。抑此の鬼子母は形世に越えければ、帝釋これを奪ひ取り給ひぬ。阿修

羅王大きに怒り、嗔恚の猛火をはなち、既に須彌の半分まで攻め上り、鬪ふ事恒河沙を
 経るとも盡くることなし。其の時帝釋、せんばうだうに楯籠り、仁王經を講じ給ひつよ、
 四しゆ五わうの印を結び給ふ。時に虚空より磐石雨の如くに降り下り、修羅の大敵を粉
 灰に打ち砕く。されども業因盡きざれば、復蘇生り、大苦を受けたり、と傳へたり。然れ
 ども、鬼子母は佛弟子となりしかば、苦惱を離るゝのみならず、法華の功德あり。かや
 うに鬼神だにも隨喜すれば、此の如くの佛果の縁ありとかや。

四 箱根にて佛事の事

かくて別當は、彼の者共の佛事とり行はんとし給ふ其の際に、虎にいよく教化し給ふ
 は、偶人身を受け、此の度淨土を希はずは、また三途にかへるべし。祐成を善知識と
 思ひ、淨土を希はんは何の疑か候ふべき。既にかやうの法身となり給へば、他のた
 め、未來永々有難き御事なり。法師とて御導師に成るべきにあらず。只心をもつて師と
 する時は、いかでか往生の素懐空しからん。また五郎は寵愛なじみにて、御思どもに劣
 らねば、一入弔ひ奉るべし。誰かある、僧達を請じ申せ」とて、「持佛堂の莊嚴せよ。客

一乘妙典一
法華經

殿の塵とれ」と、様々下知し給ひけり。虎は別當の教化を聴く身ながらも、嬉しくぞ思ひ
 ける。其の後數の僧達集り給ふ。御經多しといへども、殊に勝れたる一乘妙典八卷を、
 同音に讀誦し給ふ。五十展轉の功力だにも有難し、誦持讀誦の結縁たのもしかりけり。
 御經やうく過ぎしかば、別當高座に上り、彼等が追善の鉦打ち鳴し、施主の志を量り
 給へば、先御涙に咽びつよ、説法の御聲も出し給はず。やとあつて別當涙をおさへ、花
 房を捧げ、「それ生死の道は異にして、音信を何の處にか通せん。分段境を隔つ。拜勤
 をいつの時にか期せん。二十餘年の夢、曉の月と空に隠れぬ。千萬端の愁、夕の嵐ひと
 り吟じて、雲となり雨となる、哀憐の涙乾く事なし。朝を迎へ夕を送りて、懷舊の腸
 絶えなんとす。所作未だやまざるに、百日の忌景既に満てり。悲の至りてなほ悲しき
 は、老いて子に後れ、恨のことに恨めしきは、盛にして夫に後るゝ程の愁なし。老少不
 定を知ると雖も、なほ前後の相違に迷ふ事、歎けどもかなはず、惜めどもしるしなし。
 されば佛も愛別離苦と説き給ふ。一生は夢の如し、誰か百年の齡を保たん。萬事は皆空
 し、いづれか常住の思をなさん。命は水の上の泡の如し、魂は籠の中の鳥、開くを待ち
 て去るに同じ。消ゆるものは再度見えず、去るものは重ねて來らず。恨めしきかなや、

北邙—洛陽の北方の山名、漢以來の墳墓の在る處

孟蘭盆—梵語、解倒懸と譯し死者の地獄にて受くる非常の苦を脱せしむる爲の法會

釋迦大師のおんごんの教化を忘れ、悲しきかなや、閻魔法王の呵責の辭を聴けば、名利は身を助くと雖も、未だ北邙の屍を養はず。恩愛の心を惱せども、誰か黄泉の責を免れん。是に因つて馳走す、所得幾何の利ぞや。是が爲に追求す、所作たざいなり。暫く目を塞ぎて往時を思ふに、舊友皆空し。指を折りてこやしんを數ふれば、親疎多く隠れぬ。時移り事去りて、今何ぞ渺茫たらんや、人止りて我逝き、誰か又残りやせん。三界無安猶如火宅と見れば、王宮も是夢なり、天子といふもしよの身なり。況や下劣貧賤の輩、などか其の罪輕かるべき。しに苦をまし、業に随つて悲を添ふべし。思ひ悟らぬぞ愚なる。正に今ごんかく塵深くして、竹簡幾何の千卷ぞ。苦瀧雲靜にして、松風只一聲、苑中花月相傳ふるに主を失ふ、七月半の孟蘭盆の尊靈誰にかあらんと、泣くく當座にぞ書きける。實に理極りけり。「されば親の子を思ふ志の深き事は、父の恩を須彌に譬へ、母の恩を大海に同じといへり。我一劫の間説くとも、父母の恩盡くる事なし、と見えたり。胎内に宿り、身を苦しめ心を盡し、月を重ね日を送り、生ると時は、桑の弓蓬の矢をもつて、天地四方を射、身體髪膚を父母にうけ、敢て毀ひ破らざるを孝の始とす。襁褓の囊に包まれしより今に至るまで、晝夜に安きことなし。人の親のなら

ひ、我が身の衰へるをば知らずして、子の成人を願ひしぞかし。此の恩を捨て、未だ盛にも満ちずして、母に先立ちぬ。されば孝經に曰く、君は尊くして親しからず。母は親しくして尊からず。尊親共に是を兼ねたるは、父ひとりなりと雖も、四の恩の中には二親なれば、母の歎も切なれども、あたるところの恥、父の方に身を捨て、各命を失ふ。人の親の子を思ふ闇に迷ふ道、愚なる子もいとほしく、片端なるも悲しきに、此の人々は弓馬の家に生れ、武略ともに賢し、後代に留む事、遠きも近きも知らぬ人なし。同じ兄弟といへども、仲の悪しきもあるぞかし。此の殿原は幼少竹馬の昔より、馴れむつづる事類なし。淨藏淨眼の古にも恥ぢず、早離速離の昔にも似たり。遂に富士の裾野にして、同じ草葉の露と消え給へり。彼の一條の攝政、謙徳公の二人の御子、前の少將後の少將とておはしける、朝夕に亡せ給へり。かよる例もあれば、生死無常の理、はじめて驚くべきにあらず。今開眼供養の御經、人々の手跡のうらなり。かやうに書きおきしを、餘所にて見るだにも悲しきに、まして御身にあて、御心中さぞ思し召すらめ。それは親子の別の事、兄弟の契のわりなきを一言述べて候ふ。又夫に別ると歎、今一入色深き事なり、虚弓止まりて閨に寄せ立つ、上弦の月空に暮れぬ。三年のなじみ忽ちつき、こ

虞氏—楚の
項羽の妾

六親—父子
兄弟夫婦

しん床に上りて、虞氏がいにしへにあらねども、數行の涙袂を濕すらん。しやうらんの
句、空薫とぞなりにける。宵曉の鐘の聲、枕を並べし程には似ず、起居に見れば、
なれ來し人はよもそはじ。山の端出づる月影を、心苦しく待ち得ても、見し面影には異
らず。是ぞ慰み給ふ事あらじ。實夫婦の別忍び難けれども、昔も今も力に及ばざる道な
れば、思ひ慰み給ふべし。彼の唐の玄宗の楊貴妃も、僅に詞を蓬萊宮の浪に傳ふらん。
穆公の弄玉を重んぜしも、徒に鳳凰臺の月によす。彼を思ひ是を思ふにつけても、昔
を今に準へて、一佛淨土の縁を結び、願はくは九品往生の望を遂げて、七世の父母、六
親眷屬成佛」と、廻向の鉦打ち鳴し、別當高座を下り給ふとて、

さだめなき憂世といとど思ひしにとはるべき身のとふにつけても
と詠じ給ひければ、聽聞の貴賤哀を催し、袖をしほらぬは無かりけり。供養もやうく
過ぎしかば、僧達も皆歸り給ひ、やと暫くありて、「急ぎ下りたく候へども、偶のほり
て候へば、五郎が幼くて住み給ひし方を、見候はん」と申されければ、別當宣ひけるは
「男になりて後、其の形見と思へば人をも置かず。わざと破をも修理せず、昔に少しも
違はず候ふ。いざさせ給へ。墓所をも築きて候へば、御覽ぜよ」とて連れて行き、立ち寄

出でいな
ば—伊勢物
語の歌五の
句人は知ら
ればとあり
咸陽宮—秦
の始皇の築
きし宮殿楚
兵の焚く所
となる

り見給へば、墓の上に草生ひけるを、別當見給ひて、「君見すや北邙の夕の雨、疊々たる
青塚の色を。また見すや、東邨の秋の風、歴々たる白楊の聲を」といへる、古き詩を思ひ
出で給ふ。是は元の住處と宣へば、軒の葱は紅葉して、おもひの色を顯せり。歎はいづ
れも盡させねば、繁る甲斐なき忘草、其の名許はよしぞなき。九月上旬の事なれば、
四方の紅葉の色は、袖の涙を染むるかと思え、よにふる里は苦しきに、易くも過ぐる初
時雨、羨しくぞ覺えける。壁に書きたる筆のすさみを見れば、

出でていなば心輕しといひやせん身のありさまを人の知らねば

といふ古き歌のはしを、箱王丸とぞ書きたりける。師匠に暇をも乞はず、人に行方をも
知らせず、只一人いづること、思ひよりて語り、幼かりし面影、只今の心地して、よし
なき所へ來りけると絶えこがれければ、胸を焦す焔は咸陽宮の夕の烟に異らず。袂に落
つる涙の、龍門原上の草葉を染むる、おもてに落つるちりのうみ、かこちよれいとも
言ひつべし。さてしも有るべきにあらざれば、泣くく母は曾我に下りしが、虎は大磯
に歸らんとす。別當も五郎に別れし心地して、「御名殘惜しうこそ候へ。さても此の度の
御佛事有難く候ふ。過去幽靈定めて正覺なり給ふべし。また大磯の客人の御志こそ、世

に勝れては候へ。かまへてくゝ怠らず弔ひ給へ」と仰せられければ、虎も涙を抑へて、「佛事と承りし事、穢身發願の儀なりければ、飽かぬ別の道、いつかは怠り候はん」と申しければ、別當重ねて申されけるは、「數多の寶を積まむよりは、誠の心にはしかず」とこそは宣ひける。

五 貧女が一燈の事

「さる程に、虎が志の深きをもつて、昔を思ふに、天竺に阿闍世王といふ大王あり。常に佛を請じ、數の寶を捧げ給ふ。或時佛の御歸り夜に入りければ、王宮より祇園精舎まで、十萬石の油をもつて、萬燈を灯し給ひけり。此に貧なる女あり。いかにもして此の燈明の數に入らばやと思ひけれども、朝夕の營だにも堪へ難き貧女なれば、一燈の力もなし、涙を流し、いかにと方便すれども叶はで、東西に馳走し、自ら髪を切り、錢二文にぞ賣りたりける。是にてもやと思ひければ、油を彼の錢にて買ひ、やうく一燈灯してくどきけるは、我前業いかなりければ、百千燈をだに灯す人のあるに、一燈をだに灯しかねたる、憂き身の程の恨めしさよ、とて、彼の燈明の下に泣き伏しけり。此の志

を顯はさん爲にや、折節山風荒く吹きて、數の燈明を一度に吹き消しけり。されば貧女が一燈許は消えずありけり。目蓮不思議に思し召し、袈裟にて煽がせ給ひけれども、消えざりけり。其の時目蓮佛に問ひ給ふ。多くの燈明の消ゆる中に、いかなれば一燈消えざる、と申させ給へば、佛宣はく、阿闍世王の萬燈の光、疎にはあらねども、貧女が志の深き事を顯さんが爲に、萬燈は消えて、一燈は残る、と示し給ふ。さればにや此の貧女成佛して、須彌燈光如來と申すは、此の貧女の事なり。長者の萬燈より、貧女の一燈と申し傳へたるは此の事なり。御志を勵し候へ。かへすくゝ」と仰せられければ、虎も母も諸共に、深く追善の心あり。諸佛憐み給ふらんと嬉しくて、各暇申して歸りにけり。母虎に申しけるは、「今より後は常に來り妾を見給へ。自らもまた十郎が名残に見奉りなん。暫く會我にましくて、慰み給へ」などと語りて行きけるが、虎申しけるは、「嬉しくは承り候へども、此の人々の御爲に、毎日法華經六部づつ六人して、第三年まで志し候ふ。妾なくては無沙汰あるべし。委しく申しつけて參るべし」と申しければ、母は「實の御志有難くこそ候へ。あひ構へて絶えずとひ訪はれ參らすべし」とて、泣く泣く打ち別れにけり。實にや有爲轉變のならひ、花は根に歸り、鳥は古巢に入り、日月

五衰一枯衰
の誤歟
松風に一
本に「なし
藁一屋根瓦

天に傾き、松柏の青き色も、遂には五するの時あり。芙蓉の仇なる形は、松風に破るよ
例、歎きても餘あり。悲みてもたえず。只一筋に佛道を願ふ時は、草木國土悉皆成佛と
ぞ見えける。さても大將殿御出により、富士の裾野の御館、藁を並べ軒をつゞけ、數あ
りしかども、御狩過ぎしかば、一字も残らず元の野原になりけり。され共残るものと
ては、兄弟の嗔恚執心、或時は十郎祐成となりの、或時は五郎時致と呼ばはり、晝夜闘
ふ音絶えず、思はず通り合する者は、このよそほひを聞き、忽ちに死ぬる者もあり、や
うやう生きたる者は、狂人となりて、兄弟の詞をうつし、苦痛離れ難し、と歎くのみな
り。君聞こし召されて、不便なりとて、ようぎやう上人といふめでたき法師を請じ、弔
はるべきよし細やかにこそ仰せけれ。

六 菅丞相の御事

さても彼の者共が亡靈荒れければ、ようぎやう上人、頼朝に申されけるは、「昔もさる例
こそ多く候へ。辱くも菅丞相の昔、讒言によつて筑紫へ流され、遂に歸京もなくし
て、空しくなり給ひし其の嗔恚残り、雷と成り給ひて、都を傾け給はんとし給ひしを、

いはひ一祀
りあがむる
こと

天台の座主、一字千金の力を以て、やうくなだめ奉り、神といはひ奉るに、威光あらた
にまします、今の天満自在天神是なり。其の外怒をなして、神と崇められ給ふ御事、
承平の將門、弘仁の仲成よりこのかた其數多し。いか様にも此の兄弟の人々をも、神に
御いはひあるべきにや」とぞ申されける。

七 兄弟神にいはるゝ事

さる程に頼朝、つくづく思し召しけるは、此の者共の振舞世に超えし事なり。神にいは
ひても益あるべしとて、せうめいくわう神宮と崇め、富士の裾野に社を立て、松風とい
ふ所を長く御寄進ありけり。即ち彼のよう行上人を開山として、寺僧をすゑ、禰宜神
主を定めて、五月廿八日には、殊に讀經神樂、種々の奉幣を捧ぐる事今に絶えず。それ
よりして彼の處の鬪絶えて、佛果を證するよし、神人の夢に見えけり。尊しともいふ許
なし。されば此の神に参り、敵討たせてたべと祈りければ、必ず叶ひけるとかや。今も
遠國近國の輩、歩を運び仰がぬ者はなかりけり。

曾我物語 卷第十二

一 虎箱根にて行き別れし事

さる程に、大磯の虎は、十郎祐成討死して後、いかなる淵川にも入らばやと思ひけれど、
 も、亡き人の菩提の爲にもなるまじければ、偏に憂世を背き、彼の人の後世を弔はん、と
 思ひ立ち、袈裟衣など調へて、箱根山に上り、百箇日の佛事の折節に、泣くく翡翠の
 飾を剃り落し、五戒をたもちけり。さしも美しかりつる花の袂をひきかへて、墨の衣
 にやつれ果てけり。志の程こそ類すくなき情なれ。母はこれを見て、「我も同じ墨の袂に
 なりて、彼等が菩提をも弔ふべし。今此のつくも髪をつけても何にかはせん」とぞ、歎
 き悲まれける。別當様々に教訓して留められけり。母御前力なく、五郎が遺跡なれば、名
 残惜しくは思へども、此處にて日を送るべき事ならねば、別當に暇を乞ひ歸るとて、虎
 御前に申されけるは、「曾我へ誘ひ、十郎が形見に見参らせ候はん」といはれければ、虎
 「尤も御供申し、互の形見に見え参らせたく候へども、大磯にての追善、又は善光寺へ

翡翠—かは
 せみ、緑髪
 に喩ふ
 つくも髪—
 つくもとい
 ふ海草の如
 く短く亂れ
 たる老女の
 髪

の志候ふ。下向にこそ参り候はめ」とて行き別れけり。

二 井出の館のあと見し事

かくて虎思ひけるは、此の序に十郎の空しくなりし富士の裾、井出の館の跡を志して、箱根を後になして行く程に、其の日もやうく暮れぬれば、三島の拜殿に通夜申し、明くれば三島を出でて、車がへしに立ち休らひ、千本の松原心細く歩み過ぎ、浮島が原にも出でぬ。南は蒼海漫々として、田子の浦波滔々たり。北は松山かうくとして、裾野の嵐颯々たり。未だ旅なれぬ事なれば、彼處を何處と知らねども、志をしるべにて、やうやう歩み行く程に、井出の里に近づきぬ。虎は里の翁に逢ひて問ひけるは、「過ぎにし夏の比、鎌倉殿の御狩の時、敵討つて同じく討たれし曾我の人々の、跡や知らせ給ひて候はど、教へさせ給へ」といひければ、此の翁心ある者にて、虎が顔をつくぐと見て、「若御縁にても渡らせ給ひ候ふか、痛はしき御有様かな。人をも連れさせ給はず、只一人是迄御尋ね候ふ事、なほざりの御志とも覺えず。若十郎殿に御志深く渡らせ給ひし、大磯の虎御前にてましますか。有の儘に承り候はど、教へ参らせん」といひければ、虎

なほざりー
等閑、並一
通り

洲蘆雨は云々
橋直幹の句、和漢朗詠集に見ゆ一本「雨」の上に「夜の」あり
一村松一
群の松

は是を聞き、別の涙乾かぬに、又打ち添へて、賤の男が情の言葉に、愁の色現れて、問ふにつらさの涙、忍びもあへぬ氣色を見て、翁さればこそと思ひて、共に袖をぞ絞りける。「さらば誘ひ申さん」とて、北へ六七町遙に野を分け行けば、亡き人の果てにける草葉の露かとなつかしく、洲蘆の雨他郷の歎、岸柳の秋の風遠塞の情、とかやも、思ひ出でられて、何處ともなく行く程に、日も夕暮の峯の嵐、心細くぞ聞えける。翁ある方をつまざして、「あれこそ井出の館の跡にて候へ。あの邊こそ工藤左衛門殿の討たれさせ候ふ處にて候へ。又彼處は十郎殿の討たれさせ給ひ候ふ處、此處は五郎殿の御生害の處さて又あれに見え候ふ松の本こそ、二人の死骸を隠し参らせたるころ候ふよ」と、懇に教へければ、虎涙をおさへ、且は嬉しく、且は悲しくて、只泣くより外の事ぞなき。一村松の本に立ち寄り見れば、實にも埋れておほえ候ふ土の、少し高く見えければ、過ぎにし五月の末の事なれば、花薄葎生ひ繁り、其の跡だにも見えざりけれども、亡き人の縁と聞くからに、なつかしく覺えて、塚の邊に伏し轉び、「我も同じ昔の下に埋れなば、今更かゝる思ひはせざらまし。黄泉いかなる住處なれば、逝きて再度歸らざる」と、伏し沈みけり。哀なりし有様、譬へん方こそなかりけれ。誠に翁も心ある者なれば、俱に

思ひけん一
此下一本に
「翁申しけ
るは、いか
に」の九字
あり

涙を流しけり。諸共にかくては叶はじとや思ひけん、「御歎候ふとも、其の甲斐あるまじく候ふ。夜になれば、此の處には狼と申すもの、道行く人を惱し候ふ。御留り候ひては叶ふまじく候ふ。これより御歸り候うて、今宵は賤が伏家になりとも御泊り候ひて、一夜を明かさせ給ひ候へ。旅は何か苦しく候ふべき」と申しければ、「嬉しくも宣ふものかな。此の邊懇に教へ給ふに、宿まで思ひより給ふ事の嬉しさよ。左様に怖しきものよ候ひて、身を捨てとも何にかはすべき」とて、塚の邊にて念佛申し、「過去幽靈成佛得脱」と廻向すれば、十郎の尊靈もいか許嬉しく思すらん、と思ひやられて哀なり。虎涙の隙よりかくぞつらねける。

つらき思に
云々―新古
今集家隆の
富士のれの

露とのみ消えにし跡を來て見れば尾花がするゑに秋風ぞ吹く
うき世ぞと思ひそめにし墨ごろも今また露の何と置くらん
かくて井出の邊を行き別れ、其の夜は翁の所に留り、明けぬれば野原の露にしをれつよ、足に任せて行く程に、富士の烟を見るからに、つらき思ひに比へつよ、其處とも知らぬ道のべの、叢ごとの虫までも、啼く音を添へて哀なり。けにたゞだにも秋の思は悲しきに、やつれ果てぬる旅衣、いとどつらさを重ねつよ、たどりくも行く程に、手越の宿

にぞ着きにける。

三 手越の少將に遇ひし事

煙もなほぞ
立ち上る上
なきものは
思なりけり

さても虎は、或小家に立ち寄りて、主の女を語らひて、少將御前を呼び出して、「旅人のこれにてそと申すべき事の候ふ、と申し給へ」といひければ、「易き事」とて呼び出しけり。少將は、虎が變れる姿を見て、いひ出すべき言葉もなく、只涙をぞ流しける。稍有りて虎、泣くく申しけるは、「彼の祐成に相馴れて、既に三年になり候ふ。宿縁深きゆゑにや、又餘の人を見んと思はざりつるなり。此の人うせ給ひぬと聞きし時は、同じ苦の下に埋ればやと思ひしかども、つれなき命ながらへて候ふぞや。されば世を渡る遊者のならひは、心に任せぬことも候ふべし、と思ひて、百箇日の佛事の序に、箱根にて髪を剃して、只一人迷ひ出で、富士の裾野の邊にて、其の人の跡許なりとも見て、憂かりし心をも慰み、序に此の邊近くおはしければ、見参に入り物語をも申し、此の姿をも見え参らせんと思ひて、是まで來りて候ふ」と語りければ、少將も涙を抑へて、「けにくい、か許御歎きと思ひやられてこそ候へ」とて、泣くより外の事ぞなき。重ねて少將がいひ

不興氣なり
すさまじく

けるは、「過ぎにし夏の比、工藤左衛門に呼ばれて酒を飲みし時、十郎殿をも呼び入れ参らせしかば、初て見参に入りしなり。工藤左衛門悪口に、此の殿の思ひきり給へる色現はれて、只今事出で来ぬべしと、座敷もすさまじく候ひしに、何とか思はれけん、酒飲みおし静めて立たれし事、只今の心地して哀に候ふぞや。我々立ち出で、かくとも知らせ申し度く候ひしかども、御身も親しき事、人に知られんも憚ありしかば、さてのみ過ぎしなり。其の夜祐經の宿直の事、めのとの童にて妻戸の鑿はづさせし事、不思議にこそ思さめ。假令一夜の妻なりとも、互の情を思ふべきに、いかなる事にや、いかにもして討たせ参らせんと思ひし事、只偏に御身故ぞかし」と語りければ、虎は此の事をはじめて聞き、十郎殿最期の時、かゝる教をいか許嬉しく思ひ給ひけん、此の告なかりせば、いかでか本意を遂げさせ給ふべきにや、と思なる身は思はれて、いよく涙に咽びけり。

四 少將出家の事

千年の松も

かくて少將は虎が變れる姿を見て、誠に羨しくなれる姿かな。道理かな、ことわりかな。さらぬだに憂世の徒なるを思ふに、千年の松も遂には朽ち、權の露の命ぞかし。ま

云々―白樂
天の詩に松
樹千年終是
朽槿花一日
自爲榮

つひの住家
―終極の住
處

してや女は五障三從の罪深しと申すなり。偶人身をうけながら、殊に我等は罪深き身なり。其の故は只一生の間、人を誑さんと許なれば、心を往來の人につけ、身を上下の輩にまかせ、日も西山に傾けば、夢の中の假の姿を飾り、月東嶺に出でぬれば、誰とも知らぬ人を待ち、夜毎に變る移香の、身に留まりて心を惱し、朝な朝なの手枕の、露に餘波を惜みつと、胸をのみ焦す事、かへすくも口惜しき憂身なり。此の世はつひの住處にあらず。水に宿れる月よりも、はかなしと思ふ折節、此の人々の事を聞き、又御身の變れる姿を見て、いよく憂世に心も留らず、昨日は曾我の里に花やかなりし姿、今日は富士野の露と消ゆ、朝に紅顔あつて世路に誇れども、夕には白骨となつて、郊原に朽ちぬ、といふも理なり。さればにや萬事は無二亦無三也。御身は十郎殿を善智識として、憂世を背き給ふ、我は又御身の姿を善智識として、衣を墨に染めん、と思ひ候ふ」とて、やがて翡翠の髪を剃りおとし、花の袂をぬぎかへて、濃き墨染に更めつと、年廿七と申すに、駿河の國手越の宿を立ち出でけり。世を捨つる身といひながら、心強くも住みなれし、我が故郷を立ち離れにし心の中、誠にやさしく哀なりしとかや。

五 虎と少將法然に逢ひ奉りし事

さる程に、二人は打ち連れだち、麻の衣紙の衾を肩に懸けて、諸國を修行し、信濃の國善光寺に、一兩年の程、他念を交へずして念佛申し、過去聖靈頓生菩提と祈り、又都に上り、法然上人に逢ひ奉り、念佛の法談を委しく聽聞し、いやましに念佛修行すよみけるこそ有難けれ。

六 虎大磯に閉ぢ籠りし事

かくて虎は、山々寺々拜み廻りけるが、さすがに故郷や戀しかりけん、又は十郎の有りし邊やなつかしく思ひけん、大磯に歸り、高麗寺の山の奥を尋ね入り、柴の庵に閉ぢ籠り、一向千壽の經を誦し、九品往生の望怠らず、二人の尼諸共に、一つ庵に床をしめ、行ひすましておはしける。

七 母と二宮の姉大磯へ尋ね行きし事

上品上生、
中品中生、
中品下生、
下品上生、
下品中生、
下品下生、

さても曾我の母御前は、一日片時も世に生存ふべき心地はなけれども、力及ばぬ憂世のならひとて、思はずに年月をぞ送りける。人の子の同じ齡なるを見ても、二人が面影身に添ひて悲しく、人の病にて死ぬるをも、彼等がせめてかくあらば、取りあつかひし物をともいふべきに、かりそめに立ち出でて、再度歸らぬ別こそ、神ならぬ身のつらさなれ。餘の戀しさの折々は、常に二宮の姉を呼び、憂き事どもを語り合ひて、泣くより外の事はなし。さても繫がぬ月日なれば、第三年も送り、七年に當る時に、姉を呼びていひけるは、「今日は此の者共が、七年忌に當り候へば、追善を營み弔ひ侍るなり。さても十郎が契深かりし大磯の虎、百箇日の佛事の序に、箱根にて尼になり、御山より行き別れしが、善光寺に一兩年籠りて、其の後諸國を修行して、今程は大磯に歸り、高麗寺の山の奥に、行ひすまして候ふ由聞き及びしに、いざや虎が住處見ん」といひければ、「妾もさこそと思ひ候ふに、御供申さん」とて、二人曾我の里を立ち出で、中村通山彦山を打ち越えて、高麗寺の奥に尋ね入り、夏草の繁みが末を分け行く程に、袖は涙裾は露にしをれつと、彼のあたりなる里の翁に問ひけるは、「虎御前と申せし人の、尼に成りて住み給ふ所は、何處にて候ふやらん」と問ひければ、「あれに見え候ふ山の奥に、森の候ふ

瓢箪云々
和漢朗詠
橘直幹の句
瓢箪屢空
草滋顔淵
之巷藜藿
深鎖雨濕

原憲之樞
原憲顔淵
と同じく孔
子の弟子に
して共に貧
なりき

所こそ、彼の人の草庵にて候へ」と教へければ、嬉しくも分け入り見れば、誠に幽なる住居にて、垣には葛朝顔這ひかより、軒には垣衣交の忘草、露深くして、物思ふ袖に異ならず。庭には蓬生ひ繁り、鹿の臥處かとぞ見えし。瓢箪しばく空しくして、草顔淵が巷に満ち、藜藿深く鎖して、雨原憲が樞を濕す、とも見えたり。誠に心細くて、人の住處とも見えざりけり。

八 虎出逢ひ呼び入れし事

諸も母や二宮の姉は、やと久しく彼方此方立ち廻り見ければ、中に幽なる聲にて、日中の禮參の勤もはてぬと思しくて、念佛忍びく心細く申しけるを聞きて、尊く覺え、柴の編戸をほとくと叩き、「物申さん」といへば、虎「誰そ」と答ふるを見れば、未だ三十にもならざる者が、殊の外に瘠せ衰へ、いつしか老の姿に打ち見えて、濃き墨染の衣に同じ色の袈裟をかけ、菩提樹の珠數花の帽子とり具して、香の煙に染みかへり、かしこくも行ひ入りたる其の姿、竹林の七賢、商山に入りし四皓も、是にはいかで勝るべきと羨しくぞ覺えける。此の人々を只一目見て、夢の心地して、「あら珍しの御渡候ふや。さ

阿彌陀の三
尊一中央に
阿彌陀佛左
右に觀音勢
至の二菩薩
あり

らに現とも覺えず候ふ。先づ内へ入らせ給へ」とて、二間なる所を打ち拂ひ、「是へ」と請じいれつと、亡き人の母や姉ぞと見るよりも、流るゝ涙を抑へかねけり。母も姉も泣く泣く、庵室の體を見廻せば、三間に造りたるを、二間をば持佛堂にこしらへ、阿彌陀の三尊を東向に懸け奉り、淨土の三部經、往生要集の八軸の一乗妙典も、机の上に置かれたり。又傍に古今、萬葉、伊勢物語、狂言綺語の草子どもちらされたり。佛の御前に六時に花香あざやかに供へ、二人の位牌の前にも花香同じく供へたり。二宮の姉いひけるは、「あら有難の御志の程や。これを忘るまじき事と思ひ給ひて、二人の位牌をたて弔ひ給ふ事よ。偕老の契淺からずと申すも、今こそ思ひ知られて候へ。但し十郎殿許をこそ弔ひ給ふべきに、五郎殿まで弔ひ給ふ事の有難さよ。妾は現在の兄弟にて候へども、是程までは思ひよらず。いづれも前世の宿執にて、善智識と成り給ひぬ」と、いひも果てず涙を流しければ、母も少將も聲立つる許にぞ悲みける。やとありて母いひけるは、「十郎が事忘るゝ間も候はねば、常にも參り見奉りたく候ひしかども、心に任せぬ女の身なれば、人の心をも憚るなどとせし程に、今までかゝる御住居をも見參らせず候ふ。彼の者共が七年の追善、曾我にて取り營み、また御有様をも見參らせたく候うて、是なる女房を誘ひ

をさあい者
—幼者

天上の五衰
—天人も死
期ありて五
種の死相を
顯す、第一
衣染塵埃、
第二花鬘萎
悴第三兩腋
汗出第四臭
氣入身第五
五不樂二本
座

來りて候ふぞや。又親子恩愛の至つて切なる事、人の申しならはすをも、我が身の上かと思はれ候ふ。年月やうく過ぐれども、忘るゝ事も候はず。されば様を變へんと思ふも、をさあい者ども棄て難くて、思ひもきらす候ふ。是と申すも、志の至つて切ならざるかと、我が身ながらもうたてく覺え候ふ。御身もさして久しき契にてもましまさず、其の上所領持ちて便ある事ならねば、思出がましき事もなし。只偏に前世の宿業にひかれ、互に善智識になり給ひぬと、餘に尊く哀におほえて、妾までも一つ蓮の縁を結ばよやと思ひ候ふなり。凡人間の八苦、天上の五衰は、今に始めぬ事にて候へども、前業の拙き身なれば、無常の理にも驚かず、つれなく憂世にながらへ候ふ。我が身ながらもあさましく候ふ。然るに五障三從の身ながらも、幸に佛法流布の世に生れて、出離生死の道を求むべく候へども、女人の愚さはそれも叶はず候ふ。面々は此の程思ひとり給ふ事なれば、後生の助かるべき事をも知らせ給ひて候ふらん。あはれ語らせ給へかし。叶はぬまでも心にかけて見候はん」といひければ、虎涙を止めて申しけるは、「誠にこれまでの御入夢の心地して、御志あり難く思ひ候ふ。かゝる身となり果てぬるも、然しながら、十郎殿故と思ひ奉れば、時の間も忘るゝ事も侍らさ。此の世は不定の境なれば、哀別離苦

三時—晨朝
日中、黄昏

の悲を翻へして、菩提の彼岸に至る事もや、と聖經の要文どもあらく尋ね求め、然るべき善智識にも逢ひ奉るか、諸國を修行し都に上り、法然上人に逢ひ奉り、念佛一行をうけ、一筋に淨土を願ひ候ふなり。あの尼御前は、わが姉にてましまし候ふ。自らを羨みて同じく共に様を變へ、一つ庵に閉ぢ籠り行ひ候ふなり。今思ひ候へば、此の人は發心のたよりなりけりと嬉しく覺え候ふ。其の上妾不思議に、釋尊の遺弟に連りて、比丘尼の名を汚し、辱くも本願の稱名を頼み、三時に六根を清め、一心に生死を離れん事を願ひ候ふ。本願いかでか誤まり給ふべきかと、疑の心も候はず。五郎殿も同じ烟と消え給ひしかば、二人ともに成佛得脱と弔ひ奉らん爲に、二人の位牌を安置して候ふなり。諸法悉縁機とて、何事も縁にひかれ候ふなれば、二人共に順縁逆縁に、得道の縁とならん事疑あるべからず。凡分段輪廻の里に生れて、必ず自滅の恨を得、妄想如幻の家に來ては、遂に別離の悲あり。出づる息の入る息を待たぬ世の中に生れ、剩遇ひ難き佛教に遇ひながら、此の度空しく過ぐる事、寶の山に入り手を空しくするなるべし。あひかまへて佛道に御心をかけ、淨土へ參らん、と思し召すべきなり」と申しければ、母も二宮の姉も渴仰肝に銘じて、隨喜の涙を流して申しけるは、「世路に交はるならひ、世の

中の營に心を懸け、再度三途の故郷に歸り、いかなる苦患をか受け候はんずらん、とかねて悲しく候ふ。されば尊き人にも逢ひ奉り、女人の得道すべき法門聞かまほしく候へども、然るべき縁なければ、とかく過ぎ行き候ふ處に、今の念佛申すとて、人なみくゝに稱へ申せども、何と心を持ち、いかやうなる趣にて往生すべく候ふや。かつて思ひわけたる事も候はず。同じくは序に委しく承り候はゞ、いか許嬉しく候ひなん」とぞ言はれける。是偏に彼の者共の死したりける縁によつて、佛道にこころざしけり。誠に彼の者死して親に思ひをかけよるとは雖も、佛道にも入りなば、一つの孝行にも成りなん、とぞ思はれける、有難くこそ覺えけれ。

少將法問の事

かくて母も二宮も、「佛道の趣委しく聞かまほしくこそ候へ」と申しければ、虎少將の方を見やり少し打ち笑ひ、「姉御は念佛の法門ども知らせ給ひて候へ。申して聞かせ參らせ給へ」と申しければ、「妾も委しき事は知り參らせず候ふ。一年都にて、法然上人仰せられしは、抑生死の根源を尋ね候へば、只一念の妄執にひかされて、由なく法性の都を

畜生三がい
—三がいば
残害か
泥梨—梵語
奈落に同じ
地獄のこと

三密—身密
語密意密と
て手に印相
を結び口に
陀羅尼を唱
へ意に大日
如来を念ず
ること

迷ひ出でて、三界六道に生れ、衆生とはなれり。されば地獄の八寒八熱の苦、餓鬼の饑饉の愁、畜生三がいの思、其の外天上の五衰人間の八苦、一つとして受けずといふ事なく、上は有頂天を限り、下は泥梨を極として、出づる事はなきが故に、流轉の衆生とは申すなり。然りと雖も宿善や催しけん、今人間に生れぬ。内に本有の佛性あり、外に諸佛の悲願あり。人木石に非ず、發心せばなにか成佛得脱なからん。それにつきて修行區々なりと雖も、我等如きの衆生は、諸經の徳に叶ひ難し。先法然坊が如くは、七千餘卷の經藏に入りて、つらく出離の要機を案するに、顯につけ密につけ、開悟易からず。事といひ理といひ、修行じゆしがたし。一實圓融の窓の前には、卽是の妙觀に疲れ、三密道諦の床の上には、又現世のせうにう現し難し。然る間世の業をはかりて、淨土を願ひ他力を頼みて名號を稱ふ。誠に淨土の經文は、直指だうじやうのもくぞくなり。有智無智誰の人か歸せざらんや。既に正相早くくれて、戒定慧の三學は名のみ残りて、有經無人、有名無實也。殊に女人は五障三從とて、さはりある身なれば、卽身成佛は先おきぬ、問法結縁の爲に靈佛靈社に詣づるさへ、踏まざる靈地あり、拜せざる佛像あり。天台は桓武の御願、傳教の御建立なり、一乘の峯高うして眞如の月朗なりと雖も、五

八葉の嶺
靈山を蓮花
の八葉に比
していふ

内典外典一
佛經と漢籍

障の闇照す事なし。高野山は嵯峨の天皇の御宇、弘法大師の地をしめし、八葉の嶺八つ
の谷、れいよくとして水潔しといへども、三從の垢を濯がず、其の他金峯山の雲の上、
醍醐三井寺霞の底深し。白山書寫の寺、斯様の所々には女人近づく事もなし。されば或
經の文には、三世の諸佛の眼は大地に落ちて朽つるとも、女人成佛する事なし、といへ
り。又或經の文には、女人は地獄の使なり、能く佛の種を斷つ。外の面は菩薩に似たれ
ども、内の心は夜叉の如し、といへり。されば内典外典に嫌はれたる處に、彌陀如來こ
そ、極重惡人無他方便と誓ひて、別に又女人成佛の願を起し給ふ。か程に、懇に憐み給
ふ事を、信ぜず行ぜずして、又三途に歸らん事、喩へば耆婆が萬病を癒す藥に、種々の
藥をなんりやう合せりとは知らざれども、服すれば則ち癒ゆ。病極めて重き者の、藥
許にてはと疑ひて服せずば、耆婆が術も扁鵲が醫方も益あるべからず。其の如く煩惱惡
業は極めて重し。此の名號にてはいかごと疑ひて、信ぜず行ぜざらんは、彌陀の本願も
釋迦の說法も空しかるべし。抑藥を得て服せずして死せん事、崑崙山に行きて玉を取
らずして歸り、旃檀の林に入りて梢をまたずしてはてなば、後悔するとも由なし。其の
上五劫思惟、兆載永劫の萬善萬行、諸波羅密の功德を、三字にをさめ給へり。されば阿

字十方三世佛、彌字一切諸菩薩、陀字八萬諸聖經といふ時は、八萬經法諸佛菩薩も、名
號は廣大の功德となれり。されば天台には法報應の三身、空假中の三諦なりと釋しまし
まし候ふ。森羅萬象せんが、大ち、彌陀に漏れたる事なし。是によつて只専ら彌陀を以つ
て法門の主とすと釋し給へり。じやうゑの行には威徳たり、大りそくせんしやう功德と
説き、ほふるの行には、一萬三千佛を、高さ十丈に、黄金を以つて十度作り供養せんよ
りも、一遍の名號は勝れたりといへり。善智識の教を深く信じて、南無阿彌陀佛と
と、唱ふれば、三祇百大劫の修行をも超え、塵沙無明の惑をも斷ぜず。致使凡夫念即
生、不斷煩惱得涅槃とて、終焉の時は一さんの心を變化して、觀音勢至無數の聖衆、
化佛菩薩踴躍歡喜して、須臾の間に無爲の報土へ参りなば、無邊の菩薩を同學とし
正覺の如來を師とし寶地に遊び樹下に往きて、鸚鵡、舍利、迦陵頻伽の聲を聞き、空
無常無我の四德波羅密の悟を開き給ひなば、過去のをんしよ世々の父母、妻子眷屬有
縁の衆生を導かん爲に、とうねん猛火の焰に交り給ひ、紅蓮大紅蓮の氷に入り結ふとも、
解脱の袂は安樂として、濟度利生し給ふべし。但し往生の定不定は信心の有無によるべ
し。ゆめく疑ふ事勿れ、と宣ふを、われくは聽聞申して候ふ」と申しければ、母感涙

をおさへていひけるは、「今の法門聽聞 申し候へば、信心肝に銘じ有難く候ふ。今より後は方々の御弟子にて候ふべし」とて、三度伏し拜まれけり。有難かりし事どもなり。

十 母と二宮行き別れし事

初夜一夜を
初中後の三
時に分つ初
夜は八時頃

さる程に日もやうく傾きて、高麗寺の入相も聞ゆれば、餘波盡きせず思へども、各立ち出でて二宮の里へとてこそ歸りけれ。虎少將は門送して後の隠るゝ程見おくり、涙と共に庵室に歸り、初夜の禮讃はじめて、念佛心細くぞ申しける。其の後人々の行方を聞けば、各宿所に歸り、聞きつる法門の如く、造次頭沛一心不亂に念佛す。昔は夫婦偕老の別を慕ひ、今は兄弟のかく成り行く事の思ひや積りけん、老病といひ歎といひ、六十の暮方に念佛申して、遂に往生しけるとぞ聞えける。さて二人の尼御前或夜の夢に、十郎五郎打ち連來り、頭には玉の冠を着、身には瓔珞を飾り、光明赫奕として、各を伏し拜み申しけるは、「此の間念佛申し經を續み、懇に弔ひ給ふ故に、兜率の内院に參る。これ然しながら、夫婦偕老の契深きによつて、無爲眞實の解脱の因となる、其の恩徳は億々萬劫にも報じ難し」とて虚空へ飛び去りぬ。虎夢覺めて、只現の心地して思ひ

三明一第一
に宿命明と
て宿世の事
に通達する
智慧第二に
天眼明とて
未來世の事
に通達する
智慧第三に
漏盡明とて
現在の苦を
知つて一切
の煩惱を斷
盡する智慧

けるは、五ちうの闇晴れ、三明の月朗にまします、大聖釋尊さへ、耶輸陀羅女の別を思し召す、况や我等此の年月戀しと思ふ處に、目前に兄弟を夢に見て、昔戀しくなりぬ。されば夜の猿は傾く月に叫び、秋の虫は枯れ行く草に悲むとかや。鳥獸までも哀別離苦を悲むと見えたり。然れば此の道は、迷ひなば共に惡道の輪廻斷ち去り難し。悟りなば皆正等菩提の因縁なりぬべし。偕老同穴の契誠に顯はれ、九品蓮臺の上にては、もとの契を失はず、一蓮に座を並べ、解脱の袂を絞るべし」とて、少將も共に涙をぞ流しける。さて彼の二人の尼、志淺からずして、虎が嶺に上りて花を摘めば、少將は谷に下りて水を掬び、一人花を供ふれば、一人は香を供じ、俱に一佛淨土の縁を結ぶ。谷の水峯の嵐發心の媒となり、花の色鳥の聲自ら觀念の便となる。つくづく思へば萬物轉變の理、しさうをんるの習、三界より下界に至るまで、一つとして遁るべき様なし。日月天に廻りて、有爲を旦暮に顯はし、寒暑時を違へず、無常を晝夜に盡す。されば漢の高祖の三尺の劍も、遂に他の寶となり、秦の始皇の玻璃の都も、おのづから荆棘の野邊となる。彼を思ひ是を見るにも、唯偏に浮世を遁れ、誠の道に入るべきものをや。かとりし程に二人の尼、行業積り七旬の齡たけ、五月の末つ方少病少惱にして、西に向ひ肩

を並べ膝を組み、端座合掌して、念佛百遍稱へて、一心不亂にして、音樂雲に聞え、異香薫じて、聖衆來迎し給ひて、眠るが如く往生の素懷を遂げにけり。高きも卑しきも、老少不定の世の習ひ、誰か無常を遁るべき。富も寶も、遂には夢の中の樂なり、殊に女人は罪深き事なれば、念佛に過ぎたる事あるべからず。かやうの物語見聞かん人々は、狂言綺語の縁により、あしき心を翻へし、誠の道に赴き、菩提を求むる便となるべし。其の心無からん人は、かゝる事を聞きても何にかはせん。よくよく耳に留め心にそめて、亡き世の苦惱を遁れ、西方淨土に生るべきものなり。

曾我物語終

義經記・曾我物語索引

(語句は發音に従つて五十音順に排列し其假名遣に拘泥せず)

| | | | |
|----------|--------|------------|--------|
| ○愛甲の三郎 | 七〇二ノ九 | ○阿闍世王 | 七五四ノ五 |
| ○あいのいけ | 三〇一ノ二四 | ○阿修羅王 | 五八ノ二〇 |
| ○青墓の宿 | 三〇ノ五 | 同 | 七四七ノ二四 |
| ○あがりの松 | 三〇三ノ一 | ○安宅のわたり | 三〇一ノ二四 |
| ○悪源太義平 | 二ノ一 | ○安達の新三郎 | 二四七ノ三 |
| ○悪七兵衛景清 | 三ノ三 | ○安達四郎清忠 | 三七七ノ二 |
| ○朝妻 | 五三七ノ六 | ○あつかし点(地名) | 一六ノ八 |
| ○朝日御前 | 四二九ノ八 | ○熱田の明神 | 四三六ノ五 |
| ○朝比奈義秀 | 五八一ノ二 | ○阿難尊者 | 六〇三ノ三 |
| 虎の迎へ | 五八九ノ六 | ○あれはの松 | 二八八ノ八 |
| 五郎の草摺を切る | 六四九ノ六 | ○阿野の禪師 | 三三ノ七 |
| ○愛鷹山 | 六四九ノ六 | ○相澤彌五郎 | 三九三ノ六 |
| | | ○安西の彌七郎 | 七〇三ノ一 |
| | | ○安樂寺 | 八ノ二 |
| | | ○荒乳の山の傳説 | 二八三ノ二 |
| | | イ、キ | |
| | | ○いわう禪師 | 一九八ノ五 |
| | | ○池の尼 | 一〇七ノ二 |
| | | ○伊勢のかんひら義連 | 四二ノ二 |
| | | ○伊勢の三郎 | 四二ノ八 |
| | | 其素性 | 九ノ一 |
| | | 義經に従ひ奥州に下る | 一三三ノ一 |
| | | 土佐坊と戦ふ | 一七〇ノ二 |
| | | 吉野の評議 | 三四四ノ五 |
| | | 自害 | 二四二ノ一〇 |
| | | ○磯の禪師 | |
| | | 鎌倉に下る | |

| | | | | | |
|-------------|--------|------------|--------|-----------|--------|
| 八幡殿の舞 | 二五九ノ四 | ○伊東九郎祐清 | 四一五ノ三 | 十郎を見咎む | 六六ノ六 |
| ○鼯鼠の不思議 | 四六ノ一〇 | 大見八幡を打つ | 四三ノ八 | 五郎の顔を打つ | 七三ノ四 |
| ○一法師丸 | 七二ノ五 | 父の計を頼朝に密告す | 四四ノ二 | ○井上左衛門 | |
| ○一萬(曾我十郎参照) | | 上洛、戦死 | | 荒乳山の關 | 二八ノ一 |
| 父の死、母の訓言 | 四〇九ノ一四 | ○伊東次郎祐親 | 四〇九ノ二 | 義經を遇す | 三〇〇ノ一 |
| 亡父を慕ふ | 四二ノ八 | 所領の争 | 三六三ノ八 | ○いほうの五郎盛直 | 一三五ノ一四 |
| 雁を見て亡父を戀ふ | 四五三ノ二 | 金石を引受く | 三六七ノ五 | ○今の劔 | 三四九ノ四 |
| 母の意見 | 四五六ノ一三 | 奉行所買収 | 三七三ノ三 | ○いや櫓の頭 | 三九ノ四 |
| 頼朝に召さる | 四六三ノ三 | 防戦の用意 | 三七五ノ二〇 | ○入間川 | 五二六ノ一三 |
| 斬られんとす | 四六八ノ一〇 | 祐重を悼む | 四〇五ノ九 | | |
| ○一卷の書 | 四七ノ七 | 出家 | 四二ノ六 | ウ | |
| ○伊豆次郎祐兼 | | 河津の妻に再婚を勸む | 四三ノ二 | ○有爲の都 | 六三九ノ三 |
| 五郎請取り | 七五ノ八 | 千鶴を柴漬にす | 四三ノ六 | ○浮島が原 | |
| 流罪、死 | 七七ノ二 | 斬らる | 四四ノ八 | 頼朝義經の對面 | 一〇五ノ一 |
| ○和泉 | 一一ノ三 | ○伊東の禪師 | 七三ノ六 | その由来 | 六四五ノ五 |
| ○泉の冠者 | 三五ノ九 | ○伊東武者 | 三六六ノ七 | ○牛若(義經参照) | |
| ○出雲路の神 | 四四ノ五 | ○犬房 | | 其穎悟 | 六ノ五 |

| | | | | | |
|-----------|--------|------------|--------|----------|-------|
| 正門坊の謀叛教唆 | 一〇ノ四 | 最後 | 一三三ノ三 | ○王麗與 | 五五六ノ六 |
| 剃髪を拒む | 一一ノ六 | ○越王勾踐 | 五五三ノ二 | ○大津次郎 | 二七九ノ二 |
| ○碓氷の峠 | 五八ノ三 | ○江戸の太郎 | 一〇ノ二 | ○往藤内 | |
| ○臼杵の八郎 | 七〇三ノ一〇 | ○海老名の源八 | 三九〇ノ二四 | 祐經の宴席 | 六六八ノ二 |
| ○宇田の小四郎 | 七〇三ノ九 | ○江間の小四郎 | 二二四ノ六 | 祐經に意見 | 六七ノ一 |
| ○宇治の橋姫 | 六四二ノ一 | かやの密告 | 二二八ノ三 | 討たる | 六九五ノ二 |
| ○宇都宮彌三郎朝綱 | 四七二ノ二 | 忠信と戦ふ | 二二八ノ三 | ○大野の湊 | 三〇四ノ四 |
| 曾我兄弟の命請ひ | 五三六ノ一 | 勸修坊を遇す | 二二〇ノ三 | ○大庭三郎景親 | 四四三ノ六 |
| 宇都宮の狩 | 六〇三ノ二 | 討たる | 四四九ノ二 | ○大庭平太景信 | 三七七ノ六 |
| ○優填王 | 六二五ノ七 | ○燕國の王猛火の雨乞 | 三五九ノ五 | 頼朝を慰む | 三八九ノ二 |
| ○うんしやうれう | 七〇三ノ七 | ○慧亮和尚 | | 宴席の評議 | |
| ○海野小太郎行氏 | | | | ○大見の小藤太 | 三七六ノ七 |
| エ、エ | | オ、ヲ | | 祐經の依頼 | 三七九ノ一 |
| ○穎川 | 五八ノ二〇 | ○大内三郎 | 三六ノ二四 | 伊東を狙ふ | 四〇四ノ三 |
| ○江田の源三 | 一一ノ三 | ○大藏太夫光任 | 一七ノ一〇 | 河津三郎を討つ | 四一六ノ二 |
| 土佐坊の下人を嘸す | | ○奥州丸 | 七三ノ一〇 | 討たる | 一三九ノ二 |
| | | ○王昭君 | 四二四ノ六 | ○緒方の三郎維義 | |